

淨土

二月號



中村 辨 康 著 (増補改訂版)

信仰讀本

定價二二錢 (送料共)

四六版 八〇頁

總ルビ付き

正しい信仰への手引き！それこれ程平易明快に
取扱つた物はかつて無いと云つてもよい！

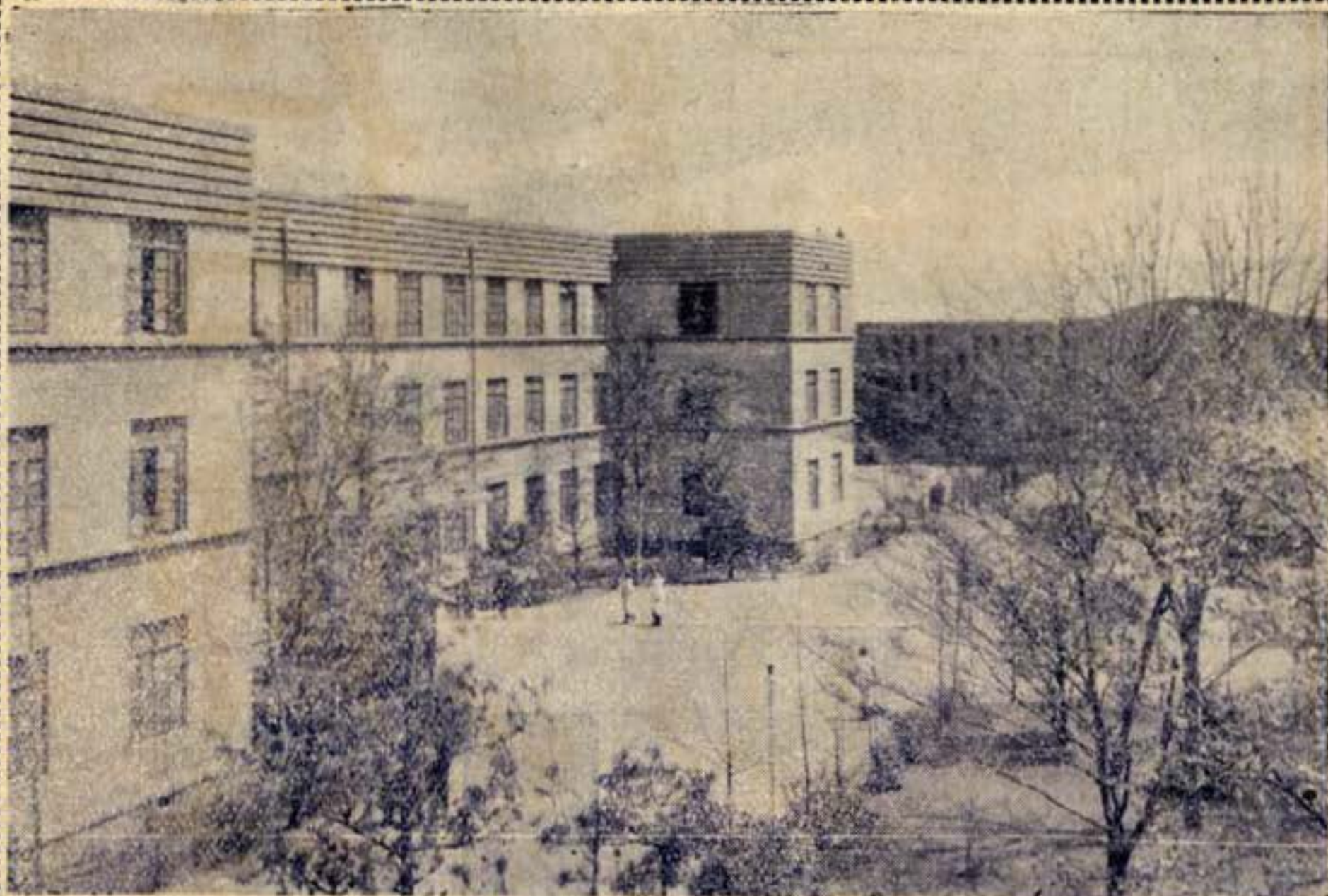
この書が近來の名著として出版界の記録を破る賣行きを
示したのは決して偶然ではない。

内 容

第一章	悟りと救ひ
第二章	宗教と人間の望み
第三章	信ずる心持
第四章	信仰の本尊
第五章	信仰を得る迄

今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざるをかこつ人々に普くこの書を捧げたき念願の下に、著者に乞ふて、更に平易にし、著者の思想的擴充による補ひをもなして、こゝに増補改訂版の出版をなしたのである。雜誌「淨土」の著者の名講義の愛讀者は、これによつて更に高い信仰の段階に進まねばならない。

◇ 發行所 ◇ 法然上人鑽仰會 ◇



[部一の舍校新]

注意

豫科第三年、専門部高等師範科第二、三年、
同佛教科第三年ハ補缺募集ヲセズ

學

部

佛教學科・宗教學
科・哲學科・史學
科・英文學科・國文
學科・支那文學科
募集人員 若干名

大學 豫科

一學年 募集人員 百二十名
二學年 補缺 若干名

専門部 佛教科

一學年 募集人員 百名
二學年 補缺 若干名

専門部 高等師範科

一學年 募集人員 六十名

◇特典

學部卒業者ハ文學士ト稱スルコトヲ得、更ニ中等教員又ハ
高等教員無試験檢定資格アリ。高等師範科卒業生ハ國語・
漢文・公民歴史、豫科ハ英語ノ中等教員無試験檢定アリ。

◇願書受付 四月九日迄

◇入學試験開始 四月十日

◇詳細ハ學則參照、郵券二錢封入ノ上申シ込マレタシ。

大正大學

東京市豊島區西巢鴨

(省線、市電至極便)

電話大塚(68)八九四番・九九六番



◇ 淨 土 第二卷 二月號 目次 ◇

- ・表紙……………井上正春
- ・扉……………青柳喜兵衛
- ・目次カット……………森田沙夷

說苑 國體觀念の高揚と淨土教 椎尾辨匡 (二)

講演 法然上人の女性觀 佐藤春夫 (五二)

隨筆 不如意と念佛……………山中峯太郎 (三六)

お じ ぎ……………佐藤賢順 (八)

訪問記事 黒衣の女性達……………本誌記者 (二〇)

信 仰 相 談…………… (四九)

小説 旅路の芭蕉 (吉田貫三郎畫)……………宇野浩二 (二四)

信仰説話 事業に對する考へ方……………上中甲堂 (一二)

渡邊海旭先生の生立……………赤尾光雄 (一四)



隨筆 早春の花……………眞野正順（三四）

趣味講座 法然上人の横顔……………脇本樂之軒（五二）

大衆小説 地獄に陥ちる武士（玉井徳太郎畫）……………湊邦三（四二）

隨想 榮華・凋落・光明……………清谷閑子（六二）

信仰讀物 迦毗羅王家の二婦人……………岩野喜久代（三八）

映畫物語 街の笑くぼ……………（五八）

だまん 味覺の玩具箱……………正岡容（六〇）

信仰體驗談

日露戰爭を動機に……………櫻井宇市（六六）

運命と共に……………江上伸三（六八）

阿彌陀經講義

淨土の實現

中村辨康

（七一）

信仰相談……………（六四）

淨土短歌……………（五七）

編輯後記……………（八〇）

淨土俳句……………（三六）

之ぞ斷然優秀の

消炎鎮痛貼布藥

- 一、皮膚に貼つたまゝ入浴差支へなし
- 一、貼り換へず共一晝夜藥効を持続す
- 一、綺麗故不快の貼りアトを残さず
- 一、藥臭もなく悪性のかぶれも起さず
- 一、何れへ貼つても柔軟伸縮自由自在
- 一、ロートエキスを含む最新の威力



佳人の膏藥

ママプラスター

愛讀者御優待

御住所氏名明記の上大木合名會社宛御
申込下されば本誌讀者に限り見本贈呈

適應症

神經痛 肩の凝り
ウマチスの痛む所
運動に因る筋肉並關節痛
勞働に因る筋肉並關節痛
打撲 捻挫 胸痛
手足首背腰の痛む所
乳腺炎 齒痛 靴擦
疝氣 腫物 整傷



大木五藏園本舖

大木合名會社

東京市神田區鍛冶町三
電話神田代表壹壹〇五番

各藥店にあり

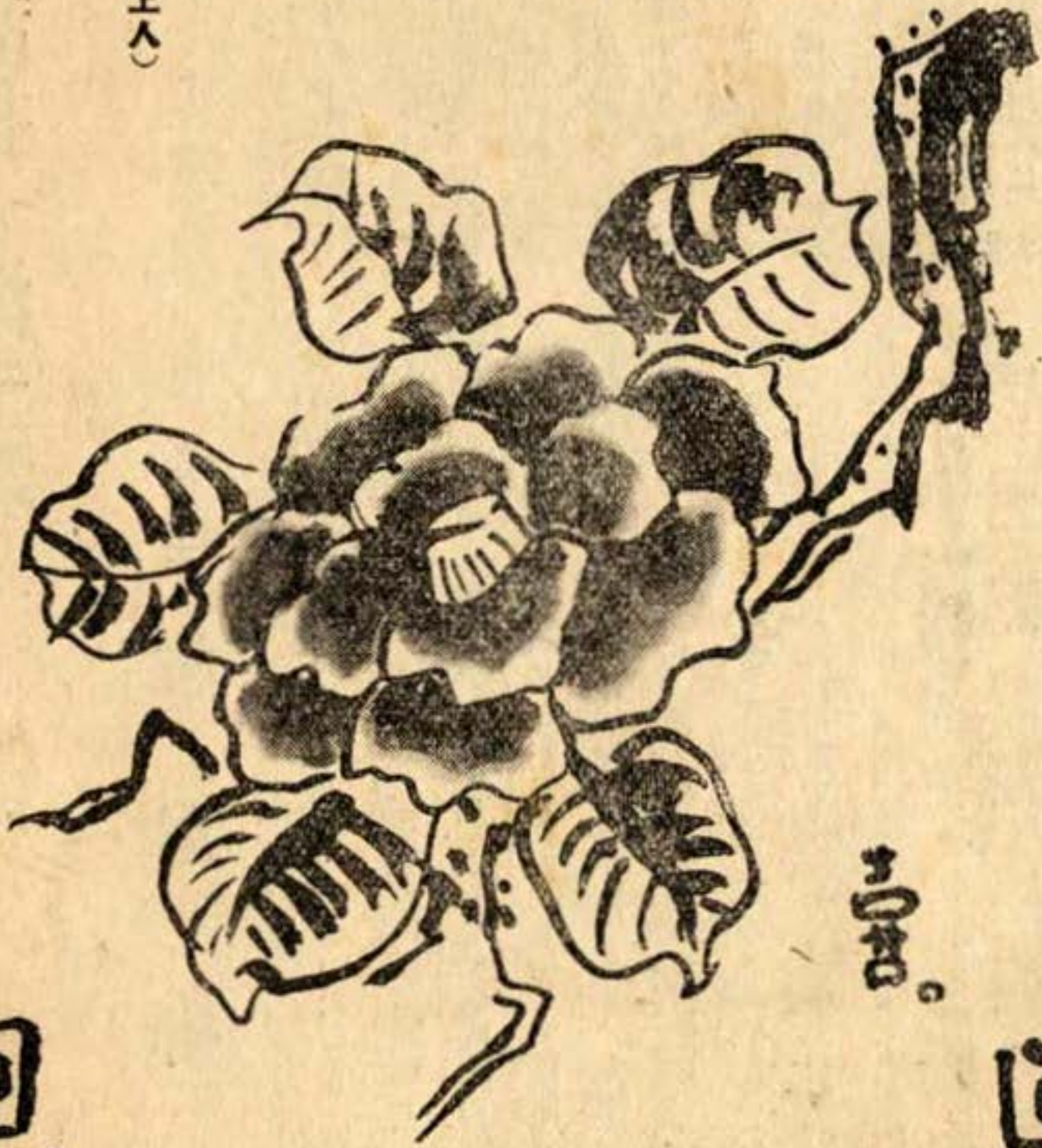
十錢
二十錢
五十錢
一圓

淨土

二月號

有縁の人の爲には
身命財を捨てゝも
偏に淨土の法を説くべし。
自の往生の爲には
諸の羣衆を離れて
専ら念佛の行を修すべし。

(法然上人)



國體觀念の高揚と淨土教

文學博士

椎 尾 辨 匡

物事みなこれを別々の方面から考へると、天下一として同じものはない。松か枝の一々の葉も、皆互に異なる。

昨年起つた色々の事件を見るに、憲法問題、國體明徴、軍部肅正、選舉肅正、宗教教育、文教審議、農村問題、商工發展、滿洲皇帝御訪日、朝鮮施政廿五年、治臺四十年記念、北支問題、暹羅顯官來訪、熱田神宮遷座奉祝、ロンドン軍縮會議等々、列ね來れば一として別ならざるものはない。然れども一たび内面よりその本質を眺めると、全く同じものがある。——それは國體的考察が高められて居ると云ふことである。

憲法問題をば某博士某高官のことゝすれば、偏つた一部の問題であり、又これを國家法人説、天皇機關説としてのみ扱へば、大きいやうでも、それだけに限られたことであるが、實は日本の憲法を、國際通念尊重の名の下に、英・佛・白・米等の憲法解釋ばかりに捉えられて、日本の國體を主とする考が足りないから、國

體的憲法を明かにせよと云ふ主張の高まつたことの顯現である。

國體明徴の問題は、此れと關係して内閣も聲明し、學校もその徹底を期するため努力したから、これを憲法問題と混ずる人もあるが、先年小橋文相などが教化總動員までして躍動されたのも國體明徴であつて、それは赤化防止が主であり、左傾右傾の動きに伴ふものでもあるから、決して單なる憲法問題に伴ふものではない。併し乍ら此等の主張が全面的に國體的考察たることは勿論である。軍部肅正、それは皇軍を私して相爭ふを禁ぜんとするもので、兵馬の大權一に天皇に在らせらるゝことを明かにせんとするもの、即ち國體的軍權を完うせんとするの運動に外ならない。同じく肅正と云ふも選舉肅正は、投票賣買などを禁廢せんとするもので、憲法問題とも、軍部問題とも、別の様であるが、選舉の肅正は、政黨や議會の廓清、政治の肅正を望むもので、國體的政黨、國體的政治の發達を要求するものである。既成政黨、政權

把握の渦中に在る人々の中には、「何ッ！國體的政黨！我等を國體に忤ると云ふか」と憤慨する人もあらう。蓋しそれ等を直ちに非國體的政治なり、反國體の政黨なり、と云ふは過言であらう、が併し、過去の政黨は専ら英・佛・米等の模倣を事とするもので、日本の國體的政黨を本とするものとは云はれない。これ曾て伊藤公が野に下り、自ら國體的政黨の建設を試みんとし、西園寺公がその遺緒を繼續せんとせられたのも、此のためである。固より此二人のみではなく、此のことに關心を持った幾多の人々がありながら、その出来ぬ事に多くの人が失望し、離黨し、或は政黨を呪詛することゝもなつたと見るべき點も甚だ多い。

政民等の解消論や、舉國一黨論や、フアツショ運動等も只時勢と云ひ、泰西模倣と云へる所もあるが、これは眞に政黨の行くべき所へ行かんとする動きとも見える。而して此等全體の眞の動きは、「國體的政黨へ！」「國體的政治へ！」である。此に至つて憲法問題、軍肅問題と同様に、國體の高揚の觀念から來て居るのであることが解る。

等しく教育も單なる人間教育であつたものに、モツと國體的教育たることを要求し、農も商も工も單なる利己營利のものでなく、國體的業務たることを強めて來たのが近時の現象である。恰も軍人の國體精神に動く所に尊さがあるやうに、商人は平常斷え

ず世界に向つて、日本の正義、平和、慈悲等を布く重要な任務のあることを自覺して、邁進することが必要であり、殊に最近南洋やアフリカへ販路を擴大するものゝ實際でなければならぬ。此の如く國體的諸現象の出現は、決して偏狹なる保守性を強調するものではない。

この尊き國體性が雞林十三道に育つた跡は、これを施政二十五年に見、臺灣澎湖に溢れることはこれを治臺四十年に察することのできる。又これを滿洲に、その皇帝の御訪日に、北支問題に、暹羅顯官の來航に、ロンドン軍縮會議に於ける我が全權の不脅威不侵略の主張に徴しても、如何に國際的世界的に動きつゝあるかを知ることができる。即ち昨年起れる内外幾多の事件は、その國體高揚の點に於て一致する。

かゝる國體的考察は何を重視し何を高調するものであるかと云ふに、それは世界人類の歴史生活に於て、日本國體の優越性を認めたからである。日本國體の尊嚴は、その悠久なる生命の上に現はれたものである。全世界は一として生命相ならざるはない。巖石の凝然たるも、草木の茂生するも、蟲魚の蠢動するも、禽獸の飛躍するも、その相互に異りつゝ各々生命相である。然るに人類となりて、一層高度の生命相を露はしつゝ尙迷信、邪見等の誤謬

甚だ多く、殺盜、暴行、擾亂、革命となり、輪廻流轉となりて眞に生き進むことができないのは、獨り獨りが此の生命相を全うせざる結果であり、且つ此等の人々が構成する國家社會となりては、一層大なる衝突戦争となりて、衰弊滅亡するもの多きに、獨り我が邦は、此の間に在りて、悠久なる國運を作し、不滅に彌榮に發達窮まりなき國體を確保す。これ眞に世界の驚異であり、信仰すべき事實である。

誠にこれ宗教の求め哲學の究めんとするもの、そのものである。唯物の物や、唯心の心でなく、天地を包む大生命であり、物心一如の眞實相であり、社會共生に顯はす所の現實であつて夢の如き果なき憧れではない。この無窮の進運たる國體相こそ阿彌陀の國であり、自我衝突を恣にしつゝ、打つもの撃たるもの、相率ゐて俱滅し行く世相からは、彼岸に輝く淨土として欣求せらるべき國土である。厭離穢土、欣求淨土は此の「反國體」から「順國體」への動きに於て痛感せられる所である。

特權階級の満足より一般大衆へ！貴族宗門より庶民佛教へ！と展開せられたのが、法然上人の一面で、此の法は『上龍樹天親を勸め、下十惡五逆の衆生をも救ふもの』であり、愚痴罪惡下劣を攝するものであり、無教育者も、殺生人も、強盜も、娼婦も、同

じく往生し得る唯一の道であつた。これ獨り上下一般に通ずるのみでなく、惡念亂想の平常心、資生産業の渡世の儘、南無阿彌陀佛して現世より未來まで眞に生き往かんとする道であり、現在も當來も三世を貫き、亂想も變態も正常も併せ收むるものとして、近代信仰の大衆の自由と正常とを主張せる點に於ては、上人より三四百年後に發達せる、歐洲の宗教改革よりも更に進歩し徹底せるものであつたのみならず、その全體が眞の佛によりて、平等に完成され行くことに於て、最近世の社會連帶思想よりも更に發達せるものと云ふべきである。最近世の連帶思想は尙個人の聯結たるを免れない。科學的唯物的の考察と解釋とは、一方に確實性を有するも、他方に破綻と素漠とを免れない。これに反して、淨土教は大きな慈悲の中に、感謝しつゝ解決し行くものであり、個人の完全なる奉仕が、如來の慈光として受取られるものである。此の如き優秀なる思想宗教が、八百年前の法然上人によつて提唱されたことは、その偉大さを示すものであると同時に、能くこれあらしめたる日本の國體性と歴史力との卓越さを語るものである。

法然上人の淨土教が斯く卓越して居ることは、却つて色々な塵濁に妨げられざるを得ない。即ち個人思想や階級思想、所有思想や生滅思想、存在思想や有量思想は、佛教が年來打破し來つたも

ので、その打破の上に無爲の淨土、無量の阿彌陀、諸の衆生と共に安樂に往生することが成立し、この立派なことが久遠劫來の諸佛を纏め來れる、彌陀の大願力に乘ずる南無阿彌陀佛の一と聲一と聲の中に達せられるとする、簡易適確なる宗教が開建せられたのである。

然るに、此の思想だけでも、有識者すら尙充分に受け容れ兼ねるものを、一般大衆の前に開放するも到底完全に消化するを得ない。これを宗教行事として受け取ることは出来ても、これを社會の現實中に把握することは、なか／＼難しいことである。況や眞の國體相に進まずして、歪曲された封建制度となり、保守となり割據となつた爲に、遂に淨土の法門が眞の國體相に實踐されずして、不可説、不可思議なる神秘となり、仰信の別天地となり了つたのは、誠に遺憾なことと言はざるを得ない。

天運循環して明治聖代となり、國體の正常となつたことは、法然上人の思想が正しく認識され、その教へが正しく興隆さるべきものであつた。然るに、徒らに歐米心酔と唯物個在思想との跋扈する所では、聖道禪門すら尙行はれ難く、原始佛教の名に隠れた小乗佛教や大乘權教たる唯識因果の法門のみ僅かに認められるに過ぎなかつた。その中に、現象即實在とか、實相一如とか、

天台などの教理らしきことが哲學などの尊さを見ることがなり、又頓證直觀として、或は風變りな實踐として、高踏無想を學ぶ禪などが僅かに行はれることとなるも、眞の宗教的方面は未だ興隆しなかつたのである。

只、最近物狂はしきまで科學的社會主義、唯物的現實主義が高調せらるゝばかりでなく、幾多の實際運動によつて人々を脅かすものがあつたと同時に、他方には、宗教的情操、信仰の要求翕然として湧き、その需に應ずるものとして幾多の宗教運動が蔚然として濫興し、或はその多岐多様なるに呆れ、或はその迷信低級なるに驚くも亦、或は毒藥も渴者の仰ぐ所となり、或は邪路も迷羊の趣く所となり、宗教興隆と云ふもあれば、吾れ諸聖を兼ねと誇るもあり、インチキ邪宗と罵るもある有様であるが、これぞ正に法然上人の淨土教がその眞面目に於て再興すべき時節到來と云ふべきものと思はれる。

重ねて云ふ、法然上人の淨土教は、ルーテル等の宗教改革よりも徹底せる近代宗教であり、大衆の平生に満足せらるべき宗教であり、最近世の社會運動よりもモツと完全なる社會解決であつた。此の如き信仰こそ今漸く社會大衆が把握すべき時代が來たものと云ふべきである。そこで私は本年の、法然上人鑽仰運動の使

命内容として、次の諸點を列舉し、既信者、求道者たちの反省充實の條目と致したい。

一、法然上人の淨土教は八百年の古さはあるが、封建時代は假眠に過ぎ、今や覺起する時が來た。正に時節到來である。

二、法然上人の淨土教は、社會平常の宗教である。社會も平生もなき個人態の宗教や、社會平生あるも宗教なきものを打破して、社會平生の正しき宗教を高調すべきである。これ獨り他の無宗教的社會運動や、現實執着等を排斥するばかりでなく、内、個人の未來安樂を夢みたり、現在陶醉三昧に執着する者をも誡むべきである。

三、法然上人の淨土教が、大衆の現在の信仰に在ることに鑑み如何にして何人にも今日念佛生活あらしむるかについて、潛心すべきである。大衆宗教と云ひ、平生宗教と云ひ、易行易修と云ふに抱はらず、多遍の日課念佛を掲げて、少數の念佛者には獎勵となるにせよ、大衆を驅逐せることを猛省すべきである。起るも寝るも、食ふも働くも、念佛あるやうにするのが第一である。南無阿彌陀佛に起き、南無阿彌陀佛に就床し、食前食後、事前事後、南無阿彌陀佛あるを以て念佛生活の標準とすべきである。これを確實に自行し、家族も、檀家も、信者も、親戚も、友人にさへも實行さすことを以て、法然上人の鑽仰とすべきである。

べきである。

四、平生、念佛生活を學べる人々は、それが日常生活に如何に敬虔、精進、相續を給はるかを反省し、懺悔と報謝とを捧ぐべきである。かくて光明裡に業務生活の改進さるゝことに感謝し、

一步一事、恒に壽光無量の彌陀を拜み奉るべきである。

五、平生念佛の人々は、彌陀の一切人を照益し給ふを喜び、同念共生するを信ずると共に、先づその家族朋友隣閭に、先亡後生に、常に念佛すべきである。

六、平生念佛の人々は、時縁を求めて、朝暮に、日別、月例、年時に、別時念佛を修することはありがたきことである。

七、平生念佛の人々は、この身も、衣食も、業務も、隣閭も、不如意事、災變も、悉く如來の應現と拜み奉るべきである。

八、念佛の聲する所に法然上人在まし、父母祖先居らせられ、彌陀ましますものと尊重し奉るべきである。

九、南無阿彌陀佛は、そこに光りと、命と、力と、進みとを把握することにて、暗鬼と病死と衰弱と退轉とを免れ、何事にも善き解決であり、何者にも尊き捧げものであり、決して不淨不吉の想ひをすべきものではない。

十、南無阿彌陀佛は彌陀釋迦諸佛の同稱し給ふ所、有ゆる文藝と微妙と信仰の源泉であり、又その結晶であることを味ふべきである。

(完)

農村寺院の聲

山形成生村出産相談組合

組合長 金澤 貞山

○ 近年、急激に疲弊せる東北地方の農村は、出産の爲め一段と甚だしい經濟上の壓迫を痛感した。經濟上の犠牲を拂ふのは未だしも、この犠牲を忌避せんとする傾向が、一般的に農村の産婦出産児の甚だしき非衛生的行爲の現れとなり、多くの悲しむべき問題を惹起した。本成生村出産相談組合が此等の難を除去する爲めに出来たことは勿論であるが、更に加ふるに近隣村民上下とも一團となつて相互扶助の美風涵養をはかり、貧困者の出産に對する不安焦慮と經濟的不安とを除去する機關である。

今その一例を見ると、組合員の一貧困者が多産であつて難産の時が多い、産婆に拂

ふ料金もない、醫師の診療をうける力もない、女として是れ程困つたことはない。然るに組合加入してから、この産婦は、一期間（三ヶ年）に二人を産んだが、毎月拾錢掛の金額を組合に掛けるかはりに、産前産後の無料診察並に出産児の沐浴と無料助産が出来来るから、妊婦としての不安も出産時の料金の心配は毛頭要らない、二回ともに安産し而も出産児は何れも至極健康である。

佛教が胎教を説くが、本組合の過去三ヶ年間は、種々なる難關に逢着し、様々な經驗の試練を得た。就中、妊婦には胎教の必要を感じた前述した一貧困産婦の例に徴しても、胎教の如何に効果的であるか、妊婦には不安焦慮が絶対に禁物である。人間須らく優良兒を儲けんと欲すれば、須らく胎教を説くべきである。是れ正しく活きた布教であると信ずる。

組合設置後の出産児は多く優良兒であ

る、従つて死産難産が激減した。

然るに、本組合に對し、有力な産兒制限論者が、出産率が多くなり人口増加して困るものではないかと反對し出した。併し彼等は自家擁護の偏狹者で問題にならない、事實自然出産率と殆んど差はないこと明かである。

以上述べたことに依つても知られる通り、本組合設置の眼目が農村の産婦出産児の擁護と、相互扶助精神の涵養と、優良兒の出産とにあるが故に、事業も亦それに合致したものである。則ち組合には三人の囑託産婆と、三人の顧問醫師を以て、組合員には萬遺漏なきやうに努めてゐる。

要するに農村教化として本組合は、その一つの形の現はれであるが、吾々は常に時代に副ふて宜しき形態をとり布教傳道の實を擧げねばならぬと覺悟を以て、終始すべく最も最善の效果的を目論む者である。



おじぎ

佐藤賢順

第一景

けさこそは、碧く澄み渡つた空の下に吾妻川の溪谷を挟む山々の燃えるやうな紅葉の美しさを、擅にすることにできやうと、そればかりを樂みにして、早く眼を醒した。その前の日、この温泉場に着いたのは、脚の早い秋の黄昏が、大手を攜げて心急しくやつてきた頃だつた。澁川からのバスが吾妻川に沿つて、お客を拾ひ拾ひ、お腹の空いた子馬のやうに、休み休みやつてくるのであるから、早く東京を立つたのであつたが、四萬川が合流するあた

りまで來たら、もう風が冷たかつた。

つけすてし野火の煙のあかあかと

見えゆく頃ぞ山はかなしき

停車場のポスターを見て、ふと思ひ立つた獨り旅ではあつたが、バスを降りた頃には山の中の温泉場らしく、ランプよりも暗いかと思はれる電燈が、ボツリボツリ烏瓜のやうに點つてゐたので、いくらか感傷的になつて、尾上柴舟のそんな歌を思ひ出してゐた。——これは三四年前の十月の半ば、關東耶馬溪の名に誘はれて、上州河原湯温泉に行つた時の話である。——

一寸類がない。昨日はバスで流れに沿つて廻り乍ら、深い谷底をチラ／＼と覗き込んだだけだつたから、今朝こそは、歩き乍らゆつくりと其の美しさに堪能しようとして、それを樂しみに眼を醒したのである。ところが、廊下へ出てみると、空はすつかり曇つて、細かい雨が煙つてゐる。昨日はあれほどよく晴れ渡つてゐたのに……と、すつかり當が外れて、恨めしげに欄干に凭たれてゐたが、それでも諦め切れず、番頭に傘を買つて貰つて、朝飯を済ますと、雨の中を溪谷に沿つた道を下ることにきめた。

重い番傘を差して、急角度に谷底へ落ちてゆく山の途中に切り開いた道を、時々立ち止まつては溪谷を覗き込んで潺湲と流れる水の碧さに見惚れたり、屹立する斷崖を這ふ紅葉の美しさを見上げたりして、下つてゆくと、これも番傘を差して、この邊の百姓家の



おかみさんらしいのと摩れ違つた。おかみさんは一寸立止まつて丁寧にお辭儀をして、

「まあ、雨の中をお大儀でございませう」

と挨拶をした。こつちは酔狂で雨の中を歩いてゐるのを、お大儀とは何のことかと良く解らなかつたが、滅多に人に會はないこの街道で挨拶をされたのだから、何となく氣に掛つてゐた。

あとで汽車の中で考へてゐたら、僕が洋服を着て小さいスト・ケースを下げてゐたから、縣廳か役場の役人か何かの調査で歩いてゐる、とでも思つたのだらう、と氣が着いたら、急に可笑しくなつた。然しこれは人懐かしいお辭儀であつた。

第二景

その歸り途である。澁川まで來たが

東京行の汽車に乗るにはまだ早過ぎるし、幸、雨も上つて深い青空さへ見え出したので、急に一寸榛名山まで行つてくることに豫定を變へた。

獨り旅は氣が合つていゝ、など、妙な逆説を思ひ浮べながら、態とケーブルカーに乗らずに、山を上つて行つた。すると一隊の小學生の遠足が道端

で休んでゐるのに追ひ付いた。二列の隊形で登つてゆく小學生が、その隊型の儘休んでゐるのであるから、その距離は可成りの長さになる。然しどの位續いてゐるのかは、道が曲りくねつてゐるので、解らなかつた。僕が登つて行くと、最初出會つた三四人の子供がお辭儀をした。僕もお辭儀をした。それからは道を登るにつれて、次ぎ次ぎに、あとの子供が前の連中と同じやうに、皆お辭儀をする。男の子は緋の粗末な着物に、袴も着けず、跳足足袋で肩から斜にお辨當を背負つてゐる。女

の子の中には、「休んでいかないか」といふ意味を、方言で言つたのさへあつた（大へんぶつきら棒な言葉だつたが、何と言つたのであつたか記憶してゐない）。とうとう僕はその二列縦隊の盡きるまで、随分長い距離であつたが、お辭儀をしなければならなかつた。

「君達どここの學校？」

「K小學校！」

と元氣よくその二三の子供が答へた。同じ縣内の俠客で名高い村の小學校の遠足であつた。何と微笑ましいお辭儀ではなかつたか。

第三景

空の道化役者、廣告氣球が封切映畫の廣告を尾に惹いて、有樂町あたりの朝空で、河豚のやうに泳いでゐる。少し遅くなつたので、八時からの講義に間に合ふようにと、僕の車は朝の街を



走つてゐる。僕はあつちへ流れたり、こつちへ泳いだりするアド・バルーンを、車の窓からぼんやり見てゐる。浅黄色の空に雲が一つ浮いてゐる。アド・バルーンがそれを追つかけてゐる。車が日比谷邊の官廳街を走る。それそれこれから職場へ急ぐ女や男が、はち切れさうな元気で、速歩、速歩。それは夕方の、一日の仕事に疲れ切つて、家庭や下宿屋の安息所へと急ぐ時の、顔の物憂さとは違ふ。朝は健康の氾濫だ。

車は走る。街路樹の鈴懸が黄ばんでゐる。いさゝかの風に、かさかさと言を立てゝゐるのが感じられる。

やがて車は廣い芝生の中に、ところどころ濃緑色の松の生ひかぶさつてゐる廣い廣場を走る。芝生は狐色に枯れてゐるが柔らかさうな感覺だ。

と、僕の車の運轉手は、右の手にハンドルを握つたまま、左の手を外して

帽子を取つた。そして大急ぎで左側を向いて一禮すると、また大急ぎで帽子を被つて、その左手をハンドルへかけた。何事もなかつたやうな風に知らん顔をしてゐる。アド・バルーンに見られてゐた僕は、摩れ違ひの車に知り合ひの運轉手でもゐたのかと、左の窓から外を見ると、それらしい様守もなく、朝の光の中に、莊嚴な大樹を背景に、眼鏡形の二重橋が燦然と輝いてゐた。我に歸つて僕も帽子を取つた。

第四景

新郎新婦を中心に四、五十人のお客が、何れもお膳を前にして、鍵の手なりに居並んでゐる。御披露の席も大分酣になつたと見えて、あそこにも一組、こゝにも一組、藝者や女中を取り廻いて、談笑の渦巻が出来てゐる。今しも大廣間の中程には、板張りの急造

りの舞臺がしつらへられて、賑やかに踊りが始まらうとしてゐるところである。

正面床の間を背にしてかしこまつてゐる新郎の隣には媒妁人。その隣には渡邊海旭先生が、戒師の役を濟まさされて、正崩しの定紋のついた紋服に着換へて、端座しておられる。先生は腕を組んだりほぐしたり、——これはいつもの癖であるが——左の手の平で右の二の腕を撫したりして、特徴のある微笑を浮べ乍ら、妖氣正に致らんとする一座の光景を眺めておられた。

先生の坐席と丁度對角線の位置には、新郎の中學校當時の同窓生が五六人固つて席を取つてゐる。中にはもう大學を出て妻君を買つたのもゐるし、まだ熱心に高文の試験の準備をしてゐるのもゐた。先生はさつきからこの自分の學校の曾つての生徒達の存在を意識してゐた。彼等が時々、鳩首して協



まはる。

議を擧げらしてゐる有様は、端の目には、今夜の二次會の場所について智謀を廻らしてゐるとも見えたであらう。

「おい、お前行つてこいよ。俺なんか學校の時は、いつも操行四等で（註四等といふのは、その中學校特有の採點法で、二等が優良、三等が普通、四等が劣等。一等などいふのは全校に一人か二人しかなくつた）睨まれてゐた方だから、いやだよ。」

さう言つたのは、慶大を出てアメリカへ行つてサンフランシスコの新聞に小説を書いてゐた男だ。その話の模様では二次會の相談のやうでもない。

「誰か行つてこいよ。實は俺も三高にゐた時、校長が京都へ來たんで、挨拶に行つたら、うんと御馳走になつちやつたんだよ。だけど、どうもあすこまで出かけてゆくは、でれるな。誰か一しよに來いよ。」

帝大佛法科を出たが言つた。そし

てもう一人誰か引つ張つて校長の所へ挨拶に行かうとしてゐた。

「駄目だよ。俺の事なんか校長憶えてやしないよ。お前行つて來いよ。」

さう言つて逃げてゐる者もあつた。かうやつてお互に譲り乍ら挨拶に出かけてゆく機會を捉えようと待つてゐるうちに、海旭先生はつと立ち上つて、廣い肩幅の右の方を幾らか聳やかして、俯き加減に頸を惹いて、廣間を對角線に横切つていつて、曾つての生徒達の前へどつかりと坐つた。そして

「コンチャヤー」

と低い幅廣い聲で挨拶されて、性急に一つお辭儀をされた。この「コンチャ」

は、先生の一流の特徴のある挨拶で、「今日は」をコンニチハと五つのシラブ

ルに分けて言ふのでもなく、コンチャでもなく、もつと簡単にコンチャヤと三つのシラブルにつづめて言ふのである。

昔の生徒達は面喰つた顔をして慌てゝ居住ひを直した。

暫らくは先生が何を話しても、

「ハア、さうです」

といふ位で、片つかない顔でモーニングの膝を氣にしてゐた。

やがて先生が自分の席に歸られると

「だから早く挨拶しに行かうつて言

つたぢやないか。

先生の方から先へ來られちやつちや

あ困つたよ。

困つたな。」

さう言つて引込みのつかない恰好で、皆はそろそろと先生の席へ挨拶に行つた。

これはまた素晴らしく大きなお辭儀であつた。

如來の國

— のそ

事業に對する考へ方

上 中 甲 堂

余は三十歳前後に實業とはお金を作ることなりと考へた、人に迷惑をかけずにお金を作ることが

實業の最も上乘なものと考へた。その意味から發展途上にある都市の郊外の地所に投資して値上りを待つて儲けることは最も利巧な事業である。と考へた、その結果、殆ど十年間もやつて來た教職を抛つて土地會社に入り自ら投資し人にも大にそれを勧めたのである。

當時の考へでは、事業家の目標は金を儲けること以外にないと思つてゐた。國の爲とか社會の爲とか云ふが結局は評判を悪くしないでお金を儲けることが目標であると一途に考へてゐた。そして語學を稽古したり、取引方法を研究したり、經濟事情を調査したり、また貿易業にも従事して、青春の十年間は前述の意味の事業家として成功せんが爲に殆ど不眠不休で勉強したのである。

聴かて四十歳頃になつた時、世の多くの人々が自分と同様の考へで事業に當り乍らお金を儲けることに失敗を重ね大に苦勞して居るのを見て之を救済することが自分の天分として何よりも多く國の爲、世の爲であり、又一面自分の業績を立派に築き上げることになる

と考へたのである。そこで歐米の諸先輩の教ふる科學的經營法を覚え、それを以て事業經營の指導をする仕事を始めたのであつた。數

年間、その仕事をやつてゐる内に、世間の事業家の興亡を親しく實見して、本當に恒久性のある繁榮を得ん爲には、方法よりも精神に重點を置いて經營しなければならぬと云ふことを暗示されたのである。結局、人である、方法ではない。

それから仕事に對する目標が従前とは全然異つて來、人生觀も亦自ら従前とは變つて來たのである。吾等は日常の仕事を通じて人間としての眞實な生活を營まなければならぬ。お金は得ても生活が虚偽であれば全然失敗である。と云ふことを痛切に感じて來た。仕事即人生であり、事業即宗教である。

價值なき生活に本當の事業は生れない。知恩報恩の精神から生れた事業でなければ本當の事業ではない。本當の事業を爲すことによつてのみ人生に成功がある。

今から二十年前、信仰生活と全く没交渉であつた幼稚な自分を顧みて洵に感慨無量である。自分に與へられた價值ある人生に交渉を有たずして、巧名と利達を追ふことを本當の

生活とのみ考へて徒に喜憂した時代を顧みて寔に思ひ半ばに過ぐるものがある。

能率増進の考へ方

能率増進の考へ方には相反した二つの方面がある。一は利益の獲得を目的とし、他は社會への恩惠の還元を目的とする。

私の所では只今一本の電話で平均一年間に百萬圓の取引をしてゐる、同業者のB店では同じく拾萬圓の取引に一本の電話を使用してゐる。此場合、同じ一本の電話で十倍の仕事が出来るのであるから其の電話使用能率はB店の十倍である。

私が最初、西洋の書物で能率増進法を學んだ時分には、前例の如き場合に、其の十倍の能率を或は十五倍に、或は二十倍に、或は三十倍にして、いやが上にも多くの利益を獲得することが、やがて能率増進の唯一の考へ方だと思つてゐたのである。

然し、只今では左様に考へない。なぜならば其の考へ方は自分の方面の利益のみを考へ

てゐるからである。斯様な考へ方で能率をどんどん進めて行くと、所謂我利争闘の世界を出現して、強い者勝ちの世の中になつて、我建國の精神たる和合・積慶の心持が國民の間から消失して了ふ。

自家の電話がB店の電話よりも十倍以上に働いてゐると云ふことは、やがてB店よりも十倍以上に社會から恩惠を多く受けてゐるのであつて、社會に對してB店よりも十倍以上の恩惠をお返しすることを先づ考へなければならぬ。一箇の電話も自分の獨力で出来たものではない。社會公衆の恩惠の賜である。斯様にして、社會に對し如何にして恩惠を多く正しく返す可きかを考へることこそ、即ちが眞の能率増進の考へ方であらうと思ふ。そこに到つて吾等の努力が始めて尊い仕甲斐のある聖力となるのである。

能率増進を利益獲得の目的として考へる考へ方は西洋流である。我々は日本固有の尊い道の歩み方をして、益々國民精神を發揚して暗い世界を明るい世界に導かなければならぬ

◇ 佛說發句 ◇

園女の句に、地獄をうたふたのがある。

迫り來て息吐く方や飛ぶ螢

飛ぶ螢を陰火とみて氣弱き少女の喘ぎ苦しむ形容を地獄の苦現に息吐く方やと炤立てる畏ろしき阿鼻叫喚に想ひ及べる様と見てよろしからん。

釣瓶取られての加賀の千代女、三界唯一心といふ意を。

百成りも蔓一すじの心より

と咏じてある、此句について、佛家奇人談の著者は云ふ、千代女は尼となりて素園といふ遂に佛意を修するより外なしと云ふ百成り瓢箪、種々な姿を生ずるとき一筋の蔓からとは云ひ盡してある。

其角の虚栗集の鼠彈といふ者の句に、法然上人を崇め唱ふた句がある。

鳴く聲につくろいもなき鶉かな

上人が念佛に尊き生涯を全ふせさせ給ふたのを、野面春に鶉の鳴く聲、何等の綾はなくも、いつそ九阜に啼く鶉より微妙な感じを致せる有難さを知るべし(古萩生)



渡邊海旭師の生立

赤尾光雄

凍りつくやうな夜、本堂へ通づる廊下をトン／＼と渡つて來たのは西光寺の住持海定老和尚、役寮の前まで來ると戸のすき間から火がもれてゐる。もう十二時過ぎてゐる。

「海旭！ まだ起きてゐるのか、火を消せ、油が無駄だ！」大聲が暗夜に響き渡つた。やがて火が消えた、ポト／＼暗い廊下を傳はつて方丈へ歸る老僧の足音も小さくきえた。

× ×
二月初旬の朝四時と云へばまだ眞暗である、星がキラ／＼と輝いてゐる、勿論近所

で起きてゐる家は一軒もない、車井戸の棕櫚綱が手に凍りつく、冷さが食ひ入る様だ、ガラ／＼と汲む音が響く、ツル／＼に凍つた敷石の上を大桶を擔いで臺所に運ぶ足どりがよろ／＼とあふない。滑れば百年目、冷水を浴びて着物が肌に凍りつくだらう。西光寺の臺所では竈の火が盛に燃えてゐる。水汲みを終へた海旭は竈の前に座り火を直し薪をくべた、パツト上つた焰が顔を赤く照らした。竈の前に座つた海旭は懷中から昨夜讀みかけの本を取り出し竈の火を手使に讀み出した。昨夜老僧から「油を儉約しろ！」とどなられた爲め、夜中の勉強

が出来なくなつたので、早朝竈の火で讀書する事に思ひついたのだ。それ程海旭は少年時代から讀書が好きだつた。

海旭は寺の息子ではない。父は渡邊啓藏と云つて、江戸淺草の人、當時の豪商馬込家の支配人であつた。江戸城出入の帶刀御免の商人とてなか／＼ハブリもよかつた。富豪安田善次郎も當時同じく馬込家の番頭であつたそうだ。維新の變革に馬込家も没落し、借財整理に奔走した渡邊啓藏にも不運が続いた、多少の財産もスツカリ無くし八人の妻子をかゝえて途方に暮れたのだ。家財道具を賣り立てたり、晩年園基の指南

俳句の宗匠などし、なんとか家計をつないでゐたのだが、子供の教育までは手が延びないので、馬込家の菩提寺淺草善徳寺の住職の紹介にて長男由藏を深川西光寺の端山海定師に弟子入りさせた。由藏十五歳出家して海旭と號したのだ。

「お父さん、僕を本屋へ奉公に出して下さい。子僧になるなら本屋が一番いいと思ひますから」と云ひ出したのは由藏が十四歳の時、小供心に本が讀みたい一心から本屋に奉公させて呉れと歎願したのだ。早速今の博文館の子僧になつたのだが、本屋の子僧に勉強する餘暇はない。再び家に歸ひもどり父の勧めで出家する事になつたのだ。

西光寺の海定和尚は節約家で有名である無駄な事は一切大嫌ひ、出来るだけ自給自足主義でやり通した。野菜も少々ばかりは庭で作り、墓地のお線香から、焼香用の五種香まで自分で作り、寺の田地へは檀家の米屋をつれて見廻りに歩いたほどである。

人数の少い西光寺の小僧になつた海旭の仕事は山程ある。早朝の水汲みから、飯炊き、本堂掃除、島の手入れ、肥汲みまでせねばならなかつた。西光寺に入山したばかり



故渡邊海旭先生

りの、十五歳の少年にとつては仕事が多過ぎた。餘暇があれば、讀經の稽古、檀家廻り、等せねばならず、好きな讀書は夜ふけ以外には出来やう筈がない。それも油の節約の爲め不可能になり、早曉の鐘の前が唯一の勉強場所だつたのだ。

西光寺の門前に住むお年寄り
× × ×
は近所では

一番の早起きである。今日は父の命日だから西光寺の本堂に参拜しやうと起きぬけに家を出た。西光寺の門はちやんと開かれて本堂の扉も開いてゐる、寒空にはまだ星がキラメイてゐる、五時前であらう。水汲む音が響いて来る、流石にお寺は早いなと、思ひながら門をくぐると、十五六のお小僧が大きな桶を天びんで背負ひ、ヨタ／＼と重そうに歩いて来る、感心な小僧だと思つてゐる内に、敷石につまづいてのめつた。アツと驚く間もなく桶諸共ひっくりかへつた。馳けよつて起そうとしたが、起き上る力が無い、着物が水びたしになり敷石の上にグンナリと横たわつてしまつた。

「しつかりしなさい。さ、お起き上つて」と、老母は小僧の手を取り起き上らせたが唇は眞白に、ガタ／＼とふるえてゐる、かゝえるやうにして門前の自分の家につれ込み、ずぶ濡れになつた着物をぬがせて介抱した。凍傷で眞赤にふくれた手、輝だらけ

の青白い顔を見た老母は、すつかり同情してしまつた。

其の日その老母は海旭の父である渡邊啓藏を淺草俵町に訪れ、仔細を語り、西光寺に子供を置く事は可憐そうだから、家に引取る様にと勧めたのである。啓藏も早速様子を見る爲め、西光寺に海旭を訪れた。

「なか／＼お寺の修行はつらい様で、身體の弱いおまへには少々、つらからうから、坊さんになる事を断念して、家に歸つたらどうか」

と問ふのだ、海旭はだまつて下俯向いてゐたが、昂然と答へた。

「僕は一度出家すると云つて家を出たのだから、歸る必要はないと思ひます、僕は立派な坊さんにならうと決心しましたから、少し位のつらい事は我慢しましょう。弟、省山とも約束しました、おまへは禪宗のえらい坊主になれ、おれは淨土宗の立派な坊主になる、今に二人で佛教界を牛耳るんだ

と話し合ひました。兄である僕が眞先に、へこたれる事は出来ません」と。

父啓藏も海旭の決心の強いのに驚かされて、海定老師にくれ／＼も海旭の行末を依頼して歸宅した。海旭のすぐの弟も駒込高林寺にて出家し省山と號した、省山も頗る頭腦明晰で幼少卒ら高林寺第一と稱された。門答をしても負けた事がないので同室の者も驚かされたそうである。晩年海旭がある人に、

「若し弟の省山が今まで生きてゐたら、大したものだ、きつと、おれよりえらくなつたぞ、子供の時兄貴のくせによく弟にやられたものだが、實に惜しい」

と語つた事がある。

又ある冬の朝、西光寺の庭前で一詩を口づさんで、涙ぐんでゐた。恐らく少年時代弟の省山と二人で吟じ合つたのだらう、廣瀬淡窓の詩「道ふことを休よ他郷苦辛多しと、同袍友有り自ら相親む柴扉曉に

出づれば霜雪の如し、君は前川に汲め吾は薪を拾はん」である。省山は十九歳で没した、事實二人とも今まで生きてゐて、兄弟二人揃つて佛教界を牛耳る事を想像すれば寔に面白いではないか。

× × ×

海旭は學校に通ひ出した。學校では吃りがひどいのですぐ有名になつた、だまりこんで、しかめ面をした秀才は、何處か人を引きつける所があり、次第に人望を得る様になつた。小學校入學當時、吃が甚しいので先生が白痴ではないかと心配したとの事である。

木棉の白衣、黒衣の袖も長く、高い朴齒の下駄をはいてガラ／＼と深川から芝まで歩いて通ふ道すがら、海旭は無駄な時間を費さなかつた。

父啓藏が俳句をやつてゐたので、少年ながら俳句の道にも通じてゐた。西光寺に入山してからは附近の漢學の先生の處に通ひ

漢詩文を學習した。學校への通ひ道は漢詩作成の道場だった、道すがら、電針柱一本毎に詩句一句を作る練習をした。詩韻精隨を片手に詩句を口づさみつゝ歩み。電柱一本毎に會心の句を得て道の遠きを知らなかつたわけだ。後年宴會などで、即席に一句を作り朗々と吟じた聲は、少年時代登校途上の電柱の一句に始められてゐたのだ。

「おい、學校で上草履を、はかん奴があるぞ」

「うん、ある／＼、あいつは冬でも裸足で廊下を歩いてゐるぜ、變つてゐるな、」

此んな噂の立つた張本人は海旭である。

寒中でも決して寺では足袋を履かなかつたから學校で草履をはかなくても、冷たくは感じなかつたのだらう。小遣が足りなくて上草履が買へなかつたとも聞いている。が、實際は友人の内で學費の足りない者に毎月自分の小使を提供した爲めである。

「海旭の食事を見たか、實に面白いぞ」

此所でも又話題が出来た、それは、宿舎で海旭は食事の時只一つの茶碗で食事をすませたからだ。茶碗に飯を盛り、汁もお菜も、皆一つの茶碗にかきまぜ、大速力で、カツ込むのだ、従つて茶碗は一つで足りる譯である。部屋の間によつた茶碗と箸が

世事觀來若海通誦
經不替歲華一
上堂曉露餐涼
方覺山僧亦有秋

秋意

盧月浪禪師

ころがつてゐるのをよく見かけたそうである。海旭の簡易生活は此の邊から始まつてゐる。學生時代茶碗も一つで済み、後日自分も獨身で過してしまつたのだ。獨逸遊學から歸つてからは、洋服生活もし、和服も

着たが、留學以前は決して俗服を着なかつた。洋行を一轉期として多少生活に潤ひが出来たのだが、それ以前の青年時代にはなか／＼面白い話が澤山ある。何れ機會を見て語らう。

讚唱句

法華經を

白蓮華大池にも亦小溝にも。

一華二花の觀無量壽經を

珊妙華殘る蕾が此所に咲き。

智度論を

一切智永戀うる日何處へまで。

涅槃經を

日も月も消えなん後の雪あかり。

阿彌陀經

智者亦た此の信あれと菊の花。

(逸白道人謹唱)



部一傳卷八十四

法然上人の横顔

脇 本 樂 之 軒

ので、祖僧の行狀を現はしたものであります例へて申しますと、眞言宗の『弘法大師行狀繪詞』、時宗の『一遍聖繪』などがそれであります。或は必ずしも一宗一派の開祖とは限らず、高德の聞え高い名僧智識達も、等しく亦主人公として取扱はれて居る場合がありますから、おしなべて斯かる繪卷物を高僧傳、又は單に繪傳とも呼び習はせて居ります。

廣い意味での高僧繪傳の始めは名高い『信貴山緣起』まで溯つて考へても宜しいでせう。この緣起は、『源氏物語繪卷』が繪卷の母と呼ばれるに對して、繪卷の父と私共が呼んで居るのでも知られるやうに、藤原時代の末に、早くも作られて居ます。『信貴山緣起』と申しますと、恐らく皆様は、それは所謂社寺緣起

に屬する者ではないかと疑はれませう。御疑ひ御尤も。たしかにこの繪卷は、嚴密に申せば大和の朝護孫子寺、即ち信貴山毘沙門天の由來を説いた繪卷に相違ありませんが、實は亦、あの信貴山に毘沙門天の尊像を勧請した命運と申す高僧の逸話を説いたものでもあります。斯様にして高僧繪傳は、屢ば社寺緣起と切つても切れぬ關係に在る場合が、多々あります。更に角、高僧繪傳の濫觴が、随分古い時代にあるといふ事は申されるのす。

少し前置きが長くなり過ぎた嫌ひがありますが、この高僧繪傳は、鎌倉時代も進んで繪卷といふ繪の形式が漸く一般的のものとなりと同時に一方に於ては宗教上、新しい幾多の宗旨さへ起つて、その祖師の行狀乃至教理の

美術史の上で取扱はれる繪卷物（略して繪卷とも云ふ）の範圍は、随分廣うございますが、その中に祖師繪傳と名けて分類される、一類の繪卷があります。これは社寺の緣起を描いた緣起繪卷と、餘程近い性質を有するも

一端を弘通宣傳する必要を感じて来る、この二つの事が相合體して、盛行を見るに至つたのでありまして、現存の遺品に就いて申せば鎌倉時代の中期を過ぎる頃から、南北朝、即ち、唯今新しい呼び方で申す吉野朝にかけてのものが、大多數を占めて居ます。それならば、淨土宗にも祖師繪傳があるかと申しますと、有るも大有り、各宗祖師繪傳の中で最も浩瀚を誇る『勅修御傳』即ち伏見、後伏見の兩院が如一國師を召して、淨土宗の三經五部九卷選擇集の講説を御聽聞あつて、觀感の餘りに舜昌法印に仰せありて作られたと申す、知恩院並に當麻寺奥院の國寶四十八卷を始め殘缺本ではありますが畫としては最も勝れて居る増上寺の國寶二卷本、知恩院の殘缺國寶一卷黒谷上人傳（釋弘願本とも云ふ）、圓男僧の殘缺國寶一卷法然上人傳（釋琳阿本とも云ふ）などあり、尙ほこれら法然上人傳に新覺の名の現はれぬ所から、眞宗によつて選ばれたと傳へる、常陸常福寺及び同無量壽寺の國寶『拾遺古德傳』も、やはり一種の法然上人

繪傳であります。

以上挙げたものは、何れも繪卷としての法然上人繪傳でありますが、なほ此外に堅幅の繪傳の中では、三河の妙源寺並に伊勢の西導寺の國寶が最も有名であります。



しかし「法然上人の横顔」と題した、この一文は、祖師繪傳としての法然上人繪傳の種々相を、事細かに説かうとするのではなく、單に

それらの繪傳に現はれた法然上人の御姿殊に御顔の様子は、如何いふ風であるかを説明して見ただけであります。

まづ法然上人の御つむりは、餘程特徴があります。即ち頭部全體が著しく大きく、偉人の相を現はすのみならず、普通には高い頂部が、寧ろ凹むが如く平らで、却つて後頭部が張り出して居ます。一體、各宗祖師の像を

見ますと、皆それ／＼に特徴がありますが、繪傳を見渡して、最も特徴の著しいのは一遍上人と、法然上人のふたりで、しかもこの御ふたりほど對照の強いのは、外に例がありません。委しく申しますと、一遍上人は頭が長く突き出て居られるばかりでなく、頭の天邊が恐ろしく上に發達して居られて、文字通りの長頭丸でありますから、法然上人のやゝ四角張つた、大きな御つむりとは正反對であります。一遍上人のやうなのは、別に名目もありませぬが、法然上人のやうなのは、昔から「法然頭」とさへ呼ばれて居ます。それならば御姿全體としては如何かと申しますと、一遍上人は諸國を行脚して六字稱名を勧められたのでありますから、つんつるてんの短衣を長身に著けて、裸足であり、法然上人は日課念佛六萬遍といはれた、その念佛の數取りをせられて居るかの如く、何處の場面でも、墨染の衣の陰に、大抵は兩手に珠數を爪さぐつて居られます、眼鼻立ちの中では、御眼に特徴があり、眼尻に三筋許の皺を寄せてにこ／＼と三ヶ月形の御眼を笑つて居られます。

冬の子供の衛生

醫學博士 都築益世

御

承知の通り、冬は寒うござりますから一番問題になることは「寒さ」に對する問題でありまして、如何にしたら「寒さ」に對抗して、健全なる發育を遂げ得るかと言ふこと、即ち如何にしたら「感冒」にかゝらぬかと言ふことは重要な問題であります。是は種々難しく言へば切りのないことでありますが、「感冒」をひくことゝ、寒さと言ふこととは、直接的な關係があると言ふことは出来ないもので、即ち「寒さ」に抵抗する力が弱い場合に「風邪」に罹ると言ふことになるのであります。従つて、比較的溫暖だと思はれる土地に住んで居りましても、「寒さ」に抵抗し得ない人は、僅かの「寒冷」に遇つて「感冒」に犯されて了ふのであります。従つて「感冒」に罹らぬ爲には、それ丈體に抵抗力をつけて置くことが先づ第一の問題になつてくるのであります。殊に大事



門正校學衆尼

黒衣の若き女性達

尼衆學校訪問記

本誌記者

東山連山は處々もう雪を

と對座して愈々一問一答を試みるこゝとなつた。

頂いて美しい冬景色、この邊り知恩院境内の静寂な樹木地帯、附近には華頂會館、華頂女學校、華頂幼稚園、京都宗學院、専修道場等々の淨土宗の教化團體、門末寺院等が點在するなかに、これはまた女手ばかりでやつてゐると云ふ尼衆學校、記者は或る天氣晴朗な日、本社からの命令を携へて、恐る／＼この男子禁制の道場の扉をたゝいた。

來意を通ずると案外快く招じ入れて呉れたのが、八疊敷の日本間に洋風セツトを置いた應接間、これはまた意外にゆつたりした氣分で應待に出た尼衆學校の先生(勿論尼さん)

「月並なお訊ねですが、この學校の課目と云ふのはどんなものなのですか」

「さやう、宗乘、余乘、實踐倫理、數學、それから……生理衛生、理科、哲學、音樂、地理、法式、作文、國語漢文、裁縫、圖畫……」

「こりや驚いた、仲々大變ですね。裁縫と云ふと、法衣や白衣などを縫ふんですか。」

「いゝえ、世間様の着物も縫はせて頂きます。大抵、檀中の方々から頼まれたのを縫ひ上げて腕を作るやうにしております。」

「成る程、女らしい生活上の心使ひであると

な子供を、大事大事と育てて了うことは、往々、抵抗の弱い子供として了ふやうであります。即ち厚着に失したり、室外の空氣に觸れしめない消極的な方法は、決して子供の保育上喜ぶべき方法ではないと思ひます。殊に都會地では、「冬の日光光線」は出来るだけ浴せしめてやりたいと思つてゐます。それには「ガラス戸」越の、紫外線の日光光線によつてでなく、室を開放して充分室内に太陽その儘の直射光線を入れてやりたいと思ひます。又出来得べくんば子供の遊ぶ部屋は「塵埃の少ない、即ちほりぼくない」部屋で、適當な薄着の、運動の自由にきく洋服の如きもので遊ばせてやりたいと思ひます。

御

承知の如く我々が種々の食品を食へますのは、是を「體溫」維持のエネルギーとして一部分を使用するのでありますが、子供に於ては「食品」を攝つて、體溫放散の成人に較べて著しい常溫身體を、に保ち、即ち「熱エネルギー」としても可成り多量の食品を要し、且つ絶えず發育せねばならぬ個體を、完全に發育するためにも

記者は感心した。

『毎日の日程はどう云ふ具合になつてゐますか』

『午前四時半起床、晨朝動行が五時、朝食が六時、七時半から授業で、正午晝食、日没動行が午後四時、夕食が午後六時、就寢が夜九時半です。』

と云ふ。我々には一寸出来そうも無い精進振りである。(寫眞はラヂオ體操)

『只今、廊下教室を見て廻りましたら、生徒



さんは大抵十五歳から廿五歳位でしたが、年頃になつて起つて来る色々な問題もありませうが……』

『毎日お粥ですか』
『いい、え火曜日と金曜日だけですの』なる程、今日は金曜日だ。

『そう云ふ問題は信仰によつて善處されると考へてゐますから、信仰を深めると云ふこと以外に具體的な規則などは御座いません』と濁みなく答へられた。宗教家らしい立派なお答へだ。記者はたゞ頭を下げるばかり。食事は一年中精進だと云ふ。食いたしん棒の記者は『一度味ひたいものですな。』とおねだりすると、『今生徒さんの夕食時ですから、粗飯でよろしかつたら』と仰しやる。記者はすつかり喜んでしまつた。

思ひがけなく、尼衆學校で、尼僧さんのお給仕で夕飯を御馳走になることになつた。美しい尼さんが大變淑かにお給仕して下さる。ご飯はお粥、おかずは豆腐と馬鈴薯の煮たもの、一つは豆と昆布切りぼしの酢につけたもの、鹽こんぶ、合計五品、仲々の御馳走だ。生徒さんに聞いて見た。

亦、多量の食品を要するのでありますから運動不足其他による『食慾減退』は、殊に冬には警めねばならぬことであります。

従つてカロリーの豊富な、且つ『ビタミンA及D』の豊富な、肝油、バター、或は『鶏のモツ』『鶏卵』等は、是非十分に與へて頂きたいと思ひます。又『ホーレン草』の如き鐵分を含む食品を與へて、『貧血』を補正することも、『寒がらぬ子供』とする上に重要なものであります。元來、子供は成人の模倣をするものでありますから、家庭全體に於て『偏食』即ち『食べ物の好き嫌ひ』が多いと、その子供も亦『偏食』になり易く、従つて、十分な栄養が與へられず、従つて、抵抗の弱い子供が出来、保温等は十分に考慮され乍ら、尙ほ且つ『感冒』にかゝり易い子供が出来るのであります。

私は、冬の子供の衛生モットーとして、『コードモノクニ』の新年號に、子供たちに判る優しい言葉で書いて置きましたから、子供たちにも見せて頂きたいと思つてゐます。それから『偏食矯正法』即ち『食べ物の好き嫌ひはどうして治すか』と言ふことは、非常

馬鈴薯が大變おいしかつたので、『贅節をだしにするんですか』と愚問を發したら一切昆



布だとのことだ。お料理の方は當番を作つて皆んなでやることになつてゐると云ふ。

『材料の買

出しは、私達が出ては行けないことになつておりますから、女中さんにお願ひしてあります。』と云はれる。なる程、々々。(寫眞は學習)

『毎日、さう精進ばかりでは、偶には洋食なぞも喰べたくなるでしやう。』と食ひ意地の張つた記者は飽くまで食物で追及する

『少しも喰べたく御座いませんわ、そう身體がなつてしまつてゐますから。』絶対に喰べられないそりだ。

『精進料理の連續では、献立に苦心されるで

しやう。』

『時々、面白いものを作りますの、インドコロツケなんぞ……』

インドコロツケ、はてな？あんまり聞いたことがないが、コロツケと云へばあの肉に入つた？

『いゝえ、馬鈴薯と人参とを入れたコロツケです。』と笑ふ。なんだ人参が牛肉の身代りか、それで安心した。(寫眞は食作法)



食事は食作法でやるから無言沈黙の一盤張りだと云はれ、行儀の悪い記者は一言も無い。

珍味を満喫してすつかり良い氣持になつてからまた先生を捕へて問題をまたあとへもどす。『學科の組方は？』

にむづかしいことですから、こゝでは省略致しますが、成人と異つて、子供は將來完全に成育させねばならぬ責任がありますから両親方も、單に「感冒」を治すとかと言ふやうな治病の目的ばかりでなく、その方面の知識のある専門醫に是非相談せられることを切望して止まないであります。

と

て「感冒」に就いてあります。一、概に「感冒」と申しましても、子供と、成人と、また「乳兒」とは自ら相異がありまして、殊に「乳兒」にとつては、是は時に伸容易ならぬ病氣であり、古諺に謂ふ「風邪は萬病の基」とは眞に「乳兒」のその場合を示したのではないかと思はれる程であります。小兒科醫は總稱して「グリップペ」と言つて居りますが、その症狀も單に「せき」をする「はなかなぜ」をひく丈でなしに、「下痢」や「嘔吐」や、「痙攣」や、「食慾不振」等起し、「感冒」位に思つてゐて、衰弱著しくなつてくることがあります。又「肺炎」となるやうなことも一般に早期に十分に治療を怠つたやうな場合に多く、治療は早きに過ぐることはないとしみじみと思つてゐます。



「宗乗が決疑抄、三卷七書、宗義比較、淨土教史。宗乗が現代宗教概論、文化考。倫理が佛敎道德の要領。傳道學は實地演習の指導、哲學が科學論、價值論、教授法、社會事業。自然科學は氣象學、天文學……」

記者はいさゝか毒氣を抜かれた形だ。

校友、生徒の現状は、同窓會員が約百八十名、在校生が約六十名、聴講生が二名、善光寺の一條智光尼も同校御出身だそうである。

校則として許さないのですが、御社のことで

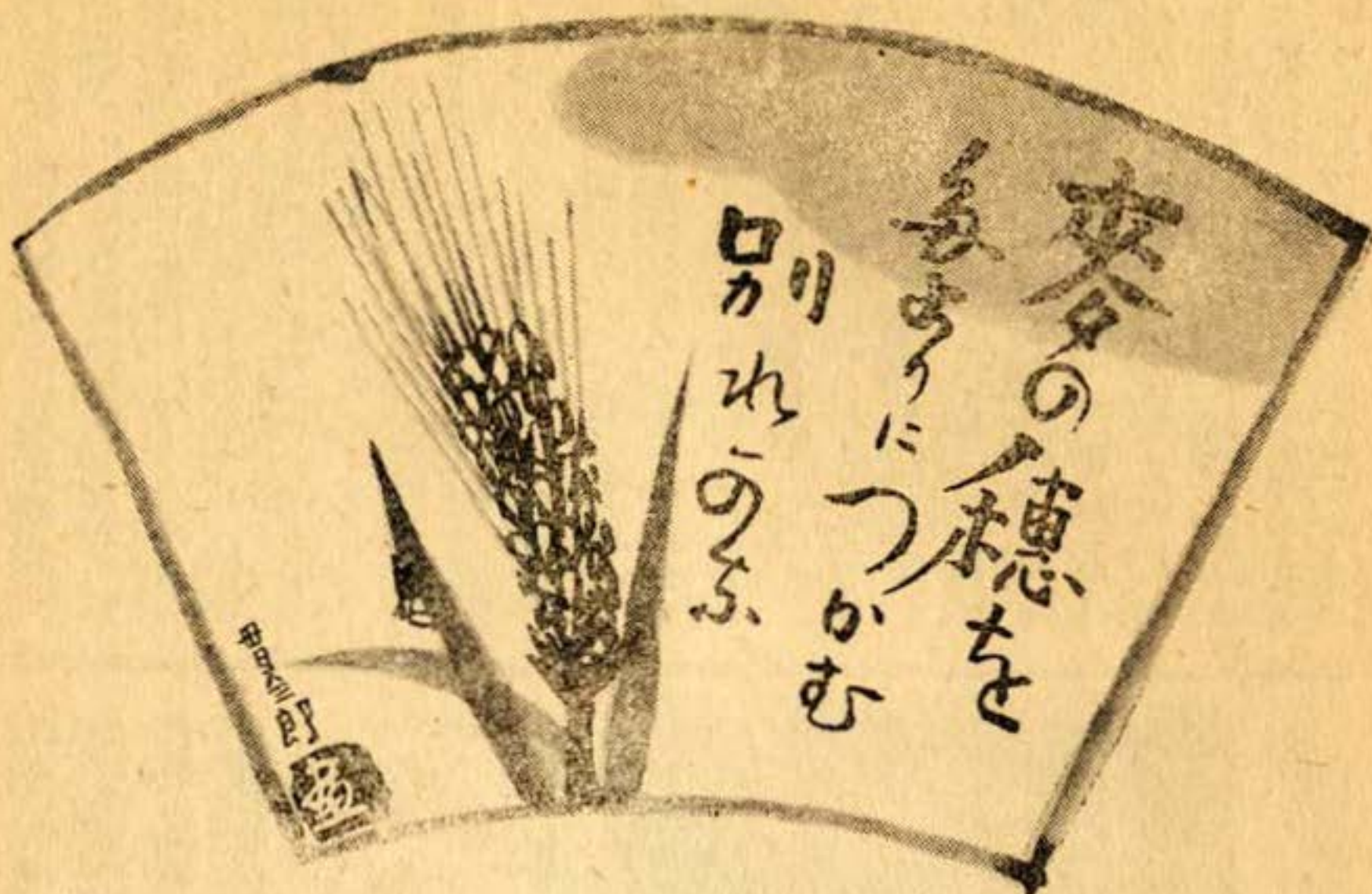
實況視
察を兼ね
て寫眞を
撮らせて
頂きたい
と申込む
と先生は
一寸小首
を傾けて
「本當は

すから、」と承諾して下さつた。

記者は、無禮をおわびしてから、俗界の憂ひを去つて御佛の袖にすがつて、信仰に直往邁進する數十若き女性のことを考へながらすつかり夜色に包まれた靜淨な山内の靜淨な空氣を胸一つばいに吸ひ乍ら家路についた。

近 詠 野島 無量子

笙澄むや厨子出でたまひ御身拭
僧俗の稽首の中に御身拭
影向の御前にすすみお身拭
御身拭ふ祖師の墨染ごろもかな
御顔よりお肩へかけて御身拭



説小 旅路の芭蕉

宇野 浩二

吉田 貫三郎 畫

前の時から五年たつた。

芭蕉は五十一歳の正月を江戸で迎へた。たとひ野晒になつても旅をつづけたいと思つてゐた芭蕉が、深川の庵に三年程も引つこもつてゐたのは、旅に飽きたのではなく、一年一年と健康が衰へて行つたからである。が、その年の春頃、彼は、故郷の伊賀の上野に年とつた兄を訪ね、事に依つたら長崎あたりまで行つてみようと思ひ立つた。が、しばらく旅をしなかつたので、なかなか御輿が揚がらなかつた。ところが、その頃、偶然、名古屋の門人達や、近江の門人達や、京都の門人達や、方々の門人たちから、招待の手紙が來た。そこで、彼はいよいよ立つことに極めた。

それは五月の初旬であつた。晴れた日であつた。杉風、桃隣、野坡、利牛、岱水などの外に、ちやうど名古屋から上府中であつた荷兮など

が送つた。或る者は品川まで、或る者は川崎まで、或る者は箱根まで、野には青嵐がそよそよと吹いた、野山は、既に若華時を過ぎて濃い緑に輝いてゐた。最早や麥の穂が出そろつてゐた。蛙が鳴いてゐた。門人たちは妙に名残を惜しんだ。五十一歳の師匠が、不斷から深けて見える質ではあつたが、急にめつきり年をとつて見えた。門人たちは別々な思ひを抱いて、無言で、傍の麥の穂をつかみながら歩いた。芭蕉は、門人たちに別れるとき、門人たちの扇に、

麥の穂をたよりにつかむ別れかな

と書いて、餞別として贈つた。或る門人の扇には「たより」と書かれ、或る門人の扇には「力」と書かれ、或る人の扇には「かたみに」と書かれた。「かたみに」と書かれた門人は「互に」といふ意味を「形見」とも解いて、何か暗澹たる氣持になつた。

箱根を越えて三島に出た頃は、山吹は殆ど散り、藤の花も盛りを過ぎてゐた。大井川に來た頃は、五月雨がつづいた後だつたので、大井川を渡ることが出來ず、島田に滞在することになつた。幸ひ、ここには、塚本如舟、如竹等がゐたので、その家に泊つた。如舟は芭蕉を厚く持成した。

五月雨の雲吹きおとせ大井川
島田では、このやうな豪宕な俳句が出來た。

やはらかにたけよ今年の手作麥

田植とともに旅の朝おき

如舟
芭蕉

名古屋では、荷兮亭に泊つて、越人、野水等と十歌仙を作つた。それから、伊勢灣に沿ひ、佐屋、長島、桑名、久居を経て、伊賀の上野に着いた、兄の家に芭蕉は一月近く滞在した。ここには、土芳、猿雖、苔蘇、半殘、雪芝等といふ、俳句の道の人が二三十人ゐて、芭蕉は、それ等の人たちの家に毎日ほど呼ばれたので、殆ど退屈をしないで日を送つたが、兄夫婦が想像してゐた以上に年を取つたのに痛く心を打たれた。或る日、芭蕉は兄夫婦と一緒に愛染院といふ寺の境内にある先祖の墓に詣でた。その寺まで二町程しかなかつたが、老衰に近い兄はやつと足を運ぶといふ風であつた。それを見ると、芭蕉は、年より十歳も深けて見える彼自身、兄などよりずつと虚弱な體の彼自身の姿を思ひ浮べた。人が見れば、自分の方が兄より老衰してゐると思ふかも知れない、と彼は考へた。

家はみな杖に白髮の墓まゐり

伊賀を立つた芭蕉は、大和の加茂に甥の平兵衛を訪ひ、近江の膳所に門人の曲翠を訪ね、大津に門人の木節を訪ひ、山城の嵯峨の落柿舎に去來を訪ねた。

六月や峯に雲おく嵐山

清瀧や波に散りこむ青松葉

朝露によごれて涼し瓜の泥

芭蕉が去來の落柿舎に滞在してゐることが知れると、大阪の之道が訪ねて来る。越中井波の僧浪花が落柿舎を訪ねて入門する。そこで、之道、去來、芭蕉、惟然、丈草、支考、野明などの歌仙が出来た。この支道が大阪に歸るとき、芭蕉は次ぎのやうな俳句を送つてゐる。

我に似な二つに割りし眞桑瓜

つまり、「瓜二つ」といふ諺のごとく自分の眞似をするな、と云ふのである。芭蕉は、或る門人に「俳句は、一生の道の草と思ふがいい、あせる事はいけない、又、倦きて捨てる事もいけない。句の出来ない時は、強ひて作らなくていい、この道に離れなければならぬ」といふ意味のことを云つてゐる。

芭蕉は、落柿舎に一月程ゐて、また膳所と大津へ行つた。大津の醫師木節の家に滞在してゐた時、江戸の芭蕉庵の留守

をしてゐた壽貞尼が死去した通知を受取つた。

數ならぬ身とな思ひそ玉祭

芭蕉が、壽貞尼の靈を祀るのに、「數ならぬ身と思ふな」と慰めたのは、芭蕉と壽貞尼とはどういふ關係であるか、といふ問題になるのであるが、これには色色の説があるが、彼女は、芭蕉の乳母であつたといふ『次郎兵衛物語』の説よりも、「翁（芭蕉）の若き時の妾にて、とくに尼になりしなり」といふ野坡の言説の方が、芭蕉に對するわれわれの心持を、今までより暖かにさせる、芭蕉の光を強くこそすれ、決して芭蕉の人格を引き下すことにはならない」といふ説に私は賛成する。因みに、この句の玉祭といふのは、七月魂祭の時の弔句である。

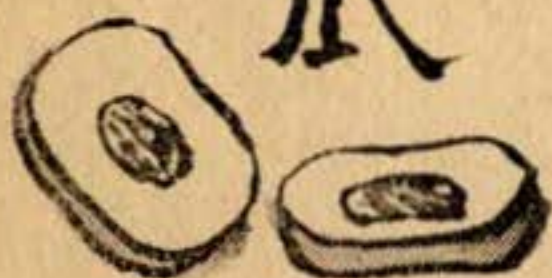
この時、芭蕉は、壽貞尼の死を知らして來た人に、次ぎのやうな手紙を書いてゐる。

「壽貞は無仕合者（中略）とかく申し盡し難く候。好齋老へ別紙申上ぐべく候へ共、急便に候間、この書狀一所に御覽下さるやうに頼み申上げ候。江戸を立つ折、この人の事を、くれぐれ老人に頼み置き候ひしは、かやうの言に成るべき事、蟲が知らせたるやうな心持致し扱々、誠のふしぎの縁に候」云々。

我に似ふ

二つに似たりし

ヒ具ヌ梨瓜



母ハ三郎也

丁度その頃、伊賀の兄から孟蘭盆會の招待狀が來たので、再び故郷の上野に歸つた。この時の芭蕉の滞在はすゝぶん長かつた。これは、壽貞の死が芭蕉の心に可なりの痛手を與へ、そのために長崎行きも思ひ止まつて、芭蕉を故郷の家にそんなに長く止めさせたのであらう。芭蕉が兄に呼ばれて二度目に上野に來た時は七月であつた。ところが、芭蕉が今度は大阪へ行くことを聞いて、迎ひかたがた大阪から支考がやつて來たのは九月中旬であつた。すると、同じ頃、江戸から沽圃が芭蕉を訪ねて來た。尤も、これは『續猿蓑集』を整理するためであつた。

猿蓑にもれたる霜の松露かな
日は寒けれど靜かなる岡

沽圃
芭蕉

芭蕉が、支考と惟然を伴ひ、次郎兵衛を連れ、又右衛門といふ者に荷物を持たせて、上野を立つたのは、九月四日の早朝であつた。芭蕉は、先づ奈良に行かうと思つて、笠置から曉を侵して船で木津川を下り、錢司を過ぎ、木津で船から上り、そこから奈良まで二里ばかりの道を歩いた。さうして猿澤の池の傍の宿屋に着いたのは夜更であつた。夜の十二時頃、猿澤の池の畔を散歩して、次ぎのやうな句を得た。

びいと啼く尻聲寒し夜の鹿

この時の事を「その夜（四日夜）すぐれて月も明かに、鹿も聲々に亂れて哀れなりければ、月の三更なる頃、かの池のほとり吟行す」と支考が書いてゐる。又、奈良には、古代の伽藍佛像が、今猶燦然と輝いて舊都の面影を存してゐる上に、更に菊の韻の高きに芭蕉は打たれた。その翌日、「九月五日」である。

菊の香や奈良には古き佛たち

九月九日、早朝芭蕉は、奈良を立ち、間峠（生駒山の横）を越え、疲れたので、途中で駕籠を雇ひ、生玉邊から日が暮れ、大阪に着いたのは、これも夜であつた。

菊に出て奈良と難波は宵月夜

芭蕉は、大阪に入る前に駕籠を下りて、折柄降りしきる雨の中を、鷹を着て町に入つた。これは「かかる都の地では乞食行脚の身たることを忘れてはならぬ」と考へたからである。

大阪の町に着くと、芭蕉は先づ酒堂の家で泊つた。その晩、酒堂が躰をかいならしく、

床にゐて躰に入るやきりぎりす

といふ句がある。その句を残して芭蕉は、その翌日は、之

道の家へ行つた。こんなに急いだのは彼が大阪に來たことが傳はると、門人知友たちが争つて彼を迎へたからである。又、初めに、酒堂と之道の家に行つたのは、この二人が芭蕉に大阪に來ることを進めたからである。その他、其柳の家にも、車庸の家にも、泥足の家にも、彼は顔を出した。その泥足の案内で新清水の茶亭に行つて、俳句の會を開いた。

人聲や此道かへる秋のくれ

此道や行く人なしに秋のくれ

岨の畠の木にかかる葛

芭蕉
芭蕉
泥足

芭蕉は、右の二つの句の内、いづれを取るか、と供の人々に聞いた。「この道や行く人なしに」と孤獨を詠まれたところ、誰がこのやうな名句を作れませう」と供の一人が云つた。芭蕉は此の句に『所思』といふ題をつけた。私が云ふ迄もなく、「この道」の句には、若くして老いた芭蕉が獨りとぼとぼと道（或ひは俳句の道）を辿つて行く姿が浮んでゐる。――

大阪に着いた日の翌日、九月十日の朝、芭蕉は、悪感を覺えた、しばらくすると發熱した、ひどく頭痛がした。併し、かういふ病氣が起る前から、既に伊賀の上野を立つ頃から、芭蕉は自分の健康の思はしくないことを感じてゐた。それは、

上野から笠置、笠置から小舟で木津、木津から奈良までの二三里の道を歩いただけでも非常に疲労を覺えたことでも分る。又、そのとき同行した支考に、芭蕉が「誰某が大和の旅をしたいと誘つてくれたが、自分がこんなにまで衰へてゐることを知らないからであらう」と口惜しさうに零した事で、其の頃から既に芭蕉の健康が可なり衰へてゐたのが分る。大體そんな風であつたから、十日から二三日静養して、十三日、少し氣持がよいので、芭蕉は天王寺から住吉の方まで出かけた。ところが、あいにく晝頃から雨が降つて來たので、折角の遊山の吟行も落着いて出來なくなり、そのうへ夕方時分から惡寒を催したので、



大急ぎで大阪に歸つた。住吉から大阪までは二三里しかないが、芭蕉は御籠に乗つて歸つた。が、次ぎの十四日の晩は、氣持が大變いいと云ふので、芭蕉は名残の月を見に畦止の家へ行つて俳句の會を開いた。

秋もはやばらつく雨の月の形とところが、例の發熱や頭痛が止まらないのに、十六日に、芭蕉は、京の去來に宛てて、天の橋立を見てから、長崎へ行つて唐船を見、それから、彦山、霧島、不知火、薩摩灣などを巡遊するつもりで、長崎まで行つて待つてゐるから、長崎まで來ないか、といふ手紙を出してゐる。これを見ても、如何に芭蕉が旅行好きであつたかが分る。その頃の句に、「六十六部は凡卑なれ



十月三日 卯

ばとて、とどめられぬ、猶筑紫下りの志はやまず」といふ詞書があつて、

春にわれ乞食やめてもつくし（筑紫）哉

といふのがある。これで見ても、まだ旅情勃々たる芭蕉の氣持が察せられる。――

併し、發熱と頭痛はなかなか治まらなかつたので、彼はそんな手紙を出しながら四五日靜養しなければならなかつた。それが二十日頃やうやく治まつたので、二十一日の晩車廂の家で又俳句の會を開いた。かういふ風に門人たちは芭蕉が大阪にゐる間に一度でも多く自分たちの家で俳句の會を催したが、芭蕉自身も固より好きな道だつたので、少しでも病氣が治まると俳句の會が開かれた。その車廂の家の會の時の句。

秋の夜をうち崩したる嘶かな

月まつ程は蒲團身にまく

芭蕉
車廂

支考がこの『秋の夜』の句に就いて「この句は寂莫枯稿の場をふみ破りたる、老後の活計何物か及び候はんと各感じ申し合ひぬ」と云つてゐるごとく、この頃の芭蕉の句は實に眞から芽えたものが多い。――

二十三日に、芭蕉は故郷の兄に出した手紙の中に「二三日中に、長谷名張越えにて參宮（伊勢）申すべく存じ奉り候」

と書いてゐる。十六日には、京の去來に、橋立から長崎その他を廻ると書いたり又、同じ頃に、別の人に、播磨路から京を経て美濃へ行くと書いたりしてゐる。これ等の手紙を見るに、或るものは故郷の老兄を安心させる爲めかとも思へ、或るものは門人等が餘り附纏つて來るのが煩さいので遠い長崎へ行くと云つたのかとも思へ、その他いろいろに氣を遣つてゐるやうに思へるが、また別の考へ方をすると、肉親を欺き、門人たちの氣を悪くさせないで彼等に嘘を云ふ、といふ風にも解されてゐる。併し、これ等の事は、結局、例へると、芭蕉の乗つてゐる船が瀧口に近い早瀬にかかつてゐる如き感がある、といふのが、最も適當な見方ではないのであらうか。

先きに述べた「この道や行く人なしに秋の暮」といふ句を作つたのは、この頃のことである。これは二十六日のことである。この二十六日に、芭蕉は旅宿で次ぎの如き句を作つてゐる。

この秋は何で年よる雲に鳥

これは、老いてはなほ漂泊する人が、身に衰へと、心に寂しさとを感じ、寂莫の極、斷腸の思、思ひ屈したる芭蕉が、その日の朝から心に籠めて念じた句である。「これは、やむ事

なき世に、何をして身のいたづらに老いぬらん、」と切に思ひ侘び、「この秋は、いかなる事の心になはざるにかあらん、伊賀を出て後は、」明暮に身も心も悩み多く「京、大津の間を経て、伊勢の方におもむくべきか、それも人々のふさがりてとどめなば、わりなき心も出きぬべし、とかくして力つきなば、ひたぶるの長谷越すべきよし、しのびたる時はふくめられしに、ただ羽をのみかいつくろひて、立つ日もなくなり給へるくやしき、いとどいはん方なし。」と支考が『笈日記』の中で述べてゐる。これは至言である。

この句に就いて、惟然が次ぎのごとく書いてゐる、「幽玄きはまりなし。奇にして神なるといはん。人間世の作にあらず。其夜より思念ふかく、自失せし人の如し。雲に鳥の五文字、古今未曾有なり。」

芭蕉は、性來虛弱であつたのに、この時の旅では、前に述べたごとく、奈良でも大阪でも、秋冷の夜に吟行をしたり、殊に大阪では會席の忙しさに紙衣も持たずに會席廻りをしたり、旅すると必ず持病の痔と腸の病氣を起す癖があつたのであるから、かういふ病氣になつたのは當然であつた。そのために、會席の日取もするぶん豫定がくるつた。

九月二十七日、芭蕉は、園女の家と呼ばれて、所謂山海の

珍味を持成された。——園女は、醫師の妻であつたが、初め歌を好み後に俳諧を好み芭蕉の門に入つた、といふ謂はば風雅な女性であつた。が、次ぎのやうな逸話がある。「園女は、風流の鐵肝石心なり、男女の情を忘れ切りたり、(中略)世の生業に至つて疏く、或る日途上に下駄の鼻緒切れし時、着たる袖の下を切て緒となし(下略)」といふ類である。併し、この逸話は極端な例で、彼女は閑雅な貞淑な清廉な女性であつたに違ひない。それは次ぎの話で分る。——芭蕉が園女の家に行つたとき集つたのは、之道、渭川、(園女の夫)、支考、惟然、酒堂、舍羅、何中、園女、芭蕉の九人であつた。歌仙一卷できた。

白菊の目にたてて見る塵もなし

紅葉に水をながす朝月

芭蕉
園女

いふまでもなく、「白菊」の句は、園女が閑雅清廉な事を稱讃したのである。

その翌日の二十八日にも、畦止の家に秋の名残を惜しむ會があつた。そのまた翌日の二十九日にも、芝柏の家で盛大な歌仙を興行して一選集を作らうといふ事になつた。ところが、この連日の饗應に無理な酒食を重ねたのが、長い間簡易な飲食をしてゐた芭蕉に、而もひどい持病に十日以上悩まされて

ゐた芭蕉に、非常にこたへたらしく、例の悪感と發熱がこれまでより激烈に起つたので、芭蕉は約束の芝柏の家に出席することが出来なかつた。その代りに、次ぎのやうな句だけ送つた。

秋深き隣は何をする人ぞ

この句には、旅の宿で、彼自身は氣づいてゐないが、輕くない病にひとり苦しんでゐる人の鋭い神經が感じられる。森閑とした蕭條とした深い靜かな秋の氣が鋭くなつた神經を一層鋭くする。普通の人間なら苛々するところであるが、病苦を堪へながら聞耳を立ててゐるところは寧ろ凄い。併し、それを實に平靜に詠んでゐるところは、この十七字こそ、惟然の言葉を借りると、「古今未曾有」であらう。が、この晩から、激しい腹痛と下痢が始まつたのである。初めは、二十七日に園女の家で食べた菌に中毒したのではないかと云はれたが、實際は、前に述べた秋氣の濕氣の夜歩きや、極度の過勞や、重なる食物の不衛生などが、この病氣を引き起す元となつたのであらう。それでも、芭蕉の病氣の輕くないことを聞いて集つた門人たちが、初めは、いつもの持病が出たのであらうと、買藥を飲ましたりなどしたが、少しも治まるやうな様子が見えない。それどころか、十月一日、症狀が急に變つて二

十餘回も下痢したので、氣力は衰へ手足が氷のやうに冷くなつた。それが、二日、三日になつても、止まりさうにないで、始終傍に附いてゐた支考と惟然が、これは唯事ではないと思つたので、芭蕉と謀つて、大津の木節と京都の去來に急飛脚で知らせた。ところが、この急飛脚が途中でいろいろの故障に遭つた爲めに、支考と惟然の書いた手紙が去來と木節の手に遅く着いた。

十月五日、芭蕉の泊つてゐた芝道の家の部屋が狭苦しかつたので、本願寺の支堂である南御堂の前の、花屋仁左衛門の裏座敷に芭蕉を移した。

静かな座敷に移つたせゐか、六日は芭蕉の氣分がよかつた。

七日の朝、膳所の正秀が着いた。少し後れて、京都の去來が入つて來た。夕方、大津の乙州、木節、栗津の文草、平田の李由、などが着いた。醫師の木節は早速逆挽湯を調合して病人に飲ました。去來は着くと早速芭蕉の病床の傍に行つて、片時も離れず看護に努めた。支考が去來にその譯を聞くと、「この夏、翁が私の家に泊つて居られたとき、誰々は自分を親のやうに待成してくれるが、自分はもう年をとつたので、誰ひとり子のやうに目をかけてやることが出来ない、と仰つしやつたが、私は俗事に追はれて、これといふお勤も御恩返

しも出来なかつたので、かういふ時にでもお傍を離れずに、御介抱したいと思つてゐます、と云つた。これには支考のやうな輕卒な人間でも心の中で頭を下げた。去來は、蕉門の中でも博學篤實な人であり、芭蕉の衣鉢を最も正當にうけた人であつたので、同門の誰からも尊敬された。

中には、風國のごとき師匠思ひの人があつて、芭蕉の病氣の事を聞くと、北の北野の邊に家を借りて、芭蕉が健康回復後の住居にするために家具調度の用意までした。芭蕉が死んでその家が要らなくなり、その家を返すとき、彼は非常に落膽して一句作つた。

力なく軒を見通す時雨かな

愛國婦人會 隣保館長 田中法善編述

女中さんを 中心としたる 家政讀本

文部政務次官 添田敬一郎閣下推薦

世の所謂、奥様、お嬢様、娘もつ母親達……等々に、それから家事の實習に餘暇を持たれない職業婦人の方々にも讀まるべき讀本だと思ひます。(山田わか)

本書は特に法然上人讀仰會にてお取次いたします。
定價壹圓六十錢、普及版壹圓 (送料共)

筆随

早春の花

眞野正順

— 花 の 春 早 —

世に果敢なく美しいものは野草の花でありませう。その粗野な青葉にまちつてひらく、小さな花は、色香もまづしく、やがて人知れず淋しく散りゆくものでありますけれど、可憐にひらくその花びらの色は、あくまで澄んで清いのであります。まして更に、人跡絶えた山深い巖のかげに、苔にまちつて、小さな濡れた葉を差出してゐる名も無い草に着く、小さな花の運命こそは早敢ない極みであります。その生命は、曉の空に残る星のごとくに短い。彼等は、山頂の絶え間なき風雪のなかに、傷ましくも堪へて一年、もしくは数年を隔てゝはじめて、たゞ一時の彩をつけると言はれております。しかしながら、その澄み切つた色はたとへば山頂に近き空にまたゝく星の光のやうに、純朗、神に近いまでに、澄み透つて清いのであります。

私は、これらの淋しい山野の無名花を見るたびに、この佛道の上に、いまは其跡も消えて名も知られず、逝つてゆかれた、數知れぬ古き聖者の群を思ひ浮べるのであります。

この崇高なる佛の道に咲く花も、人はしばくその外面の姿の淋しい色によつて、これを見過してしまふことが多いのであります。人は、常に、たゞ、常凡な道德や知識の數々によつてのみ、その人の尊卑をおしはかる。

しかしながら、人のまことの尊さは、かゝるみだりがまじき外相の中にはなくて、その奥深く秘められてゐる純なる心ばえ、切なる求道の誠實さの中にのみあるのです。しかも、己を慮する心



諸國綺譚

座して祇園を見る

昔越後の國蒲原郡龍谷村慈光寺の山林には天狗が多くゐて、他國の者の寄宿する時は、さまざまの怪異をなして人を驚かすこと屢であつた。

或る年六月の半ば頃、寺僧皆他出して寺には僕童一人が留守居してゐたが、髪長く生ひた旅僧一人出て來つて、暫らく休んでから「今日、祇園の祭を見たくはないか」と尋ねた。僕は「見たいけれども、思ふやうにならぬので」と答へると、それなら俺が見せてやらうと、僕を伴つて出て行つた。

と、忽ち數千の群集街にみち、金鼓耳に喧しく、錦綾目に燦然として終日飽かず、日暮れてから旅僧と共に歸らうと或る菓子屋に立寄つて干菓子を買求めてゐる間に彼の旅僧を見失つたと思つて、邊りを見廻す

のまことは、その謙虚なる物腰のゆえに、人の眼に過ぎ易く、道をおもふ崇い心の澄みは、外色を求めて移る人々の眼には止り難くかすかであります。されば、清き聖者の微笑は、村落の片隅に、茅舎の蔭に、または市井の汚臭の中に、たゞ勿忙とまぎれ消されて、人類の記憶から永遠に數知れず忘却されてゐるのです。そうして、今の私達はみづから足をもつて、それらの尊き聖者の跡を踏みつゝも、これを知らずに暮してゐるのです。

まことの道が、明らかに、その雄々しき姿をもつて、この世の上に打建てらるゝ日まで、いかに多くの隠れたる聖者達が蔭にあつて、刻苦し勤勞し、やがて其跡も無く消え去つてゆかれた事か。

佛陀の教が、打建てらるゝ日までに、如何に多くの諸菩薩達が、この道を培ひ、また音もなく消え逝つてゆかれたと言ふ事は、經典の既に語るところであります。また、聖法然の出現にいたるまでいかに多くの「淨土を希ふ聲」が、こゝの民落、かしこの山蔭に奏でられたことか。それは、宛かも霜夜の空の星のごとく煌めいて、しかも寂かであります。人は満月の限なき光を見ると、かつ

ての暗夜を忘れる。暗夜の空に、淋しき瞬きの笑を我等の胸に贈つた星の數を忘れる。しかし、大いなる道は決して一時には成らない。必ずや、それに到るまでに數知れぬ、數多の聖者達の隠れたる辛苦と勤勞とをまたねばならない。いまは、名も無く、忘れ果てられたる聖者の多難なりし辛勞の數々よ。それは、まことに曉空の星のごとくに澄んで、かつ、果敢ないものであつた。しかし、それなくて今日、われらは遂に、巨いなる佛陀やまた聖法然の博大なる教を見ることは出来なかつたのである。

○

新春となると、深山の雪を裂いて、その可憐なる首をもたげるといふ雪割草や、霜土を破つて、陽光のやうに、まぶしく開く福壽草や、堅氷を割つて、その夢を抜く河邊の水仙などが、續々私共の机邊にはこばれてきます。ことごとく山野に笑んでゐた群です。春日を背にして、その澄んだ色香を凝視めるたび、私の眼には、いつも、淋しい古聖の笑みが、その中に浮んで來るのを覺えるのであります。

と、己れは矢張り元の座敷に座つてゐた。

女の深情

肥前の國平戸の藩中に田中某といふ者がおつたが、平戸の在一二里距つた村から一人の下女を雇ひ入れた。この女美貌の上従順であつたので主人の氣に入つてゐたが何時しか田中がこの女に手をつけたのを妻が聞き知つて、家内に風波が起つたので、この女を里に歸した。然し田中は時々この女を尋ねて行つた。或る夜、何時もより少しく遅れて出かけたところ、途中ふと氣が付くと酸漿の實の如く青く光る物が彼の傍へ飛んで來たので、さては狐狸の類かと刀に手をかけて切りつけると、遠く飛びのいて切れない。そして始終そばを離れずに田中と共に女の家まで來てしまつた。田中は女に會ふと、

「君を待ち詫びて、つひ寢込んで、まふと君と、堤のあたりで逢ふた夢を見ました。」と云はれ、その深情に空恐ろしくなつたと。



不如意と念佛

山中 峯 太郎

十六年あまり、日記を書きつゞけてゐる。この間、読みかへしてみると、しみ／＼苦い、われながら見にくい、重い氣もちに沈みかけたことである。

「不如意。」

この言葉のとほりの十六年である。

まづ好かつたと思つてゐる一日さへも、一年のうち、かぞへる位しかない。

いろんな事を思ひ立ち、それが皆くづれて、いつしか消えて、また他のことを業々しくも思ひあ

がり氣負つてゐる。それがまた崩れてしまひ、愚かしい自分が、自分をもちあげて、また別のことを、新たに考へ、實行しようとしてゐる。

崩れては立て直しく、過ぎてきた、何とも苦い十六年あまりである。

「不如意」

一つのことさへ、思ふやうにはできてゐない。幻を追ふてきたやうな自分なのだ。

その原因は、おしつめてみると、自分が思ふやうにならないのである。

浄土俳句

中橋 義一

合掌の心静けし今朝の春

吉野 法泉

親山羊の乳ぶら／＼と冬温し

眸 子

新海苔の香も豊かなり朝朗

長澤 晴男

霜晴の大地きらめく初日哉

西坂 早苗

追羽根のそれて小さき松飾

同

南天の實の赤さかな朝の雪

福島孝治郎

旗の海灯の波となり建禮門

細井 紫穂

西風の街道いそぐ初荷哉

藤原 耕人

書初や日記に迄も南無阿彌陀

同

自身の不如意をこのまゝ棚に上げて、まはりのものを責めることは、できないと思ふ。ずるぶん我がまゝな自分ではあるが、

「おれの思ふやうになれ。」

とは、子どもや妻にも言へないのが、ほんたうの氣もちである。

なほ、思はれることは、この十六年あまりを通じて、不如意のもとが、すべて「煩惱」の障りであることを、身にしみて氣づかずにゐられない。してみると佛教にいふ「煩惱」そのものが、つまるところ自分なのである。

自分そのものが、障りなのだ。

思ふやうにならないのが、當然なのである。外から障りが妨げてくるのではなく、自分が内からいつも妨げ、害ひ崩してゐる。これが、ほんたうの姿なのである。

日記をくりながら、そのやうに思ひ、ふと、ある日を見ると、法然上人のお歌を、そこに書きつけてゐる。

柴の戸にあけくれかゝる白雲を

いつ 紫のいろにみなさん

あけくれにかゝる煩惱の雲を、菩提の覺へと望まれる上人では、おありにならなかつたか。

圓光かゞやきたまふ法然上人にさへ、この不如意のお歎きが、おありになつたのだらうか。

しかし、思ひかへしてみると、地上の人間として不如意なればこそ、すゝみゆく望があたへられる。

いはゆる「願往生心」も、不如意の中から生れ伸ばされる。

日々の不如意こそ、むしろ我れらの生命ではないのか。

してみると思ふやうにならないと歎くのは、あまりに愚痴すぎる。それは、煩惱を重ねるものでなくて何だらう。

自分の不如意を歎く愚痴だけは、せめて断ちきりたいと思ふ。

これを断ちきつて、不如意を歎かず、そのまゝに受けとりながら、希望の彼方へすゝむ。この力が、「信心」から生れる精進の力ではないのか。

不如意は常態であり、その中を進んで行く不断的行進曲が、念佛であると思ふ。

此村は雲に暮れて灯りけり

○ 久保田 穰

春の雷うつゝに聞きて頓て覺む

○ 小西 時雄

放牧の牛のどかなり山の蔭

○ 鹽塚 哲舟

讀初めや十方世界の佛の名

○ 岩田 諦眞

春の日に解けて嬉し、雪と胸

○ 同

熟々と心耳澄けり除夜の鐘

○ 吉野 法泉

卸したる舟の跡あり雪の濱

○ 荒谷 澄風

葉漏れする冬日や椽に黄昏るゝ

○ 中橋 義一

ゆく年の思ひ出汲まん閑迦の水

○ 平野 博士

水仙の苞ひそるゝに心澄む

○ 同

み佛の古き光や十夜寺

迦毗羅王家の二婦人(一)

摩訶波闍波提と耶須陀羅……

岩 野 喜 久 代

(一)

釋尊が成道後迦毗羅城を訪問されたことは、

釋迦族の人々に多大の衝動を與へました。

中でも最も大きな心の打撃を受けたのは、

淨飯大王の妃摩訶波闍提と釋尊の太子時代の

妃耶須陀羅であります。この二女性は共に印

度の名門拘利城の出で、波闍波提は佛母摩耶

夫人のおん妹に當り、釋尊とは叔母、甥、

耶須陀羅とは叔母姪の親密の間柄であるばかりか、

釋尊降誕後七日目に摩耶夫人が亡くな

られた後は、釋尊の養育を一身に引受けてま

ごころを盡した人であります。

淨飯大王を始めこの二女性がどんなに悉多

太子の歸城を待ち侘びてゐたかは、十年餘り

王の後繼ぎをも定めずにゐた事で推測するこ

とが出来ます。

釋尊の成道は故郷迦毗羅城へもすぐ傳はり

ましたが、父王の矢のやうな使を受けながら

釋尊は直に故郷へ歸らうとはなされず、おも

むろに教化の機縁の熟するのを待つて居られ

ました。

釋尊が各地を旅行されて、王位を繼承する

望の全く無い事を知つた父王は、今はすつか

りあきらめて、摩訶波闍波提の産んだ釋尊の

異母弟難陀王子を太子に立てることに決心し

ました。

難陀は釋尊によく似た偉大な體軀と麗はし

い相貌をもつた貴公子でした。非常な熱情家

で、當時國內第一の美女と云はれた孫陀利姫と相愛の間柄でしたが、父王、母後のよき理解を得て、立太子式を擧げると同時に結婚することになつて居りました。

釋尊の歸城は丁度難陀の立太子式の三日でした。それが思ひがけない大きな波紋を王室の人々の間に投ずることになりました。

(二)

今日は難陀の立太子並に結婚式の輝かしい

日です。王宮では早朝から式場の莊嚴や大饗

の準備に忙殺されてゐました。城門は眞一文

字に開かれ、掃き清められた大路を地方の大

名や隣國の使臣たちが祝賀を大象の背に載せ

て、ひっきりなしに急いで参ります。

波闍波提は母としての満足しきつた喜びの

中に、式に列する装ひをととのへて居まし

た。その時一人の侍臣が慌たどしく入つて來

ました。

「お妃さま。大變です。太子様が御出家なさ

れてしまひました。」

「何をそなたは云ふのぢや、つい今朝ほど逢

ふた時まで難陀は喜色に溢れて出家する氣色など露ほども見えなんだ。何ぞ間違ひであらう」

「はい、仰せの通り難陀様は御出家なさる御考へなど毛頭お持ちになられては居りませんでした。それを無理無慮に沙門にされてしまはれたのでございます。」

「何、無理強ひに沙門にされたと。一體誰がそのやうな力を用ゐることが出来るのぢや。摩珂三摩多王の流れを汲む偉大な王家の嗣子を何者なれば王宮から誘ひ出して頭を削つてしまふたのぢや」

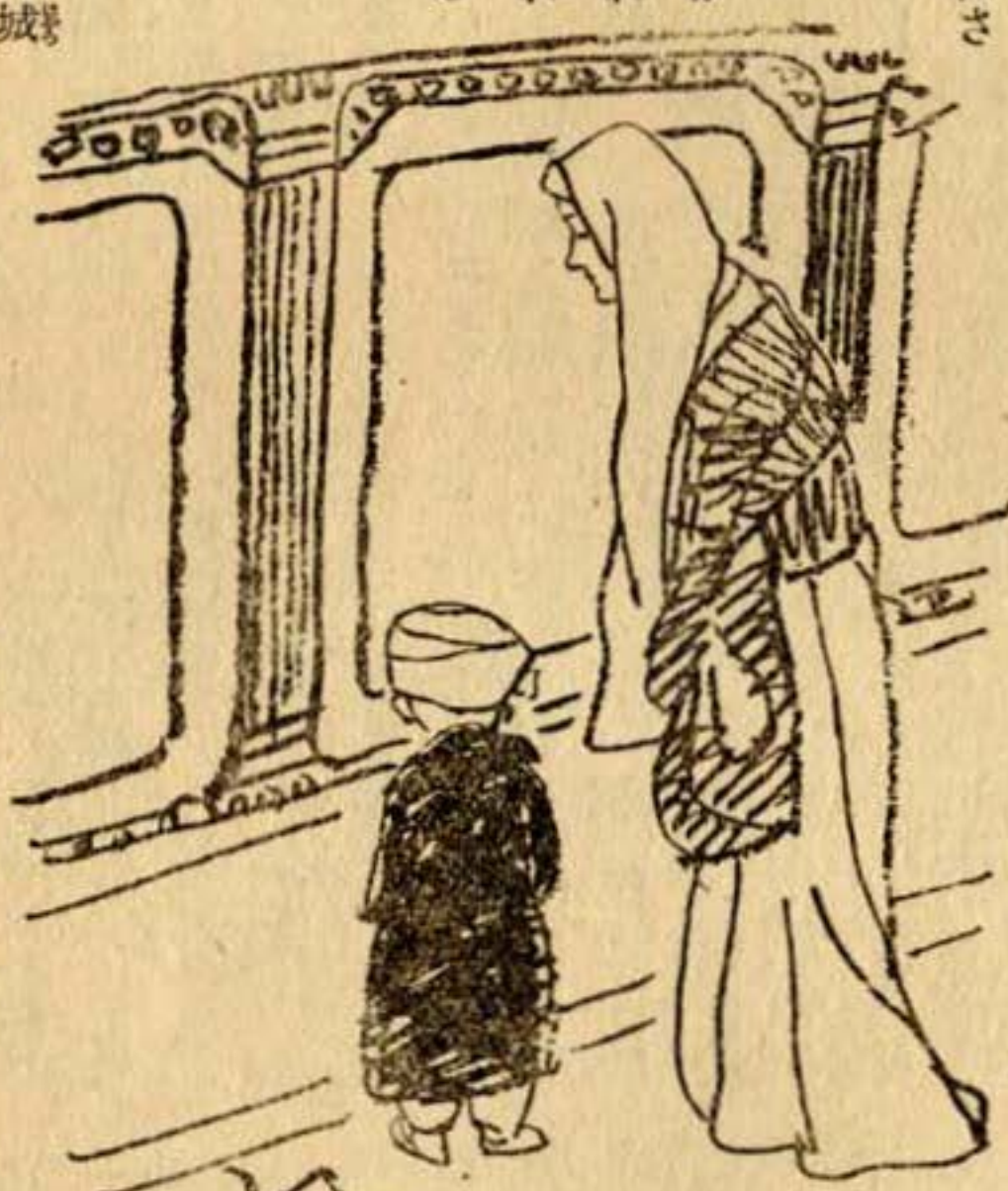
「お姫様、それは世尊であらせられます。」

「おお、世尊」

「今朝ほど世尊はいつもの通り行乞に城内に入つて來られましたか、やがて難陀様の宮殿へお見えになりましたのです。難陀様は大層お喜び遊ばして恭しくお迎へ遊ばしますと、世尊は今日の盛儀の御祝詞を

おのべになつてお手の鉢を難陀様にお渡しになりました。難陀様は甘味を満して世尊に差上げましたが世尊はどうしてもお受取り遊ばされませぬ」

「何、鉢をお受取りなされぬと。」



「尊よどうぞこの供養をお受け下さい」と申し上げながらとうとう城外の尼拘盧陀樹園までお供なされたので御座います。そして其處で世尊の爲に無理に出家させられたのでございます。」

これを聞いた波闍波提は首の瓔珞を掴んで身悶えして伏し轉びました。

「おお、お恨めしい世尊、いとしい難陀、可愛相な孫陀利、私たちはどうしたらよいのでせう」

併も悲劇は單にこれのみで終りませんでした。難陀の出家によつて火の消えたやうな王室は、更に數日後、王孫羅睺羅の出家の報を受けるに及んで痛恨悲歎のどん底に沈んでしまひました。

(三)

耶須陀羅姫がどんなに美しく優れた女性であつたかは、釋尊が悉多太子時代に、姫に得ようとして、提婆と技を競つたことで、よくわかります。

太子入山後の耶須陀羅姫はまことに寂しい

氣の毒な有様でした。併し貞節無比の姫は、一子羅睺羅の養育に専念して、その成長を樂しむと共に、山に苦行する太子の辛勞を常に思ひやるのでした。

風のたよりに太子が日に、一握の胡麻しか取らずに居ると聞きますと、自分も一切の美食を却けて一日に一握胡麻しか取りません。又、太子が樹下石上を宿として寢て居るときけば、自らも錦繡の茵をすてて宮殿の外に臥し、つぶさに太子の苦行にひとしい苦味はつて見るのでした。

それ故、釋尊が歸城して父王に見えた時、父王は第一に姫の貞節辛勞を告げること忘れませんでした。その時釋尊は深く背いて姫との深い前世の因縁を物語られるのでした。

釋尊が歸城して父王に見えた時、姫は後宮に居て、敢へて出迎へようとしませんでした。一日も忘れることの出来ない戀しい良人ではありましたが、又、産褥にある母子を見捨てて出家したつれない仕業を恨む心持も深かつたのでありませう。やがて釋尊は姫の後宮に

現はれて懇ろに教誡を垂れて城外に歸られました。

當時印度婆羅門の間では、妻を娶つた男が二年乃至三年出家して園林に住み、道を修めた後再び家に歸つて、俗事にたづさはる風習がありましたから、耶須陀羅も恐らくは、釋尊が自分や一子羅睺羅のもとに歸つて來るのを信じて疑はなかつた事でありませう。

しかるに世尊は遂に耶須陀羅のもとには歸られませんでした。世尊の大愛は小さな家族愛の範疇を遙かに超えて、全人類全宇宙を包含する崇高偉大なものにまで擴げられてゐたのでありました。この佛者の大愛、大慈悲が那須陀羅にはまだ充分呑み込めて居ませんでした。ですから歸城後も王宮に入らず、城外の園林に行ひ澄ましてゐる釋尊を、何とかして家族の方へ引よせたいと焦心しました。そして父子の情愛をもつて釋尊を動かさうとして却つて羅睺羅をも出家させる結果になりました。

難陀が出家して數日經つた朝のことでした。

那須陀羅は羅睺羅をつれて王宮の高樓から街を眺めて居りましたが、折から一列に並んでしづしづと城内に入つて來る沙門の群を見ると、急に愛兒を引きよせてささやきました。

「ねえ、あそこを御覽。澤山のお坊さんに圍まれて一際立派な方が來るでせう。キラ、キラと輝くやうな神々しいお顔の方。あの方があなたのほんとうのお父様ですよ。」
釋尊入山當時産れたばかりの羅睺羅ははや十歳ばかりの美しい凛々しい少年に成長して居りました。

「僕のお父様はあの立派なお坊さんなの。お傍へ行つてお話したいなあ。」

「さあさあ、早く後を追つて『貴方は私のお父様です』と申上げてゐらつしやい。そしてねお父様はとても立派な尊い寶物を持つてゐらつしやる筈ですから、それを頂いてお出でなさい。『私はお父様の遺産を繼いで迦比羅の城を繼ぐのです』と申すのですよ。」

これを聞いた羅睺羅は大層喜んで一散に王宮を走り出て、行乞する釋尊の後を追ひました。

耶須陀羅が羅睺羅に遺産を分けて貰へと示唆した心持は、精神的遺産、即ち法の後継者

たらしめようとした大きなものではあり

ませんでした。當時耶須陀羅の心境はそ

こまで開けては居りませんでした。釋尊

を私のものに思ふ心がまだ深かつたので

ありました。

羅睺羅は釋尊の傍に行きますと、親子

の情愛を自然に感じて

「お出家様のお顔を見て私は楽しい。貴

方は私のお父様です。どう

ぞ私に遺産を下さい。」

と釋尊の衣にまつはりついて離れず、と

うとう城外の尼拘盧陀樹園まで従つて行

きました。

園林にお着きになつた釋尊は高弟舍利弗を

お召しになつてから申渡されました。

「幼い者が私に遺産を求めてついて來た、併

し世の常の財寶は苦しみ惱みを産むもの

だ。私はこの子に永久に變らぬ價值のある尊い遺産を、今こそ與へてやらうと思ふ。用意を具へてこの子の髪を剃つてやつて呉れ。今後はおん身に任せるからよく教導し

を釋尊の爲に奪はれた摩訶波闍波提と耶須陀羅は相抱いて涙の日を送り、城民はその子弟が相繼いで出家するのを見て「世尊は釋迦族を絶滅しようとするのか」と恨みました。

悲歎に青ざめた淨飯大王が世尊を訪れ

て、

「今後は兩親の承諾のない若者の出家を

絶對にお許しになりませんやうに」

と申したのは實にこの時でありました。

釋尊が難陀と羅睺羅を出家させたの

は、深い深い大愛に基いてゐるのです

が、人々は氣付きませんでした。恐らく

釋尊はその三世を貫く叡智を以て、やが

て釋迦種族が悲惨な滅亡をたどる運命

を、この時すでに洞察して居られたに相

違ありません。親しい者を闘争戦禍の巷

に置くに忍びず、平安寂靜の世界に引き



てやつてくれ。幼ない者故随分いたはるや

うに。」

入れられたものと考へられます。(つづく)

難陀について羅睺羅も出家させられたといふ

知らせは王宮を震駭させました。最後の二子

地獄^{ちごく}へ陷^おちる武士^{ぶし}

湊 邦 三

玉井 徳 太 郎 畫



地獄へ落ちる

(一) 諍ふ主従

笹尾彈左衛門がまだ酒の氣の残つてゐる顔を眞赧にして怒號して、腕を伸して太刀を握んだ。

「友平ッ、もう一度、申して見よッ。その分には棄置かぬぞ！」
仲間の友平は脅えて木の葉のやうに慄えながらも、血走る眼を主人に向けて、必死の反抗を止めなかつた。

「いへと仰言れば、幾度でも申します。いかに御主人とはいへ、あんまりでございます。半季に二兩の給金を、足かけ三年溜めて置いて——。」

「えッ、五月蟬いッ。斬るぞッ！」

笹尾彈左衛門が握んだ太刀の鯉口をブツリ切つて、肩を聳やかして威嚇すると、友平が青醒めた顔をヌツと突出して、忿怒に戦きながら絶叫した。

「斬れるものなら、お斬りなされませッ。友平は太刀を恐れて口を噤むほど、小膽ではございませぬぞッ。」

「な、なに、下郎の分際で、飽迄、主人へ桶衝くかッ。よおしッ、友平ッ、覺悟せい！」

彈左衛門が叫んで颯と抜討ちにくると、武藝の心得のある友平がヒラリ交して、彈左衛門のきい腕を握んだ。

「酒色に身を持崩して、修業を怠つてゐる人に、友平斬られはいた

しませぬぞッ。半季に二兩の給金を、足かけ三年も拂はない上に、草鞋づくりの内職で稼いだ私の金まで、費つて置きながら——。」

「友平ッ、何時、そ、それを、拙者が拂はぬといつたかッ!?」
彈左衛門が握まれた腕を、振解かうと悶躁き、醜く歪んだ顔の眼を、忿怒に光らしてさういふと、友平が喘ぎ／＼いつた。

「拂ふといふは口先ばかり、病氣の母へ仕送りに、三年の間の給金から、五兩だけ都合して下さりませとお願ひしてから、一體、幾日になるのでござります!? それも、餘儀ない事情から、暫時待てといはれるのなれば、友平諦めもいたしますが、今夜まで待て、明日はやると口から出まかせにいつて置いて、毎日、遊蕩びはうけてゐる人を、何時まで信じてゐられますかッ！」

友平涙を眼に滲ませて、口惜しさのあまり、赫ツとなつて思はず腕を強く振上げると、彈左衛門が苦しげに顔を歪めた。

「うゝむッ、友平待てッ。拙者が悪かつた。詫／＼ッ！」
友平がその聲を意外と聞いて眼を睜つた。

「只今、手許に金子はないが、賣拂へば五兩の金になる品物をやるで、友平、この手を緩めてくれ！」

母の病氣を心配して、國元へ金を送りたい仲間の友平が、彈左衛門の腕を離して飛退つて、兩手を突いた。

「お助け下さいませ。母は病氣して、薬を買ふ金がないのでござります。三兩でも、二兩でも、結構でござります。お助け下さりま

せ！」

主人彈左衛門の居間から、仲間の友平が、秋の七草の模様のある薩摩焼の花瓶を、重さうに兩手に提げて現れたのは、それから半刻の後だった。

『有難うござります。御恩は忘却いたしませぬ。これで母も助かります！』

友平は國元へ送金が出来ると歡んで、彈左衛門が重い花瓶を提げさせた魂膽を、見破る事が出来なかつた。

『友平、道具屋の甚兵衛に合つたら、ちと遊びに參るやう申してくれ。』

彈左衛門の聲は和んでゐるのに、友平の背後に注がれてゐる眼には、殺氣が溢れて、不氣味だった。

『彼奴には、今迄に随分儲けさしてあるのだから、遠慮はいらぬぞ。』



その花瓶、十兩で買へと強く申せ。』

『では、一走り、行つて參ります。』

友平が小腰を屈めて歩き出した背後から、彈左衛門獲物を狙ふ狼のやう、つ、つと遂に抜刀を振冠つた。

(二) 歪んだ心

梅は咲いたが、手水鉢に、毎朝、氷が張詰めてゐた。

あれから十日、雪になりさうな一月末の寒い日の暮方だった。

笹尾彈左衛門が、袴姿で腕を拱いて暗い座敷の隅を睨んでゐた。

(佐藤かな。清水かな。それとも和田進吾かな?)

彈左衛門が思ふに、同じ納戸役を勤めてゐる朋輩の顔だった。

(いや、和田よりは、清水の方が怪しい。彼奴、拙者の出世を妬んでゐるからな。いや、待てよ。清水より、瀧口紋次郎が疑はしいぞ。拙者が重役に呼ばれる前に、彼奴、

納戸部屋から、そそく
さと立つて出て行つた
ではないか。うむつ、
さうだ。彼奴が何か告
口をして、その爲に、
拙者が呼出されたに相
違ない！」

笹尾弾左衛門は今日は登城して、

重役に呼付けられた。

『理由は申さずとも、覚えがあらう。殿が強いお怒りぢや。早々に
立歸つて、何分の沙汰がある迄、慎んで居れい！』

弾左衛門、年は三十一でまだ若いのだが、心に咎める事が多かつ
たから、さういひ渡された瞬間に、颯と顔を土色にして老人のやう
に震えだした。

けれど根性が松の根のやうに曲りくねつてゐる弾左衛門が、今迄、
重ねてきた悪事の數々を、一つ／＼思出して、良心に苛責を感じる
素直さを持合してはゐなかつた。

彼は自分の行狀を、誰が殿の耳へ入れたか、その詮索に耽つては
憤りに全身を赫つと燃え立たしてゐるのだつた。

（彼奴だ／＼ッ。瀧口紋次郎に相違ない。それといふのが、友平を
斬つた日に、彼奴、遊びにきたではないか。あの時は、下郎の分際



とを入れたに相違ない！』

座敷の暗い隅を、ちつと凝視してゐる弾左衛門の眼が、猜疑に光
つて青白かつた。

『あの場合、下郎を斬るのは、當然でござります！』
その頃、城内の御用部屋で、家老稻戸隼人の前で弾左衛門の爲に、
熱心に訴へてゐるのは、その瀧口紋次郎だつた。

『いささかの事に逆上して、主人は反抗ひ暴言を吐き、武藝の心得
のある處から、笹尾氏の太刀を奪つて斬付けやうとしたといふので
はござりませぬか。主へ弓を引くは逆賊、その罪は最も重かるべき
もの、笹尾氏が我慢なりかねて一刀のもとに、仲間を成敗したは、
咎められべき事柄ではござりませぬ！』

『瀧口、その話は——。』

家老稻戸隼人が雪白の眉を上げた。

で無禮な振舞ひがあれば、叩ッ斬
るのが當然だなぞと、上手く拙者
に言葉を合せてゐたが、その實、
役目の上で、拙者を追越さう野心
があるで、影へ廻つては、どんな
事をいひ觸らしてゐるか知れたも
のでない。さうだい、瀧口紋次郎
が悪ざまに、重役達の耳へあのこ

「誰か、目撃した者の話か。」

「誰でもござりませぬ。折ふし拙者が笹尾氏を訪ねて、下郎が狼藉の光景を、この眼で見たのでござります。それで失禮をも省ず、

事の次第を申上げるのでござります。」

明輩の有難さ、瀧口紋次郎は笹尾彈左衛門が血刀を井戸端で洗ひ拭つた頃、ブラリ訪ねて行つたのだが、重い咎めが明輩へかからぬやう、目撃したといひ切つたのだつた。

それに瀧口紋次郎は家來に厳しい男、どんな理由があらうとも、召使はれてゐる者が、その主人へ反抗することを、強く憎む男だつたから、彈左衛門を庇ふ心も強かつたのだつた。

それから三日ばかりの後のこと、瀧口紋次郎が御納戸部屋にゐると、御用部屋から呼出しがきた。

「瀧口、殿からお赦しが出たぞ。」

家老稻戸半人が眼轍を刻んで嬉しげにいつた。

「汝から聞いた事の次第を、早速、殿へ言上して置いた處が、只今、赦してやれとの有難い御沙汰があつた。この度の笹尾のこと、誰が殿の御耳へ入れたか知らぬが、怪我人を出さずに済んだは、目出度いことぢや。即刻、使者となつて、笹尾にこの由を傳へてやれ。」

「はッ、有難いお言葉、何とも御禮の申上げやうがござりませぬ！」

誰でも、自分の意見が用ひられたことは、嬉しいものだ。格別、笹尾彈左衛門が好きだといふのではなかつたが、同じ納戸役で、毎

日顔を突合せて心易く交際つてゐる明輩を、重い咎めから救つたこととの嬉しさに、瀧口紋次郎が胸を躍らせて、近習頭の横川主馬と二人、使者となつて城を出た。

「瀧口氏、お骨折りであつたさうだな。」

近習頭の横川主馬が大手御門を潜つてから、瀧口紋次郎にいつた。

「笹尾氏をあのまゝで置けば、切腹の御沙汰があつたかも知れぬ。

殿は御聰明に渡らせられるで、誰が言上したか、近習の者にもお漏

しがないが、笹尾氏の行狀を、随分、深くお憎みのやうであつた。

危いところだ。」

瀧口紋次郎は莞爾となつて、晴れた冬空を仰いだ。

「いや、理由の如何に不拘、明輩が重い咎めを受けるのは、嫌なものだ。何がなし、心が軽い！」

(三) 椿の花

物怪に通かれたやう、暗くひっそりとした邸だつた。

笹尾彈左衛門は居間に坐つて默念となつてゐたが、群り起る恐ろ

しい想念に、彈かれたやうに立上つた。

(今夜の内に、逃げやう。何時まで沙汰がないところを見ると、次

から次へ、いろ／＼と拙者を惡ざまにいふ奴が出てきて、罪が定ら

ずにあるのかも知れぬ！)

彈左衛門が庭へ下りて、目映しげに眼を細くした。



二月初旬の晴れた空から、驟々と降つてゐる金色の陽を、全身に浴びて立つてゐると、緋く枯れた足もとの枯芝に、陽炎が立つかと思はれる暖かさ、春の近い氣配だつた。

けれど明るい陽ざしの恵みを享けるには、彈左衛門の心があまりに暗く荒んでゐた。

彼は自分を顧みて、邪な心を發見さうとはしなかつた。歪んだ性格で四邊を見廻して、自分を陥入れた敵を探出さうとするのだつた。だから、彼は烈しい心の足掻きに疲れて、双頬の肉が落ち眼に青黒い隈が出来て、重い病氣の人のやうな、暗い影を負ふてゐた。

(よしッ、今夜、この土地を棄て、逃げるのには、瀧口紋次郎をそのまゝには置かぬぞ。訪ねて行つて、誘出して、一太刀浴せて置土産にしてやるのだ！)

庭を歩いてゐた彈左衛門が、バサツと鳴つた音に胸ツとなつて見ると、足もとに、血で染めたやうな紅い椿の花が落ちてゐた。

(うゝむッ、城内から、上意討ちの一隊が押寄せてくるやうな氣がする。仲間友平を殺したこと他に、三年前は、妻の織香に情夫が出来たと疑つて、なぶり殺したこと迄が、重役の耳へ入つたかも知れぬ！)

落ちた椿の花の紅い色を、血糊と眺めて身慄ひした彈左衛門が、吃となつて青靨めた顔を上げた。

(あッ、誰だ、玄關に障がする！)

彈左衛門が眞ッ暗いものに包まれた氣持、全身を耳にして突立つてゐると、小者の時助が廊下を駈けてきた。

「申上げます。城内より、使者として瀧口紋次郎様、横川主馬様がお見えでござります！」

「な、なに、瀧口がきた!?」

彈左衛門の青醒めた顔が、颯と黒ずんで眼が白く光つた。

「何事が、お歡びをお傳へに参つた、と瀧口様が申されてござります。」

小者の時助が主人の愕きを氣毒げに見て、優しく微笑んでさういふと、彈左衛門が底光る眼を、探るやうに時助へ向けた。

（あッ、此奴迄が、拙者を欺さう考へだな。瀧口、横川が何で歡びを傳へにくるものか。ことに横川主馬は据物斬りの名人で、凄腕の男ではないか。上意を受けて参つた以上、討損じてはならぬと考へて、拙者に油斷させやうといふのであらう!!）

彈左衛門の歪んだ心が、時助の言葉をそのまゝ素直に受ける筈がなかつた。

「時助、廣間へ御兩所を案内する前に、かう申して置け。主人は衣服を改めますので、暫時、お待ち下さりませ、とな。」

時助が廊下を玄關へ引返すのを見送つて、彈左衛門脱兎の迅速さで庭を横切つて、廣間へ飛込んで長押に懸つてゐる槍へ、腕を伸ばした。

（据物斬りの名人でも、油斷を突けば、突けるに相違ない。うむッ、こいッ!!）

彈左衛門がびたり撲へ背を付けて、槍を抜いて待つてゐると、瀧口紋次郎の聲が聞えてきた。

「ハ、ハ、笹尾が驚くであらうよ。」

彈左衛門が憎惡に歪んだ顔の眼を、廣間の入口へ向けて、息を呑んだ。

（?、?、驚くものかッ。）

足音が近付いてきて、撲へ觸れる衣摺れの音、彈左衛門の双頬の肉が烈しく痙攣つた。

「殿から、お赦しの御沙汰が出たで参つたのだ、と奥へ行つてさう申せ、衣服はそのまゝで構はぬで、早く會ひたいとな。」

瀧口紋次郎がさういつて、廣間へ片足踏入れた時、

「エイッ!!」

氣合もろ共、瀧口紋次郎の横腹へ、槍の穂先が鋭く飛んだ。

「あッ!!」

紋次郎が叫んで、ヨロ／＼と踰越いた時、

「笹尾彈左衛門、狂氣いたしたな!!」

横川主馬の聲が邸いづばいに轟いて、笹尾彈左衛門が肩口から、血飛沫を揚げて槍を落した。（完）

信仰相談

(解答) 中村 辨 康

邪教淫祠の流行

(問) 私の悩みをお解き下さいませ。本日

(昭和十年十二月十五日)の大阪朝日の社説に、心をくさして居る者であります。

『邪教淫祠の流行』の本题の下に、「……非現実的な虚無乃至空想の世界に逃避し陶醉して、かりそめの安立を求めんとする結果ではなからうか。現代の異教邪教の信者は愚夫愚婦のみに限らず、廣く高等教育を受けたインテリ階級にも及び、國家の最高政策にまでも表現されつゝあるのを見ては、かくも疑はるゝのである——

冷厳にして透徹したる科學の光線が、自然と人間のあらゆる秘奥を貫いて餘す所なからんとする今日に於て、實に不可思議の現象である」と文部省の宗教法案に攻撃の矢を向け、淨土教の信仰をおびやかしてゐる様にも考へられます。何う考へたらよいでせうか。(滋賀・垂井住人)

(答) 社會現象は少しも静止する所がなく常に進展して居るものですが、科學では其或る部分を抽出して暫く停止の状態として、それを解剖したり分析したり或は演繹したり綜合したりして研究して行くものですから、科學は決して絶對的な合理性をもつものではありません。例へば昔しは原子説が信ぜられて

原子は固定したものの、それ以上には分析せられないものと云つて居たのに、先頃電子説が出て來て、一切の物質は電子の綜合振動の結果だと云ふことになつて、スツカリ原子説が消し飛んで仕舞ひましたので御判りの筈です。だから科學もまだまだ研究されて、もつともつと變化して行く筈ですから、今日の科學が自然現象及び人間現象のあらゆる秘奥を貫いて餘す所がないなんて云ふのは、餘りにも言ひ過ぎでありまして、寧ろ越權な言葉です。科學理論と云ふものは唯だ便宜上の假定を少し實驗的に組立てた丈のもので、まだまだ不完全な

ものと云はれて居ります。誰が今日の科學を完全なものと云ひ切れるでせうか。若し完成して居ると云ふなら飛んでもない話でせう。研究の餘地はないことにもなります。然しからした科學萬能の思想が私達の唯物思想を養つて、今日の行詰りを來して皆んなを困まらせて居るのでもありますから、寧ろ厄介なことです。

御話しの淫祠邪教の流行も一面から見れば此科學萬能思想の反動に過ぎません。近頃の類似宗教一切を唯心的に取扱ひ、精神力で物質までをも變化させると云ふのですから恐ろしい事を大膽に云つたものです。また高等教育を受けたインテリ層にも迷信邪教が信じられて行くことなど、やつぱり科學萬能思想の破綻を示すもので、ちつとも不思議ではありません。私達には過去未開人時代からの色々な思想が遺傳されて居りますから何かの機縁に會ひますと科學萬能の矛盾に對する反動として夫れが表面に擡頭して來る可能性が多い筈です。高等教育を受けたと云つても、夫れ夫れ専門の學問を三年なり五年なりやつたので、其専門の學問には明るくなつて居ても、宗教に對しては全然

教養されて居りませんから、高等教育を受けたものの凡てが宗教を理解し得ると、決めてかゝるのが抑もの間違ひです。軍人とか理學者とか云ふ人々に單純な眞正直な人が多いから、何かの機縁ですゝめられると邪教も淫祠も判らずに入つて仕舞ふことにもなり勝なのも、科學の教育の缺陷が、此處に暴露されて居るのです。

御存知のやうに佛教は「物心不二」を主張するもので、唯物論も唯心論も盾の半面に過ぎないと見て居ります。即ち現實生活の上に於ける積極道を説くのが佛教で、決して虚無や空想をよいと云つて居りません。佛教で云ふ「無我」とか「空」とか云ふのは利己的な個人思想を破つて積極的な社會的活動をなさしめる爲でありまして、支那の道教などで説くものとは全然違つて居ります。ですから宗教を知らない人が科學萬能の頭で宗教を論じたところで、まるで矢をつがへて居ない弓をひいて居るやうなもので、弦音ばかりです。邪教淫祠の流行も恐ろしい事ですが、其の依つて來れる根本の科學萬能思想も亦た恐るべき片端な思想だと思ひます。

自力と他力

(問) 法然上人法語中第十六章他力念佛の處にて質問致します。前號の名號の意味の中にも念佛は預金でもする様なものではない、と云つてありますし、法語中にも自力念佛を千遍萬遍百日千日晝夜はげみ勤むとも一文錢の値もない、三心の籠りたる他力の念佛なれば安樂に往生疑ひなしとあります。然し自力他力の念佛のへだたりは何處にて別つのですか、他力の念佛は時處所縁をきらわずに願力があるのに、自力であれば前項の如く萬億遍晝夜勤むとも効なしと云ひますと、一體念佛は如何申せば宜敷きか。(朝鮮大田府蟹江生)

(答) 自力他力の相異點は御法語に「自力といふは我力を願みて往生を求むるなり。他力といふは唯佛の力を頼み奉るなり」とハツキリ區別してありますから、一應は判る筈ですが、自分の心を吟味する時、サテ自分の念佛が自力の氣持で唱へて居るのか他力を頼み切つて居るのか、ちよつと判定がつかないことは、求道の道程に於て誰でも一度は経験すること、御質問も御無理のない事と存じます。と云

ふのは私達には自分を辯護しようとする氣持がある爲に、本當の反省本當の吟味が出來ないからです。眞面目に考へて見て「自力のやうでもあり他力を頼んで居るやうでもある」と云ふのが懸値なしの處でせう。それは實際に兩方の氣持が働くからです。或時は自力的な氣持で念佛し、或時は如來様にすがる氣持も働く、さあ何つちなのか自分乍ら判斷がつかない。また理窟で考へて「我力で願まなくては念佛も申されな」として見れば自力のやうでもあり其願む念佛の一つ一つが「如來様に南無して居る」のだが、他力のやうでもあり、隨て「半自力、半他力」などと、勝手な辯護論も出て來ますが、是はまだ本當に自力を頼む心が抜け切つて居ないからで、法然上人は決して「半自力、半自力」などと、云つては居られません。仰せの通り法然上人は三心が具足して居るか何うかで判定せられて居ります。三心具足の念佛とは眞面目な本心(至誠心)から、淨土への往生を願ふ心(回向發願心)で如來様に南無阿彌陀佛して行く事です。その如來様に南無阿彌陀佛することは、自分では何うにもしようがない(信機)から念佛するより外に方法がない。念佛

すれば救はれると信じて(信法)如來様の本願力にすがつて行く氣持(深心)を聲に表はして「南無阿彌陀佛」と唱へる、それが他力の念佛なのです。自分の申す念佛の力で助かるのでなく、如來様にすがりより外に救はれる道がないと信じ切つて「南無阿彌陀佛」と、すがる氣持を聲で表明して行く事であります。かう云ふと或は云ふかも知れませんが「すがる氣持さへあつたら何も聲に出さなくともよいではないか」と。然しそれは理窟に過ぎません。可笑しくて「アハハ」と聲に出さなくともよい。寒いのは誰でも同じだから「寒い寒い」と言はなくともよい。悲しければ悲しいと心で思つて居ればよいので何も涙など出さなくともよいではないかと云ふのと同じで、理窟は理窟でも人間の感情と云ふものはソウ簡單には片付きませぬ。私達の信仰感情が「南無阿彌陀佛」と云はねばならぬやうになつて来るのですからね。私の力で申すと云ふのではなく、如來様にすがらざるを得ない氣持で申すのが他力の念佛であり、三心具足の念佛なのであります。「如來様が私をして唱へしめる」と云ふ風に考へてる人もありますが、夫も一つの考へ方で決して

悪いとは申しません。一切を如來の増上縁力と見ればさうと言へます。ですが其處まで追ひつめなくとも「如來様にすがらざるを得ない」「念佛を唱へずには居れない」それで充分な他力念佛ですよ。但し小店員が直に重役にはなれないやうに、一度求道心を起したら直ぐ徹底した信仰を得ると云ふ譯には行きません。稀にはさう云ふ人もあるでせうが、一般的にさうは行きませんから、始めは自力でも何でもかまひません。抛まず念佛し抛まず反省して行けば屹度御自得なさる時が來ます。無論疑問を尋ねたり御話を聴いたり本を讀んだりする事も大切ですが、その方丈になつて念佛を忘れたら何にもなりません。信仰は「冷暖自知」即ち自分で體驗する事が大切ですから。

生靈や死靈はあるか？

(問) 私の祖父が先頃亡くなりました處、その老友が今如何なりおるや觀てやらうとて何やら三昧に入り、祖父と同じ聲にて「わしは此土地に來りて一遍も鎮守へ參らず残念でたまらず、未だに迷うて居る、誰か代りに參詣してくれよ」との事で、早速父が參つてわびて來

たことを、また三昧境に伺ひしに「あゝ、それでわしも安心した」と言ひました。

私はこの不可思議な事件が解らぬために、他の人に訊ねますと、色々の話に會ひましてもいよく思考し得ぬ世界のことかどうして信じ難く、何んだか少しも解りませぬ。これは同じやうなことです。ある誦文をなしてゐるうちに行者が突然「アツイ」と叫びました、「あなたの家に子供を親の胎内に入れたまは母親諸共火葬に附したことはないか」と問はれました。早速家内縁者に訊ねますとさう云ふのがありまして、母親の死亡せるためにかう云ふことがあつたと聞きました。かうも現世以外に靈的交渉があるものだらうかと之を聞いて驚きました。そしてさう云ふ恨みが、關係もない遠い縁者に禍ひをなして惱ませるものでせうか。私共は毎日先祖代々菩提のため名號を唱へさせて貰つてゐます。これがどう先方に響くものでせうか。行者でない私にはわかりませぬ。これを正し佛教の上から判定を下し、追善菩提の哲理を教へて下さい。(東京品川 玉石生)

(答は第六四頁にあります。)



沙丸

法然上人の女性觀

佐藤春夫

女性觀と申し

ますと、何やら大へん難しいやうでございます

が、さう澤山に種類もございません。大ざつばに分けて見ますと、男尊女卑、つまり男子の方が女子よりも優れてゐるといふ考へ方とそれの逆。それにもう一つ男子も女子も同じ人間である以上は區別すべきものでないとか、大別して先づこの三つに片づくかと存じます。これらは、みなその時代の社會情勢の支配を受けてそれぞれの傾向に落ちつくわけで、また思想家個人の時

代を見る角度もそれぞれに變つて参ります。それ故三つの考へ方それぞれに相當の理窟があつて甚だ自然に尤もに出来てゐるもののやうで一口にその何れを是とも非とも申しにくいわけ合ひのものです。

由來、東洋は所謂五障三従とやら、男尊女卑の傾向が多いやうに思はれます。

それで法然上人の女性觀を考へるに先立つて、私の無學では力及びさうにもありませんけれども、廣く佛教の女性觀といふものを考へるのが當然の順序であらうかと存じます。それで男女どころか人間も禽獸も一切平等の佛教精神によりますと、女性必

ずしも男子より劣つたやうに決めてしまふ道理はありませんし、事實法華經の御說法の中には、八歳の龍女が即身成佛を遂げてゐるやうな實例もございますし、又御承知の通り觀經の御說法の場合には特に韋提希夫人をお相手にお説き遊ばされたのみか三百の侍女が同じく成佛をして居られるのでございますから、お釋迦さまの目にはただ一つ佛性の有無だけが問題でその他の點毫も男子と變つた者として女子を遇されなかつた例は決して乏しくないのであります。つまり今申上げました一面では佛性があるといふ資格をもつたものは皆男子であると

いふ見方平等の意見を發表してありますけれども別的一面では女性といふものは男子よりも一段と智力も意力も薄弱で劣つたものであるといふ風な考へ方もあるやうでございます。それで何かといふと「外面は菩薩の如く、内面は夜叉の如し」といふやうなこともいつて、婦人を輕んじてゐる傾向も確かに見えて居ります。しかしお釋迦さまが婦人を輕んじてゐるのではない。私の考へ方ではやはり一つの方便であらうかと存じます。で、婦人の誘惑され易い一事がお釋迦さまの頭にあるからして、恰度、父母が小供に對して五月蠅ほどのろんなことを言つて聞かせる如く生理的に社會的に、とかく不利の立場にあると思ふからして、これを勵まし注意するための方便として、大慈大悲のお心から女人は男子より劣つたものであるかの如く説いてその自覺を促してゐるものであらうと存じます。何れにしても、兎に角、大惡魔王の如く婦人を見る見

方は確かに佛教の一面にあるやうでございます。一見矛盾のやうであるが、一つは平等の側から、一つは差別の側から、つまり、理想としてと、現實の立場からとの相違で假りにかう違つて來てゐるものでせう。

それで法然上人當時の佛教界は、今申した佛教の見地の、二つの女性觀のどちらが多く現はれて居りましたらうか。平等の面を見ないで、差別の面に立脚して、女性を男子よりも輕んずる傾向があつたのではないかと思はれます。聖道門の指南道場とも見るべき高野や、叡山では堅く女人を禁制してゐるところを見ると女人といふものは、所謂三從五障の汚れのあるものだといふ風に見て男子同様に扱つてゐなかつたのは靈域への女人禁制の一事でも確實だと思はれます。

それならば當時の社會情勢は如何やうなものでありましたらうか。その當時の時代相——信仰や、貧富、貴賤、或は男女兩性の

對立の相、即ち一般の生活を現はした文學によつてこれを窺ひませう。この時代を描いた文學で平家物語ほど勝れた文學はないのでございしますが——試みに平家物語に現はれた女性で千手の前にしろ、佛御前であるとか、小督局であるとか、その外平家の大將方の北の方達でも、直ぐは私共の頭に名前も出て來ないほど澤山の婦人が描かれて居りますが、氣の毒な人たちばかりです。無理ありません。みんな權力に對する憧れを、武力の争闘によつて解決しようと思ひ返つてゐるやうな、あの時代の事ですから、力といふものに乏しい婦人として、恰度押合壓合ひの群集の中で、女子供が悲鳴を擧げてゐると同じわけです。例へてみれば猛獸どもの格闘してゐる野原の花とでもいふべき有様で、どころんでも婦人にとつてはまことに氣の毒千萬な世の有様であつたと感じさせられます。源平時代——法然上人の時代は言はば男蕙能の世界でし

た。

この時代の直ぐ前の平安朝時代はどうであつたか。その時代の女權はどうであつたかと申しますと、これはまた源平時代とは打つて變つて女第一の世界でした。

しますと時代は唯美主義の時代とでも申しますか、風流な貴人が時代を支配してゐただけに、美しいものが非常に尊重された時代でございました。この時代の文學を一目のぞいてもすぐわかります。源氏物語のなかの女性と平家物語の女性とをごく大ざつぱに考へくらべて見てもです、いや男でも女のやうに美しくなければならぬ時代だつたのでせう。力といふ點では女は到底男の相手ではないが、優美といふ段になると、どうしてこれは力とは全く逆で、殆んど婦人の專有の強味のやうにさへ思はれるではありませんか。こんな時代ですから婦人の社會的地位は相當高いもので、さればこそ文學者等にも紫式部、清少納言は

じめその他澤山のすぐれた婦人が出て居るではございませんか。

この婦人に有利な社會状態がぼつ／＼動搖しはじめて、その次に現れたのは、一切合切力づくでやらうぢやないかといふ、武家の勃興時代でありますから、もう優美も何もない。この時代になると喧嘩腕づくではとても婦人は男子の敵でないので、婦人の社會的地位が大變不幸な状態に立ち至つて居ります。きのふの仕合せ者が、不意にこんな時代に出くわしたのですから、その不幸は一しほ大きいわけです。當時の佛教界がこの現象を無視して婦人を冷遇してゐる傾きのあつたのは、一寸考へた丈でも甚だ不合理で物足りなく考へられるのであります。

ここに泫然上人が居らせられて人間の生活と時代の有様とをつくづく見て取つて居られたのに、この人間の社會の重要な半數を占めてゐるところの婦人の不幸な生活に

お氣のつかぬ筈はございません。果して上人はさすがにこの事實を見て居られた。見た以上は、見て見ぬふりをなさう筈もない。殊に上人が最も歸依して居られた、阿彌陀さまの本願第三十五願では、女子も希望に依つては、西方の淨土で男子となつて生れ代ることが出来るやうにしたいものだといふ願を立てて居られるから、これを、「如來本願は特に女人に深しと見へたり」と御解釋を遊ばして、つまり當時のすべての宗旨では、一般社會と同様に婦人を輕んじ冷遇してゐた時代に、上人は平等の一面から見て、婦人は男子同様であるといふばかりか、更に一步進めて社會情勢に鑑み、婦人はまことに氣の毒だといふので、この氣兼ね婦人に特典を與へて考へなければならぬといふことに氣付いて居られたのであります。これが上人の智慧であり、慈悲であります。

時代を見、人生を見ることの深さ——人

生に對する理解の透徹、人生に對する同情の充溢を最もよく示す一つの好い例證かと存じます。時代の大勢に抗してゐるだけになほさら有難い、有意義であると考へるのであります。さればこそ、上人の歸依者の中には、名もなき市井の婦人は數へ切れなから別として、當時第一流の貴婦人と思はれるべき方で、上人に歸依した婦人の名が勅修御傳によつて一寸考へても、十指に餘る程あるやうに覺えて居ります。

それから御承知の『一枚起請文』を見ますと、『尼入道の無知の輩に同じうして：』といふ言葉がございまして、尼入道の如くといつて、男の無知といふ事を言はず、女の無知といふことを言つて、一寸考へると母性を輕んじてゐるかの如く見えるのでございすけれども、たとひ並々ならぬ學問のある人でも、無學の女上の如くと女性と無學とを手本とせよと仰せられてゐるのですから、この場合の無學な女性に決して侮

蔑の意味を含んでをりません。侮蔑されたのは却つて學者と男子とではありませんか。上人の宗教をもつとも簡單に端的に傳へた『起請文』の中に、ほんの一寸した形容の一句ではございすけれども、その一句が一見女性を卑しむが如くにして、その實は決して然にあらす。言はば差別によつて女性を觀る見方、平等に依つて觀る見方の佛教の女性觀が完全に兩面を含んでゐる許りか、社會的情勢から婦人を、またその無知を特に學識ある男子以上に勞つて扱つてゐるのはまことに希有に感ぜられます。非常に簡單でございすけれども、これに依つて上人がその他の一面に於けると同時に、その女性觀に於きまして、時代から一步進んだ進歩的な立場に於て、眞實を見て居られたといふことだけは、充分にお解りになつて頂けたかと存じます。が然し、それではあまり簡單でございすから、蛇足でございすけれども、僭越ながら私自

身の考を些か申述べてさせて頂いて結論のていさいをつけませう。男の身びいきか、若い方は別問題として年とつた方の場合、私は男子の年とつた、つまりお爺さんの方がなんとなく婦人のお年寄——お婆さんより好きです。どこかに人生を永く生きて來て、世のなかもわかつたといふ感じがあつて、どの階級のどういふ種類のお爺さんにも、それ／＼尊敬し、親愛を感ずることが出來ますけれども——お差障りがあるかも知れませんが大變お申わけもございせんが——婦人が年とつた場合にははつきり申しまが——あまりはつきり言ふとなんですが、お婆さんは男子の方に較べて好感が持ちにくい。佛性の爺さんとは申しますが、佛性の婆さんといふのはあまり聞かない。鬼婆といふのはよく申しますが、鬼爺といふのはどうもききませんね。若い婦人方や若い奥様方でも、やがて間違なく、今にお婆さんになるとい

ふお考へが必要でありませう。果してその御用意がおりかどうか、少々疑はしいのでございます。それについて私も一つ考へて見まするに、多くの男子は年をとつても、さう不愉快にならないのに、婦人が年をとつて不愉快になるのは、一たいどういふ譯でございませか。もしや今日社會の組立が婦人にとつて、不利益のやうに出来てゐるためではありますまいか。一般に婦人が男子以上に苦しいところを我慢したり、無理をして通つて來られたから、その無理と我慢とのなみなみたらぬ、男子以上の苦勞のおかげでさう云ふ風に歪んで終ふのであつて、男子は年をとつても立派だといふのは、かういふ見方によりまして、必ずしも男子の名譽でないかも知れません。萬事我儘を通して來たおかげで、いいお爺さんぶりが出来るといふのであつて見るとわれ／＼一般男子もこの點は大いに反省しなければならぬものがあるやうに考へられます。(完)



山と遭難

夏も冬も山と遭難事件とは附きものである。これは近年に到つて生じて來た新しい社會現象である。そして山の遭難事件に對する批判は何時も青年の無鐵砲さに向けら

れる。事實遭難の殆んど全部は準備の不足に起因しており、青年特有の戰闘的氣分は準備不足と云ふ最大の缺陷を看過して仕舞ふ。そしてこの不幸を招く。

然しこの頻發する遭難事件のために、登山そのものをも否定して仕舞ふやうな一部の傾向はまた餘り感心したものではない。あの青年諸君の戰闘的な氣分に充分な準備をさへ與へれば輝かしい男性的なスポーツとなり、また青年のみがなし得る學術上の貢獻をもなし遂げ得るのである。例へば、最近の早大山岳部の鹿島槍登攀の輝かしい成果や、京大生の興安嶺突破等、いづれも青年のみが果し得る事業である。自然と抱き合ひながら、戦ひながらする、この男性的なスポーツは、日本の將來を背負つて立つ青年諸君のためには好固の心身鍛鍊法であらう。

たゞ、經驗と準備の科學的な研究を缺かさぬ時に於てのみ。

土 淨

短歌

與謝野晶子選

○ 滋賀 本間 秀道

悲しみの涙にぬれてうるはしく
光輝く金剛の信

○ 前橋 市橋 義一

弟の職定まりし喜びを先づ告
げまつる父の靈屋に

○ 岩手 藤原貞次郎

野の仕事今は終りて炬燵にてあ
られ降るをばなつかしくきく

○ 京都 香住 紫精

鐘の消え華頂の山は暮れはてて
御堂に聞ゆ讀經の聲

○ 滋賀 近江小夜子

わが友のさして歸りし水仙の白
きが持つも清き情か

○ 静岡 一向山人

春寒く雨さへ降れる晝過ぎに御
忌の鐘を我れは撞くかな

○ 廣島 上原よしと

それ思ひこれを思ひてやる瀬な
く夜半の小床に申す念佛

○ 新潟 植木須賀子

身にすぎし望はすてゝ大いなる
御名をとなへてつゝしみゆかん

○

弱き者よ我名を強くとなへよと
宣ひ給ふ聲聞え初めける

○ 山口 竹原美代子

さら／＼と庭の落葉の走りつゝ
月清けれど寒き夜半かな

○ 岩手 藤原貞次郎

老いも兒もゐろりかこみて語り
合ふまとひうれしき山里の冬

○ 東京 安良 岡昇

ほの／＼と今宵妖しき御神火は

島いたゞきに悲しくも燃ゆ

○ 大分 龜井 強

きざはしを獨り靜かに上る間も
かたへの銀杏葉の散り止まず

○

山門をくぐりて入れば本堂の大
戸は晝も閉されてあり

海上雲遠

北海道 貞 山

沖を吹く風のしわざか白雲はと
ほ山のごと海にうかべり

○

遠退けば薄くなる世のことわり
をうみの上を飛ぶ雲に見るかな

○ 山口 邦 子

朝日さす海原遠く君が代の光り
と見えて雲のたなびく

○ 山口 花 子

いくさ艦君が代いはふ旗風に汐

路のはての雲なびく朝

○ 山口 あ や 子

しづかなる波路の末も大君のみ
いつになびく雲のかがやく

○ 山口 伊 代

うら／＼と青海原の空遠くたな
びく雲に朝日さしそふ

讀者投稿募集

◆和歌、俳句の外に、あなたの信仰體驗
談又は邪教を迷信したことによる悲喜劇
その他、何に限らず宗教に關する市井の
事實について、見たり聞いたりされたこ
とをごく簡單で結構ですから、どし／＼
御寄稿下さい。

◆又信仰上のことについて、お解りにな
らないことや、人知れず苦しんで居られ
るやうなことがありましたら遠慮なく御
相談下さい。喜んで御相談に應じます。
但し、不慮面目なものは、一切採用致し
ませぬ。

◆締切は毎月末日となつてゐます。
◆住所氏名等は、はつきり楷書でお書き
下さい。數が多いため、時にとんだ間違
を起すことがありますから……誌上の
匿名は御自由ですが、御投稿には必ず本
名をお書き下さい。

◆宛名は東京市芝公園明照會館内
法然上人續仰會『淨土』編輯部
宛に願ひます。

映 畫 物 語

映 畫 物 語

まちの笑くぼ



運轉手大村健

は、そろ／＼仕事仕舞ひにしやうと思ひながら車を走らせてみると、花籠を抱えた洋装の娘がいきなり闇の中から飛出した。

「ねえ、縁町まで甘銭でやつてくれない。」これちや商賣にならないと思つたが、餘りに可憐な娘の様子に遂々それで乗せてやることにした。

約束の縁町まで来て「ミドリアパート」の看板の出でゐる家の前で車をとめると、娘は窓から吊されてゐる二枚のハンカチを見て、急に思ひ出したやうに云つた。

「困つたわ、私今晚アパートへは歸れないの。今日下宿代を拂はないと泊めて呉れないと云はれたの、あんたんちのガレーヂで良いから一晩だけ泊めてくれない？」

「二十銭で車に乗つけて、おまけに泊めたりしちかなはねえな」

い。

「仕様がねえや、乗りなよ」

その晩、大村は花賣娘を自分のベツトに寝かせ、自分は戸棚にもぐり込んで眠つた。

すが／＼しい朝が來た。娘は食事の手傳ひなどしながら、樂しそうな様子だつた。部屋に飾つてある飛行機の模型を見ながら大村に訊ねた。

「あんた飛行機好きなの」

「うゝん、乃公は飛行機乗りから運ちゃんになつたんだよ」

「あゝら、おかしいわね」

「うん、飛んでもない事で墜落しなちつてから、もう青空は飛べなくなつたのさ」

そう云つて大村は自分を捨て、他に走つた或る女のことを思ひ浮べてゐた。

大村は娘に鍵を預けて仕事に出かけた。その日は何故か心

東京發聲映畫

トーキー

重宗務監督、八田尚之原作、脚色

配役

運轉手

不良

妹

秀

お春

逢初

夢子

大村健

三井

市川

逢初

大日方

秀男

春代

夢子

「ミドリアパート」の看板の出でゐる家の前で車をとめると、娘は窓から吊されてゐる二枚のハンカチを見て、急に思ひ出したやうに云つた。



映 畫 物 語

嬉しく仕事も早目に切り上げて土産を持つてアパートに歸つて来ると、彼の期待はすつかり裏切られて、娘の姿はもうそこには見られなかつた。そして机の引出に入れて置いた墓口と同居人の萬歳デカ八から預つた時計も消えてなくなつてゐた。

大村はすつかり憂鬱になつた。

可憐な花賣娘が追ひ出されたと云ふミドリ・アパートの三階の一室、そこに若い男が二人

それにベツト腹這ひになつて林檎を嚙つて居るのは昨晚の花賣娘だつた。男の一人は彼女の兄の秀、一人は仲間の千公、皆んな札つきの不良だ。花賣娘のお春はこともなげにこんなことを言つてゐる。

「……だつて昨晚歸つて来て見たら、入るなつて合圖のハンケチでせう。だもんで、私困つちやつて、甘い運ちゃんにもたれ

込んで、まんまとベツトに寝て来て、おまけにお土産つきよ」そしてベツトの下から大村の



大村はどうしてもあの花賣娘のことが忘れられなかつた

そして憂鬱は日に増しつゝ行つた。或る日思ひ切つて例の「ミドリ・アパート」を訪れたが、

「あゝ、お春ちゃんですか、あの女、出鱈目な不良ですよ、宿なし犬見たいな奴で、此處へも泊めて呉れつて來ましたが斷つたらその後見えませんよ。」と云ふ秀の言葉に空しく歸つて來た。

數日後、笑へない萬歳ですつかり人氣を落した同居人の萬歳デカ八の應援に長屋全員で寄席に總見と出かけた時、不圖大村はお春に逢つた。

彼はお春をうながして自分のアパートに連れて來た。

「……ね、一晩でも面倒を見て貰つたら「有難う」と云ふものだ。猫だつて一日可愛がつてやれば次の日啼き聲が變つて來るんだ。畜生より情けない奴だと腹がたつたが、しみじみと考へてゐる中に急に君が痛々しくなつて來たんだ。親切にして呉れる人のものまで盗まなければやつて行けない程惨めな生活はないからな。……温く育つた人間ならそんな悲しいことはしないからね、そうだらう。」この大村の言葉はお春を感動させたばかりでなく、氣付つてナイフを忍ばせ跡を追つて來、かくれて之を聞いてゐた兄の秀の涙をもさそつた。

この一人の純情がその後の凡ゆる波瀾を貫き通して、二人の人間を救ひ得たのであつた。

味覺の玩具箱



— 漫 談 —

正岡 容

ぼくのうちには、猫が二匹、雌犬が一匹あるのだがそのいづれもが、じつに贅澤な食道樂だ。

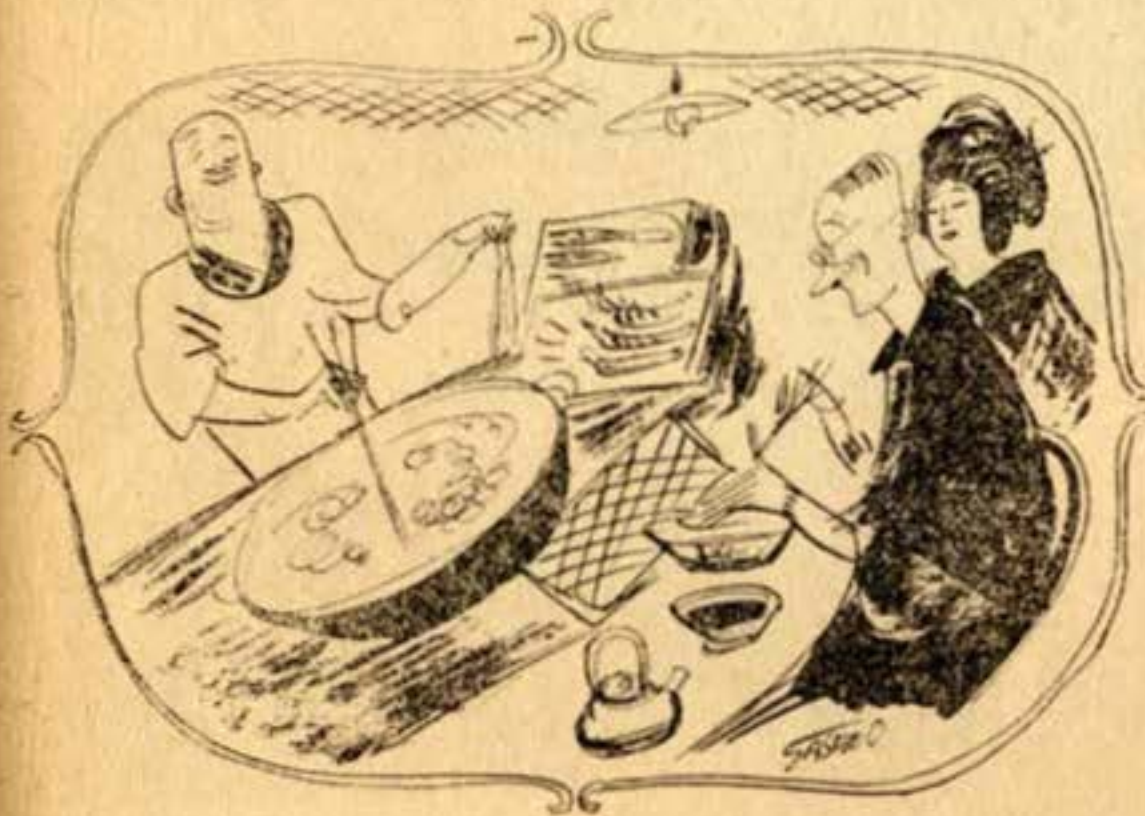
——猫は、ほんものの、鯉節の味を占めると、割り鯉と云ふレディメイドなんぞ振向いても見なくな

るし、日ごろ安物のビスケットを愛用してゐたワシ公に、何かのはづみで、ジャーマンペーカリー邊りの生菜子など呉れてやると、もう翌る日からお安いビスケットなんぞ七里けつばいてな顔をする。

往昔、谷崎潤一郎の未定稿長編小説のモデルとされたペルシャ猫に至つては、地玉子だとべろりと嘗めて、上海玉子だと全然、相手にもしなかつたと云ふからコワイみたいのものである。

ぼくなんぞ、食味の冊子を編輯したりしてゐるけれど、これら、犬猫諸君の味覺に比べると、及ばざること數等と、ほと／＼痛感せざるを得ない。

蓋し、彼らはその人生いや犬生猫生に於てたべることを以外に凡そ精進することなんてないのだから、「舌」の方もソート洗練されてくるワケだ。



さて、さうなると、滿天下の尊敬に値する食通諸先生なんて云ふものも、どうやらワシ公やニヤ嬢に慥々相摩してゐるつてことにも成つて來さうだから、まことにどうかと思ふ次第である。

×

かまへ。

「おい、親爺——この海老は場違ひだな」

と痛烈に眞向から一本きめつけた。

「わかりますか。先生」

「わからんで、どうする。こんな場違ひものを賣るやうちや、お前の店の名題天ぶらも心細いぞ」

「いや、何とも、申譯がございません。——それでは只今、本場の方を差上げます」

——事實、その海老は、正身正銘の場違ひだったので、閉口頓首した天ぶらやの親爺さん、そこで早速、別のを一つ揚げ、長いきい箸でつまんで先生の前に提供すると、そいつをムシヤムシヤ貪り喰つたかの先生。

「いや、今度は美味しい。是こそ、海老の醍醐味だ」

と。大いに隨喜湯仰したさう

だが、豈圖らんや。

その海老は、前のも、あとのも、おなじ場違ひだつたてんだから笑はせる。

喰はせる奴も喰はせる奴だが激賞した奴も奴だ。だがこんな場合、前記の大猫諸君だつたら、いかに天ぶら屋の親爺さんが、好言令色数千句を以てしても、容易に場違ひ海老なんぞに、

「こいつはオツです」

とは云はなかつたらう。

×
冷豆腐がお皿に一つ。そして。

そのワキにちよつびり雲丹がそへられてあつたので、得たりかしこしと、この豆腐へ雲丹を沫してたべてしまつたら、あとで、その通人、料理番からありつたけ輕蔑された。

豆腐はさう云ふ場合、決してたべるものではなく、雲丹をはさん

だ箸の汚れを拭ふためではあつたのださうだ。

——これも食通の失敗である。

×

また、大阪にゐた頃は、ある食堂でカツだ、テキだ、コキールだ、とてんでに註文かまびすしき折も折、わかき紳士の、これは又、極めてシックに、トーストと果實と紅茶とのみあつらへた人があつ



たので、一種、彼氏に新鮮な風味をさへかんじさせられ、よそから敬意を表して眺めてゐたら、この紳士、先づ、フルーツをむしやむしや囓り、それから紅茶、つゞいてパン——。

順序正しく、盡くあべこべに喰べてしまつたのには。

「ウヘー」

とこつちが負けちまつた。

×

おしまひに一つ尾籠なお話をさせて貰はう。

よく、法螺許り吹く男、けふも、「さつき、帝國ホテルのグリルへいつてね。晩は演作の上方料理さ。それから、千四屋で海老のカレーもつきあつたよ」

と出任せの嘘八百を並べてゐたが、天網恢々疎にして漏らさず。その内、この男、俄に胸がわるいと云ひだし、洗面器一ぱいに戻

したのがうどん許り。

これでは嘘も胃のわるい時には吐けないものだ、と、笑ひあつたとがある。

【小野佐世男畫】

骨折損

セールスマンが、長々と電気自動掃除器の効能をならべたが、その家の老主婦はいつかな買ひそるな様子がない。

『では實地をおみせして、私の申してゐることの眞偽を御判断ねがひませう。』

氣の短い彼は上衣を脱ぐと、掃除器を備へつけ、ストーブの灰と煙突のすゝを床にばらまいた。

『さて、奥さん、この様なごみがこの掃除器で如何に手軽に片づけられるかお見とめ願ひ度いです。買ふ買はぬはそれからにして頂きませう。時に、電気のスウィッチはどこにありますか？』
『ところね、家のは電気ではなくて、瓦斯ばかりなの。』



榮華凋落光明

清 谷 閑 子

日本歴史で一番藝術的な時代はいつかと言へば、平安朝だ、と誰しも答へることを躊躇しないだらうが、わけでも平安も末期ほど、即ち源氏が擡頭して、平氏が榮華の生活から、まさに没落の過程を辿りつゝ、西海へと落ちてゆくあたり、描いても描いても、心につきない興味を感じる。

源平の合戦は、他の戦争實録とちがつて、女性を加はつてゐるから、人情の深さがあり、哀愁切々たるものがあるから面白いのでもあらうが、實はそれ以上に生きた力を興へる原因たるや、宗教が底をながれてゐるからである。即ち法然上人の吉水の教團、あれはおちゆく平氏の上に、宮中を中心の貴族と女性にどれほど大きな光明を與へてゐたかしのれないのである。だから檀の浦でも、他の戦争物語のやうに血なまぐさい凄惨な氣がしない、實に救ひの力である。宗教の力である。

歴史は唯物的にも唯心的にも二つに引放して見ることは許される。唯物的にこれはあの場合都中心の情弱な政治に

墮落し、地方武士は擡頭し、それらは源氏に加勢して、平家はこれを知らずに安逸をむさぼり、享樂痴態をつくしてゐるのである。然し平氏ばかりでなく政權を握つて久しくなれば、如何なる時代でも墮落してゆく。而もその墮落からは何にも生れはしないのである。榮え、衰へ、それつきりである。

然るに平安朝末期の文化は一大淨土教を發生し、唯物史上に美事な敗北を示しつゝ、精神文化の上には、我國民衆の宗教に基調をなすところの淨土教を建設したのである。これ即ち法然上人の出現であつて、上人と平家を中心とする貴族の思想とを引放して考へることは不可能である。それほど淨土教の興隆に力を添へたところのものは、これらの階級である。

平安朝の墮落は、いふまでもなく、政治が都中心であつたこと、平氏の惡逆無道との二つが主因であつた。だから民衆は、政治的にも精神的にも非常な苦痛を與へられてゐる。



たのである。

こゝに救ひが生れねばならぬ。まづこの腐敗した文化を否定するところが強調されねばならぬ。これ即ち浄土教の擡頭である。専修念佛を以て起上つた法然上人は、最早源信僧都の藝術的な、觀念の浄土では民衆の救ひにはならないことが徹見されたのである。

果せる哉、上人の救済は美事に的中した。而もそれは思ひもよらぬ貴族階級であつた。佛教に於ける一切衆生は無階級である。然しこの場合、法然上人は少し豫期が外れたであらう。投げた綱に引かゝつたものは、民衆でなくて、特權階級であつた。

なぜなら平家を中心とする貴族は、源氏の擡頭と没落の運命を豫測して、唯物文化をすて、偏に精神の救ひへと進出したからである。而も貴族は女性化してゐた。文化の軟弱な感化と女流の勢力侮るべからざるものがあつたからである。小松重盛のあの有名な燈籠供養、名流婦人の惜しげもなき落飾、宮中は浄土教への歸依によつて、上を下へと一大轉換が演ぜられた。

茲に虐げられた階級と、虐げつゝある、階級とを假定したとせよ、虐げられた階級には救ひを要する。正しい宗教はいつもこゝに目的を有つてくる。法然上人の浄土教建設

の目的は正にこれであつた。

然るに虐げつゝある階級がまづ、その眞理の前にぬかづいたといふに至つては、ものは皮肉なものである。

しかしこの上層階級の支持が、最初に行はれたことが、法然上人の運動をしていかに、圓滑に有効づけたか計りしれない。この意味に於て没落平家が支持したことは、非常な人氣をまきおこし、かつは救ひを如實に見せたことになる。

それは檀の浦の合戦の、あの平家側の信仰である。強も達は口に念佛をとなへつゝ、未來を信じ、宇宙の秘義に驚きを感じつゝ、莊嚴なる戦死を遂げ、入水を取てした。戦争に宗教が働いて、いかにその凄慘な被害を緩和するかは、實にこの實例を見ても判る。

而も生き残つた女性の生涯は、じつにこの檀の浦の悲劇からはじまるのである。建禮門院を取巻く平家殘黨の女性は、一人のこらず落飾して、洛北は大原に宗教生活の建設へと入つてゆくのである。

榮華はついに凋落し、凋落は救ひある光明へと辿つてゆく。唯物文化から、精神文化への向上である。こゝではじめて浄土教は日本全土の民衆にその光りを投げはじめた。即ち大原談義によつて、舊宗教は清算され、大原御幸によつて、女流の宗教的憧れを増大したのであつた。

信 仰 相 談

(解答) 中 村 辨 康

生靈や死靈はあるか

(第五一頁を御覽下さい)

(答) 先づ最初に精神統一をした三昧状態で不思議な事が判るかと思ふ問題ですが、人間の心や行爲はさう大して變るものでなく、皆な共通して居るものですから、チョットした片鱗を掴んだ丈で判る事がある譯で、或は直觀に依り或は推理に依り、ピッタリ當る事があります。私達の日常生活では常にかうした事が平氣で使用されても居ります。顔色を見たり眼付きを見たりして其人の氣持を想定し、其人の氣に合ふやうな言葉を使ふなども其一例です。佛教では十界互具と云つて大ざつばに分けると凡そ十種の範疇に入れることの出来る氣持を御互に持つて居ると申しますが、それでなくては言葉や文字や行爲を見て共鳴したり同情したり或は嫌忌したりする事は出来ませんでせう。人間の氣持や行爲は大概共

通して居るものです。だから八卦とかトひとかお籤とか云ふものが、かなり其人の氣持を云ひ當てる譯です。八卦は六十四卦を表として其各々に六個の變化をつけ、夫れ丈の數で幾百萬人にでも割り當てます。お籤ですと大概百番で一切の問題を處理します。こんな大ざつばな割當でさへ皆んな當ると云つて多額な見料をはづんで喜んで居るのです。それと同じやうに行者が精神統一して無心となつた時、見て貰ひに來た人の眼付や顔色や動作から受けた直觀に依つて變な事を口走つたのが、往々にして當ると云ふ事も不思議ではありません。當つた所で大した事もないではありませんか。それで何も其人が特別な靈力を持つて居ると云ふ譯でもありません。まして探索して見て漸く判つたなどと云ふ事になれば、餘程インチキ性を持つて居ます。過去數代續いて永い年月の間には何んな家だつて色々な事があつたに相違ありませんからです。そんな事が不思議なら

私達日常生活の不思議の方が餘程不思議と云はねばなりませんまい。食物を食べると、何故肉や血になるのか、空氣を吸はないとなぜ生きて居られないのか、こんな不思議があるのに此の方はちつとも不思議がらず、誰にでも共通して居る一少些事を言ひ當たのを不思議がるなどは畢竟私達が精神界の事情にうといからですが、それを利用して居る人に至つては寧ろ一種の罪惡行爲をして居るものと云はねばなりません。

次に縁者に死靈が禍ひをすると云ふ問題ですが、そんな馬鹿氣な事はありません。それは未開人の宗教で一種の迷信です。南洋の諸島及びオーストラリアの人々とか北米のアメリカインデヤンとか東方亞細亞のツングース人とか云ふ野蠻人の持つ信仰です。日本にだつてさう云ふ思想が古代から流れて居りました。死靈とか生靈とか云ふ信仰です。もし假に死者に靈力と云ふものを許すすれば、先祖以來澤山な死靈がある筈で皆な靈力を持つて居る筈です。だから若し甲と云ふ死靈が現在のある人を悩ませて居るとすれば、他の乙丙丁等の死靈は何をボンヤリして居るのか、チツとは其人

を可愛がつて呉れて居た人もあつたでせうが、其死霊は何故黙つて居るのか。甲の死霊だけに特別な靈力があつて乙丙丁等の死霊には何等の靈力もないのか。若し死に依て靈力が興へられるならば乙丙丁にも靈力がなければならぬ譯です。然るに甲死霊丈が禍ひして乙丙丁等の多數の死霊が黙つて居るならば、つまり共同の線を張つて居る譯で、其人は先祖代々にすつかり見離されて居ると見なければなりません。先祖代々から見離されるには見離される丈の理由がなければなりませんから其禍ひを受けて居る人は餘程の悪人と云ふ事になります。然し佛教はそんな暗い宗教ではありません。明るく生きて行くのが佛教の信仰生活です。すから生霊だの死霊だの、靈力と云ふものを認めません。一體私なら私の心や身體は何うして有り得たのでせうか。先祖代々の集積ではないでせうか。私の骨組み私の顔付、私の身體の恰好など父や祖父などの一部分を受け續いて居るのですし、私の性質性格嗜好なども皆な先祖から遺傳されて居り、それを私の日常生活に依て或は掩め或は助長して居るものであります。それと共に其よい部分

を保存し助長し、其悪い部分を除去し消滅させるやうにして子孫へ渡してやらねばならぬ責任をも持つて居ります。随つて悪い部分は私の責任とし、善い部分を先祖の御蔭と拜んで行くのが本當の責任者の態度でせう。つまり私のよくなる事は先祖への追善であり子孫への遺産でありますから、何處迄も私をよりよくして行かなくては先祖へ對して申譯がないばかりでなく子孫へも申譯がありません。また屹度私のよくなる事を先祖が喜んで呉れるだらうし子孫も喜んで呉れるであらうと私自身にも喜べる譯です。其處に何の死霊が禍ひしませうか。若しあつたら先祖代々の總がかゝりで其悪い死霊をやつつけて呉れるでせう。だから第三の御質問のことも、私達が先祖へ追善することは單に御經を上げたり法事をしたりする丈では徹底しない譯であります。今我國に於て先祖の祭をし法要を營むことは一には孝養の意を表する爲め、二には先祖へ現在の私の心持心懸けを報告する爲め、三には其氣持を先祖以來の親戚縁者へ披露して共に共に喜憂を分つ爲めであり、ですから單に形式丈とか世間への御體裁丈とかでなしに、

心から其記念すべき日に尙一段の覺悟を新たににして、先祖へ現在の境遇を感謝すると共に將來の發展を祈り、一層家業に精勵し以て一家の繁榮に努力せんことを誓ひまして、よりよきものを子孫へ遺さうと心掛けるのが、法要法事の意義であります。随つて毎朝毎晩佛壇で念佛唱名と共に其覺悟を新らたにする事も必要です。忌日に特に儀式を行つて一層菩提の増進を計る事も必要であります。即ち菩提と云ふ事は「覺」と云ふ事で「めざめる」ことです。だから先祖丈に「覺」をすゝめて自分の方を御留守にしては何にもなりません。自分の「覺」が直に先祖への「覺」です。御經を読み念佛をすると云ふ事も、自分の信仰を高め「めざめ」を増進せんが爲めで、呪文的な意味ではありません。これをよく御諒解願ひます。

◆投稿に關する御注意

御投稿は葉書又は封書でお送り下さい。但し封書でお送りになる時の質問用紙は、四百字詰原稿用紙、故に内に認めて下さい。たび／＼申すことですが、文字は楷書で、つきりと書き下さい。誌上の匿名署名は御自由ですが、投稿には必ず本名をお書き下さい。編輯部では秘密を厳守し、且つ誌上に發表された讀者の住所氏名は、本人の許可なくしては絕對にお教へしませぬから、その點御安心の上、どし／＼御利用下さい。



信仰体験談

原 應
稿 募

日露戦役が動機となつて

櫻 井 宇 市

私は本年五十四歳になりますが、今から三十一年前、未だ元氣旺盛の二十三歳の青年時代、日露戦役が起つたのでありました。宣戰の御詔勅は明治三十七年二月十日に下り、各師團へは動員下令となり、召集令狀は市に商する人にも、野を耕す人にも飛散いたしました。何處の町でも何處の村でも兵役に義務ある人は悉く召集されて行きました。その當時の明治大帝の御製が思ひ出されます。

『兒等はみないくさの庭に出ではてゝ翁やひとり山田もるらん』私は補充兵でしたが、早晩召集され男一匹國難に殉するの時を待つて

をりました。今日かくと丁度夏の旱に雨乞するやうに私は動員乞をしてみました。同年十一月二十日愈々充員召集令狀が下り、同月二十三日、越前縣江歩兵第三十六聯隊補充大隊へ入隊いたしました。その頃は旅順陥落前のことで私達の出動のための演習も中々激烈く殆ど晝夜兼行でいたしました。そして八十日の訓練を経た後、三十八年二月十一日紀元節當日、私は野戰隊第十四回目補充員に加はつて出征の途に上ることとなりました。

私の出征に當り、國元の親兄弟でさへも容易に面會に來られぬのに、私が入營前岐阜市

の或商店に商業見習のため奉公してゐたところの主人が態々岐阜市から遠い北國の寒い鯖江まで面會に見えました。その譯は主人の家は代々の念佛信仰者で私の出征に際し、第一に信仰心がなくてはどうしても鋒先が鈍るゆゑ、ひとへに御念佛を唱へてみ佛の御加護を念じ、もし名譽の戦死を遂げる場合にも來世は極樂淨土に大往生疑ひなしの太安心をもつて思ふ存分戦つて御國のため盡すやうにと、私を激勵にまゐつて下すつたのです。私はその主人の厚情の一言に痛く動かされ、只々六字の御名號を唱へて奮戦する覺悟をきめました。死して悔なき男子の本懷をそのときハツキリ身にそなへたのでありました。

萬歲場裡に江驛出發、沿線各驛は何れも盛大な見送り人の山でした。琵琶湖の水、石山の月、加茂の流れもこれ今生の見納めかと思ふと斷腸の思ひがいたしました。私は主人のはなむけの言葉を胸に浮べ、至誠一死以て君國に報ゆの決心を愈々高めるのでした。途中、京都驛で本山よりの御名號の御守り

を頂きましたが、戦友の中には出征に念佛は縁起が悪いと捨てた者もゐました。然し私はこのお守りを特に大切に肌身につけました。私の心には御國のためにと云ふことと、私をたつた一人で見送つて下すつた主人の言葉だけが盤石のやうに据ゑられてゐましたから。

二月十三日廣島驛着、宇品港より御用船に乘込み十七日大連上陸、二十四日遼陽着、同日乃木第三軍、第九師團歩兵第三十六聯隊第十一隊へ編入され、二十六日より愈々奉天附近の大会戦の幕が開かれました。

我中隊は二十八日沙勾子、三月一日四方原、二日瓢蛇子、七日造化屯、十日東城上と各戦闘に参加いたしました。中でも造化屯攻撃は大激戦を極め、前日迄二百名以上の人員が將卒共に死傷し、軍曹が中隊長代理となり、最後には上等兵以下七名となつたほどでありました。私は第一線の散兵戦に加はり、いつも通り唱名念佛をいたしながら、或は傳令勤務に、或は軍旗護衛に従事し、更に卑怯未練の振舞なく、たとへこゝで戦死をしても極樂

往生は間違ないと言ふ奮戦中、自分の携帯弾丸は勿論、戦友の死傷者の弾丸も貰ひうけて悉く使用し盡し、最後に背囊の中に入れてあつた弾丸を思ひだして右手を背にまはした



刹那、敵の砲弾眼下に落爆し、その破片が防禦用の外套を通して軍服の右ポケットに入れたあつた軍隊手帳を貫き、チヨツキ、シャツまで孔を穿つたのでありましたが、奇蹟的に

も身に微傷だに蒙りませんでした。この時ほどみ佛の御加護をしみじみ味つたことはなかつたのでありました。——私の加はつた戦闘大小併せて十數回、あの艱難辛苦の數々を思ふと、よく怪我一つせぬ身體を本國にもち歸ることが出来たのか、今だに不思議に思へてならないのです。とても人間業ではなし得ぬことです。たゞ念佛申すことによつてのみ佛のおまもりをうけたからなのでありました——凱旋後仕合せにも國家から勳章及び御下賜金貳百圓を賜はるの光榮を擔ひましたが、その賜金を元手に現在のところ、商業を開始し、爾來無事平穩に今日に及んでゐる次第であります。これ全くみ佛のお蔭と信じ日夜念佛を申しながら家業にいそしんでをります。が、私を信仰に導いて下すつた昔の主人、及びその信仰の體驗を味はひ得た日露戦役を思ひ出しては感激の涙に暮れてゐます。人間は生死を度外したほんたうの信仰に生きるときはじめて、何事もなし得る力が出て来るものだと思ひます。

運命と共に

江山伸三

るとの一歳の久しきを思へば何たる、不幸の連鎖かと歎じたくくなります。

斯ふした人生悲哀のドン底に陥つて七轉八苦の生活の中に生きて來た私です。あらゆる肉親の「死」に直面して悲しさ、苦しさ、淋しさを骨のシン迄ひし／＼と感じさせられます。ときたま其のやるせなき寂しさから來る無常觀は實に切々なるものがあります。

一體私達は或不幸に遭遇しますと、なるべく其の不幸からのがれ様とあがきます。而し何程もがいても其の不幸と云ふものは死神の様に其の人に附きまとふものです。そうして其の人がもがけばもがく程不幸の度合が擴大され延長されるものです。そうしてこの不幸の擴大に堪へられないと、そこで始めて「えゝまゝよどりせなる様にしかならない人生だ」と半ば絶望的にあきらめきれない諦めの朝夕を毎日送迎してゐるものです。目に見えない或大きな力を假りに運命と云はしむるなら、これたしかに運命に屈從せられた形だと思ひます。だからあきらめ様として其實なか

小さい時から身體が殊の外弱かつた私は両親の厄介をかけたことは人一倍でした。ごく小さい時は常に腸を痛めては下痢をする云ふ始末で或時は一家晩餐に卓を圍んでゐると飯臺の上で嬉々としてゐたのが突然下痢をやつては家中大騒動を演ぜしめることは度々だつたと聞かされてゐます。十四歳の時日本位吸血蟲病で大學病院に入院して生死の間を彷徨してゐましたが、常に私の看病に就て夜の間も寝ずに細心の注意を拂つて呉れました當時の母の心痛は非常なものだつたと思ひます。私が治療つた其年の暮病床にあつた母は、丁度大正天皇のお崩御遊ばされました十二月廿五日の朝安らかに息を引き取りました。母が亡くなつて間もなく私は第二の義母に

つかへねばなりませんでした。其の時には既に兄弟は皆死んでゐました。父が亡くなつたのは私が十八歳の時で義母が來まして三年後でした。所がこのたつた一人の義母が昨年の十一月突然腦溢血を起して以來半身不隨にて約一ヶ年を経過しました。今日でも尙ほ大小便もオカワにて用を足してゐると云ふ始末で一向回復の見込が立ちません。靜かに考へて見ますに、世の中は實に面白いものだと思ひます。四人兄弟の末子として生れ而も身體の弱い私が今では戸主として親兄弟の墓前に額づかねばならぬ運命の數奇な半生を思へば實に感慨無量なるものがあります。幼にして祖母の死に遭ひ少にして兄弟の喪に服す。長じては亦々父母の骸に見え、今義母の重患に侍

なかあきらめきれない。其處で人間一切の不幸がわだかまつて其の人を悲劇の主人公にする。

又、中には反動的に今度は其の運命に向つて挑戦の態度をとる。而し私等が運命に對して幾何の戦を挑み得るやそこぶる疑問です。どうしても私達の力では運命に對しては矢も双も立たないのです。不可抗力です。赤ん坊も同様です。斯う悟つて眞に諦めの境地に没り行かふとするこの運命と偕に生きて行く同化の姿こそ眞の圓滿なる自己完成への第一歩だと思ひます。尼子十勇士の一人たる山中鹿之助が月を拜して吾に七難八苦を興へ給へと自ら進んで不幸の總べてを吾一身に集中せしめて運命と偕に平行して行かうとするあの同化の限りなき尊い姿を發見することが出來ます。

これを知情意に置きかへてもうちよつと具體的に申述べますならば、私が右に運命を一つの目標としましたが、即ち運命から逃れ様とするのは人の情だと思ひます。私達の本性

と云ふものは情の心でどうにかして不幸からのがれ様々とのみ吸々としております。而し中には運命と逆行して挑戦の態度に出る。

これが意の心かと思はれます。そうしてどう



しても抗し得ぬと悟り運命と同化して行かふと云ふ態度に出た時が即ち知の心に到達した眞に人間完成の域に達した、圓滿なる聖者と云ふべき悟りの人だと、斯う私は観じてゐ

ますが、これはほんの私の過去の體驗から割出した愚感である事を御承知置き下さい。

總じて「私達の心には二つの矛盾した感情があつて、或人が不幸のドン底にあへいでゐると非常に同情して可愛想だと云ふ心が動いて来るが其の人が一躍立身出世をするとなんて反對に何となく物足りない様な心持がする。少し誇張して云へばもう一度その人を同じ不幸に陥れて見たくなる」と芥川龍之助氏が云はれてゐる様に正しく此の通りで私達の心は實に矛盾だらけだと思ひます。私は假りにこの同情する心を「善」と名付け、もう一つの不幸に陥れたいと云ふ心を「惡」と呼稱してもう一度他の方面から宗教と云ふものを眺めて見たいと思ひます。私達には斯うした善惡二道の心を先天的に兼ね備へてゐるものです。だから惡人でも善人としての清いタネはあるもので、善人必ずしも善人ならず、惡の芽は免れ難いものと思ひます。要は其の人が如何に善惡二道をよりよくいづれの方面に行使したかにある。淨土門の上からして

「善」を活かすことは先づ「惡」を屈せしめると云ふ行き方で、私達總てのものが十惡五道の凡夫人である。如來の前で私は善人でありますとどの面して見ることが出来ませう。佛の前では私達は赤子以上の一文不知の愚鈍者だ。と斯うして己を先づ屈せしめ而して今度は反動的に善の心が飛躍するものです。例へば尺とり虫が伸びん爲めには先づ己の體を縮める様に己を地上に強くたゞきつけた後に始めて自己發展が期せられるものと思ひます。己を屈する、これ即ち己の本體をつくづく見つめた時で、前例で云ふ運命との同化を意味するものです。而し斯うした己の心をタキつけて呉れるもの、惡を屈せしめて呉れるものを私達は考へまするに、この力この威光こそ佛陀の力、如來の大慈と思ひます。己の愚さ、拙さ、醜さ、汚さ、をしみつゝと味つて自己のほんとうの心の惡を見通した後始め、如來の助を欣求する一念を發するもので、ここに「淨土」の單信南無するほんとうの心持があるものだと思ひます。

翻へつて私が極貧の生活の中に義母を看病するに當つてこの如來の慈光を仰ぎ見ることになつて私の心にサンとした一脈の光明を齎らして呉れます。これが心となり形となつて「少しでも義母の心配を省く様にと心を配り、一日でも一刻でも長いきして戴いて御恩報謝の萬分の一なりとも果させて戴く」と身をかゝめて看病して行かうと云ふ心持が動き

つゝある現在の私を思ふ時ほんとうの人生、ほんとうの暮し方生き方を見出した様な氣が致します。斯うした心持を持つて暮すことが出来たなら明日は屹度朗かに愉快にたのしく日をすごさして戴く事だらうと思ひ一層以て精進の途にいそしむことが出来ると思ひます。

最進歩した 純正頭腦藥

頭痛に



頭痛に一番
頭痛に無害

頭痛で頭がワレル程カンカンしたり、眉間の邊りが針で刺される様にチクリチクリと痛んだり、又頭痛と云行かなくとも、何となく頭が重くてボンヤリしたり、クシヤクシヤしたりイライラしたり、或は過度の讀書、執務、裁縫、徹夜映画、觀劇後等で心身の疲勞を感じた時等、スグに「ノーシン」を服用せられよ。今「ノーシン」をのんだ事さへも、思ひ出さない程キレイに痛みは消え失せて、それこそ暗闇から抜け出て来た様に頭はハツキリと明快になり、思ふ存分、愉快に、事務勉強、讀書、家事、裁縫等を續けることが出来る。論より證據スグ試みられよ。藥價は三十錢、五十錢、一圓。全國の藥店やデパート藥品部にて販賣す。

町京區東市原古名
社會名合郎太長川荒 元選製

淨土の實現

— 佛說阿彌陀經講義 其四 —

中 村 辨 康

(九) 來迎見佛と云ふ事實

今から三十幾年も前の話である。

(本文再出)
一心不亂、其人臨
命終時、阿彌陀佛、
興諸聖衆、現在其
前、(來迎)

「見神」と云ふ事が流行のやうになつて、誰も見た彼も見たと、夫々自分の宗教經驗を發表した中には新しい宗教を樹立しようとしたものもあつた。

それ等も段々泡の消えて行くやうに、もはや世間から忘れられて仕舞つて居る。

其當時私達の間に好んで讀まれ、そしてそれが最後まで残つたのは、綱島梁川氏の「見神」が本ものであり、間録「回光録」などは今以て感銘の深い書物である。隨て夫れ丈綱島氏の「見神」が本ものであり、溫健な主張でもあつた。それは自分の體驗に照らし合せて佛教や基督教などを眺め返したのだから、少しも偏執的な處がなく、自由に宗教を語ることが出来たのであつた。

あの當時の「見神者」の中には、此頃の類似宗教に見るやうなインチキな者もありはしたが、それでも今のやうな物質主義なものではなく、精神主義的であり、且つ宗教的でもあつたやうである。夫れに比較すると、此頃の類似宗教は全くあくどいものである。自分の見神的宗教經驗を基礎とし

見性

本當の自分を知ること。

見佛三昧

阿彌陀佛に融合すること。

來迎

阿彌陀佛が來り迎へると云ふ宗教經驗。

諸行往生

雑多な善事を行ひそれを淨土への資糧として往生せんとすること。

化土往生

眞實な淨土でなく、眞實な淨土へ行く途の中間世界に行くこと。

不賴來迎論

臨終の來迎を必要としない説。

三願三機三往生

第十八願 他力念佛 難思議

第十九願 自力念佛 難思議

第二十願 諸行念佛 難思議

第二十一願 諸行念佛 難思議

第二十二願 諸行念佛 難思議

ない代りに、物質的な神の媒介者を以て任じて居るのだから誠に物すごい至りである。

綱島氏の「見神」は數名の見神者と群を異にして、物質的な神の形を見たのではなく、姿なき「神其者」に觸れて火花を發したものであつた。禪宗流に云へば「見性」であり、淨土教的に云へば「見佛三昧」である。

今ま阿彌陀經に説く「來迎」——即ち阿彌陀佛が、念佛する者の前に「現在」することは、眞摯な信仰厚き者の屢々經驗するところの「見佛」であり、「見神」である。

信仰淺き者にとつては平生に經驗することが出來なくとも、今ま正しく死に直面する眞剣な時に臨んでは、屹度經驗すべき宗教經驗であるから、今は特殊な厚信者の場合を除いて、必然的な「臨命終時」の經驗事實を「來迎」として取り出したのである。

だから「一心不亂」と云ふ條件さへ具備すれば誰でも平生に於ても經驗し得らるべきものでもある。否な信仰の事實からすれば、さうした特別な經驗としてでなく、念佛する時、誰でも認識し得らるべき至つて平凡な事柄でもある。「三昧」と云ふやうな特別に精神の統一された純粹状態にならなくとも、少し觀察して見れば念佛信者である限り、何時でも誰でも何處でも認めらるるもので、それが唯だ臨終と云ふやうな場合に一層ハッキリ確認せられたと云ふ道のものである。その事は幾多の「往生傳」に示されたものでもある。

然し或る古人の見解に依ると、此の「臨終來迎」を、諸行往生若しくは自力念佛者の化土往生の時だとし、眞實の信仰をもつ者は、必ずしも「來迎」を待つ必要がないとして、不賴來迎論を述べ、三願三機三往生の區別を立てて居るが、然し此「來迎」は念佛に伴ふ宗教經驗の事實であつて、必要とか

像類の佛

木佛金佛のこと

必要でないとかの問題ではない。

其「來迎」の時の「見佛」が若し像類の佛即ち人間のやうな姿をした佛なら謂ゆる「化佛」に過ぎないから「往生」に就ての差等が云はれないこともないが、凡ての「來迎」を悉く「化土往生」の條件として、程度の低いものにして仕舞ふのは甚だ當らない事だと思ふ。

法然上人の法語に

念佛往生の人は報佛の迎へにあづかる。雜行の人々の往生するは必ず化佛の來迎にて候なりと「來迎」と云ふものにも眞偽のあることを云つて居られる。

また一面から見ると、不頼來迎論は餘りにも自分を買ひ被り過ぎて居る。念佛と云ふ事實を信仰と云ふ心理から離して、雲の上に置いて居る感がある。

則ち念佛する者に取つて阿彌陀佛は決して離れて居ない筈である。如來慈光の中の生活が念佛信仰の生活である限り、佛と共に起き佛と共に眠るのが純粹な信仰人である。して見れば其人に取りては不斷の來迎見佛が認識されて居る筈である。だから臨終には有つても無くてもよいと云ふものではなく、必ず有る可き筈のものであり、無くてはならぬものである。それをことさらに「不頼來迎」と云ふ如きは全く以て云ひ過ぎに過ぎない。

「念佛は不離佛值遇佛のことだ」と云つた聖光上人の言葉は、正しい信仰體驗に依つたもので、誰でも是認しなければならぬ念佛の事實である。

佛と離れて居る念佛はない。若し離れて居たら念佛ではないからである。既に佛と離れて居ないならば「常に佛に値遇して居ると云ふ認識がなくてはならぬ。心眼に見える見えないうに拘らず「目前に

不離佛值遇佛

佛と離れず何時でも佛と遇つて居ること。

現前

前に現はれること。

佛あり」てふ氣持のない念佛はあり得ない。即ち法然上人が

若し人、佛を念すれば、阿彌陀佛常に此行人のところに來りたまふ。

と云つて居られる通り、佛と離れくゝの念佛と云ふものは無い。其感じの上では厚薄深淺の差はあらうとも、常に「來迎」を受けて居るのが「念佛の信」である。其上に「應聲即現」と云ふ言葉さへある。念佛の聲に應じて佛の現前することを感ずることは「來迎」でなくて何であらう。それが平素は臆氣であつたが、臨終と云ふやうな眞剣な時に、一層強く確認せられるのは念佛人に取つて當然な事である。無論臨終の來迎なくしては自分の信仰は確定的なものでないと云ふのではない。唯だ念佛信仰には必然的なものであると云ふ迄である。然るに、それあるものは正しい往生でなく、第二義的な化土往生であると斷するのは全く少し行き過ぎて居る。もつと素直に經典を味ははれないものであらうか。

素直に阿彌陀經の此文句を味つて見たら何うであらう。理窟でなしに自分の念佛の事實に照らし合せて見たら「來迎」と云ふ問題も直ちに納得の出來ることである。但し念佛の事實と云つても、其處に自力的な氣持、他力的な氣持に依つて大きな相異のあることは云ふ迄もない。

(一〇) 自力と他力との相異

農村の自力更正と云ふ問題から、他力本願ではいけないと云つて、農村の復興は政府の補助などを當にしないで自力で頑張れと勵ました時、盛んに「他力本願」と云ふ言葉が使はれたが、宗教上に云ふ「他力」と云ふ言葉は決してかゝる横着な據り掛り主義を云つたものではない。

淨土教に云ふ「自力他力」は、自分の力を買被つて居るか、若しくは自分の無力さを痛感して居るかの區別に依つて云はれたもので、其奥には佛教の「緣起」と云ふ世界觀人生觀に對する態度が根柢をなして居るのである。

例へば私が今印刷物を讀んで居ると假定する時、之は自力で讀んで居るか、他力で讀んで居るか、と云ふ見方が問題である。若し自力で讀んで居るなら、眞暗な處でも讀めるか何うか。云ふ迄もなく太陽の光とか電燈の光とかがなくては讀めない。では太陽の光や電燈がありさへすれば讀めるかと云へばさうでもない。私達に讀む氣がなく、また讀む氣があつても文字を知らなくては讀めないし、其上多少なり文字に對する理解力が無くては意味が呑み込めないから讀んでも讀んだにはならない。して見れば自力丈でも行けず、他力丈でも行けないと云ふ事になる。是が先づ第一段の見方である。然しもつとよく考へて見れば、自分が讀むと云ふ事實は、其見る視力も肉體があるからであり、其肉體は毎日食物を採つて居るからであるとするれば、家庭社會國家天地と云ふやうな幾多の御蔭なしには此身體もあり得ないのである。つまり他力なしには此の視る力さへもあり得ないのである。また一方には文字を家庭から學校から社會から貰ひ、理想を理解する力も色々な方面から貰ひ集めたものとするれば、自力は純粹な自力ではなく、實は他力の集積であり、社會恩力の凝結であるとして「一切の他力なり」と素直な氣持になつて自我の突張りをもせず、一切を感謝し、一切に報ゆる處あらんと喜んで努力をして行ける譯である。かくして此第二段の見方に依り私達に正しい人世觀世界觀の基礎が出来るのである。

衆緣

澤山な關係條件のこと。

此意味に於ての他力は「衆緣」を認めることである。一切の事々物々は一つの原因丈で現象するも

増上縁

事物の現象に對してそれを増上せしむる強力な條件。

本願

根本的な願ひ。

如來

素直に現はれたもの、如々來現とも云ふ。佛は人間に現はれたる完全な如來の姿である。

眞言陀羅尼

眞言は曼陀羅とも云ふ、秘密な言語のこと。陀羅尼も呪陀羅尼の略で秘密語のこと、秘密語の中に不思議な靈力ありとするもの。

のでなく、互に持ちつ持たれつ、相牽引し相關係して現象し生活して行くと知るのである。

だから之を正しく理解し、之を正しく整理して行くととき、逆縁を順縁に訂正することが出來、禍ひを禍ひとして終らしめず幸福への道への轉換資糧となし、幸福への足懸りとして大に努力しようと云ふ氣にもなる。之がやがて道德ともなり宗教ともなるのである。

然し尙ほよく考へて見ると、その衆縁の共通點は何であらうか、それは何れも私達を生かす爲であり、私達をよりよく生ず意味に於て、天地社會の絶大なる機構施設がなされて居ると氣付く時、其衆縁の綜合力は結局私達をよりよく生ず爲にのみ大いなる力として現はれて居るものであることを知る。此一切の縁の中の一強有力、此力こそは増上縁とも云ふべき根本的な力である。その恩力を「本願力」と仰ぎ「如來力」と仰げば、初めて宗教的な意味に於ける他力と云ふ事が分つたのである。

だから、私達の念佛する事に於ても、初めは自分の申す努力に頼む氣持が多いかも知れない。即ち眞言陀羅尼と云ふやうな氣持、一種の呪文と云つたやうな氣持で、念佛の六字の中に何か知ら不思議な靈力でもあるかの如く考へるかも知れない。さもないければ念佛と云ふことは阿彌陀佛の規定した條件だから、念佛して居ると何かしら特別に最負にして呉れる筈であると考え考へるかも知れない。即ち私が申して居るのだから、申して居る私の上に特別な恩寵が加へられ、私の現在及び未來を都合よくして呉れると云ふやうな考へが湧かないにも限らない。随つて澤山申せば申す程宗教上の貯金が出來、一層都合よくなると考へるかも知れない。

然し夫れは畢竟自分と云ふものを基礎にして居り、自分の申す力を頼む心があると共に、功利的な氣持を多く存して居る處に畢竟不純なものがある。

解脱 煩悩から抜けた自由な状態。
涅槃 煩悩なき安樂な状態。又は生きた死の世界から抜け出た絶対永遠の世界。
淨土 は此解脱涅槃の世界を云ふ。
無我 素直な自分となつたこと。
吳下の舊阿蒙 何時迄たつても進歩しない人のこと。即ち志の止まつた人のこと。
妄念 色々な邪魔になこゝろ。
三業 心と言葉と行爲との三。
願心 淨土を願ひ求むること。
願生心 願心と同じ。
決定往生 淨土を得る確信。
信機 自分の拙劣なることを知ること。
信法 念佛すれば本當

佛教の求むる解脱涅槃と云ふものは決してそんな功利的なものではない。元來功利的な不純な私達の氣持が無くなつた處を解脱と云ひ涅槃と云ふのである。無我の判つたところ、苦樂有無等の對立觀念の無くなつた、本當に卵に目鼻を付けたやうな純眞な人になつたところ、今迄の氣持がスツカリ悔ひ改められて正しい自分に改造せられたところに現はるゝものであるから、そんなに御都合主義な念佛はまだ本物ではない。自力的な氣持を捨て切つた、純粹に如來にすがらざるを得なくなつて呼びかける本心の叫びが念佛なのである。

本當に阿彌陀佛に南無するところ、其處には自力的な氣持は無い。實は自力とか他力とか云つたやうな觀念さへ起つては居ないのである。たゞ自分を捨てて如來を頼む心丈である。隨て念佛したあとで自分の氣持が自力的であつたか何うかを批判して初めて自分はまだ自分を頼む心が抜け切れて居ないとか何とか判斷する迄の事である。

無論私達は今迄自我中心で育つて來た人間だから、兎もすれば自分と云ふものが先きに立つて仲々自力的な氣持から解放されるものではない。だから容易には本當の信仰が味へないのである。と云つて念佛を放棄して仕舞つたら、何時迄たつても吳下の舊阿蒙で、下らなく人生を過して仕舞ふことにもなる。そこで何うしても求めに求め抜いて行く求道心が必要となる譯でもある。

法然上人も

もしよく稱名すれば稱名の徳として妄念自づから止み散亂自づから靜まり三業自づから調うて願心自づから發るなり。然れば願生の心少きにも南無阿彌陀佛、散亂の増す時も南無阿彌陀佛、妄念の起る時も南無阿彌陀佛云

に救はれると云ふことを知るこ

(本文再出)

其人終時、心不顛倒、即得往生、阿彌陀佛、極樂國土

(往生)

無上道 佛道とも云ふ、天地の大道である。行けども行けども行き詰りのない道、本當の人生のことである。

白道

暗黒な道でないこと、明るい道。

一念

一聲の念佛。

顛倒心

私達には次ぎのやうな四つの顛倒心がある。常倒心、何時も變らないと思つて居る。樂倒心、人生樂しむのが本當だと思つて居る。我倒心、俺と云ふものを第一とし

て居る。淨倒心、自分ばかりで居る。淨土に居る姿。

往生相

淨土に居る姿。

と云はれて唯だ念佛だに怠らなければ、何時かは「決定往生」の確信を得、正しい信仰を得るに至るであらうことを教へて居られる。

自力の角の折れる時、信機信法の宗教體驗を得るに至る。かくてこそ初めて「他力」の意味、「來迎」の意味も判り、廣い意味での「見佛」も體認されるのである。

(二一) 軌道に乗つた信仰

一度信仰に入ればもう軌道に乗つたのと同じである。

信仰の軌道に乗つた姿が「往生」であり、また謂ゆる「無上道」に足を踏みかけたことであり、白道坦々と開け行く事である。

法然上人は「一念に一度の往生を當て置き給へる本願なれば」とも云つて居られる。即ち確信に依て一心顛倒せざる「平安な姿をよく吟味すれば、完全な「往生相」とは云はれない迄も、一分の往生であり一分の更生である譯である。少くとも私達の生活が心の持ちやうに依てかなり強く變化されて行く事實を見る時、念佛に依て「一念に一度の往生」と云ふ事の納得が出来る筈である。

云ふ迄もなく私達は常に心が動搖して居る。動搖の姿が即ち顛倒の姿である。隨て私達の生活は常に不安定である。だから信仰と雖も或は有るが如く或は失はれたるが如く「若存若亡」の状態であるが、然し一度「南無阿彌陀佛」と佛を念する時、私達の心は直ちに佛の中に融合し統一されて仕舞ふ。即ち顛倒なき心が現はれて來るのである。茲に常念常不退の念佛が必要される譯でもある。かの觀世音菩薩が寶冠の中に阿彌陀佛を頂き、不動明王が佛の座なる蓮臺を頭の上に頂いて居るのも、常

若存若亡

存するが若く亡
きが若しと讀む

常念常不退

常に念じ常に忘
れないこと。

菴羅園

釋尊五精舍の一
菴設羅女の獻じ
たる園林である

華座

佛の說法したも
ふ場所。

念常不退の念佛を表象したものである。だから觀音様や不動様のやうに常に佛と離れない人であるならば、現在生活に於て既に淨土に往生しつゝある人と云つてよい。法然上人も「念佛の草庵隘しと雖も菴羅園の華座に同じ」と念佛生活を讃仰せられて居られる。

然しくども云ふやうに私達の生活は色々複雑して居る、仲々一色に統一されて居ない。常に佛と離れず、常に値遇して居られないのは誠に憾みである。だから段々阿彌陀佛に染められて行く修養が必要である。

阿彌陀佛に染むる心の色に出でば秋の梢のたぐひならましと云はれた法然上人の歌のやうに、一度染まつたら夫で事足りると云ふ譯でなく、度重なる霜に遇つて紅葉の色の濃きが増すやうに、念佛に依て常に「心不顛倒」を経験し、亂れ勝な私達の心を馴致して行くならば、遂には無量壽無量光の覺りを得て、煩惱からの解脱と安らけき涅槃とを味ひ、限りなき自由の喜びをも獲得する事が出来るであらう。だから法然上人も其最高の喜びを得るべく念佛をすすめられて。

極樂につとめて早く出で立たば身の終には参りつきなんと歌はれて居る。

茲に現在及び未來を通じての淨土の實現が念佛の中にあり得る。(つゞく)

(尙ほ此の往生の問題に就ては云ふべき事が多い。限られた紙面では到底語り盡されないから、更に次回に於ても少し申し上げたい。)

編輯後記

◇正月號は例月よりもずつと餘計に刷つたのですが、多部數購入の御申込みが豫想外に殺倒し、發行と同時に全部賣切れてしまひ、遺憾乍ら御断りした向が澤山御座いましたので、改めて誌上より御わび申上ります。今後はこの経験に鑑みて充分用意いたしますが、多部數御購入の分は成可く前月十五日迄に御申越願ひたく存じます。

◇本誌より本誌に始めて御執筆下さつた諸先生の中、上中甲堂氏は清水市の鈴與商店支配人として實業界に活躍せられ、能率研究に於いては本邦の第一人者、しかもその研究の結果能率増進の根本的契機は働くものの信念、信仰にあると云ふ尊い體驗を得られ、本家本元アメリカの學界に多數の讃成

者を得られてゐると云ふ。

◇岩野喜久代女史は淨土宗淨閑寺岩野眞雄氏の夫人で、慈光學園の庶務主任として毎日可愛い子供達の御世話になされる傍、歌道に精通せられ一ヶ月四十首五十首の歌を作つておられ、佛道修業と歌道との一致を身を以て實行せられておる方、與謝野晶子女史が「喜久代さんは地面にしつかり足をつけてゐる危氣の少しもない生活者」と折紙をつけられております。今後とも引續き御執筆願ふことになつております。

◇本誌の編輯には絶えず最善の努力が拂はれてゐることは、毎回の覽で報告する通りですが、次號からは、編輯部に一大改革を斷行し、一寸他誌の編輯部には見られない編成を以て當ることになりました。この計畫は必ずや讀者をより以上に満足せしむるものがあると思ひます。鬼が出るか邪

が出るか、刮目してお待ち下さい。

◇近く本會は「法然上人法語抄」を發行します。これは信仰實生活に直に當てはまるやう、上人一生の御法語を分類整理したものです、是非共一本を座右にお具へ下さい。

◇なほ本會の出版物に對する御申込み數が近來一段と飛躍しましたので、事務の整理上、次の諸點に御注意願ひ度いのであります。今後本會發行の書籍で本誌上へ廣告した分は全部送料を含めてあります。本誌以前の「淨土一誌上」による購讀御申込みは必ず送料をお添へ下さい。代金引換郵便は一切お断り申します。切手代用は一刻割に願ひます。なほ御送金は振替が一番確實で便利ですから、それを御利用下さるやう。(振替番號は東京八二一八七番)です。

淨土 二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十二年二月一日發行
昭和十二年二月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

東京市本所區千歲町二ノ一八
印刷所 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二ノ三
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料一錢)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」及び月刊新聞「法然續仰」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

法然上人の信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 三十四錢 (送料共)

法然上人の辿り給ひし信仰の道こそわれらがしるべなり！

信仰を求め宗教に憧れるのは人間本來の姿である。古來宗教界の巨人と仰がれる聖者は悉くこの人間の本來の姿を最も輝かしく明瞭に現はした人間の精神の鏡であり、また萬人の中に潜む信仰心の萌芽に開花の時を與へた慈雨でもある。故に若しそれ等巨人生活の内부를覗ふことが出来るなら、我々は日常無意識に捨て、省みなかつた生活の瓦礫の中に、突如燦然として輝く向上の珠玉を見出し、貪しく思はれた己れの生活が豊富な内容に充たされてゐるのを再發見して驚嘆するのは當然である。

法然上人の巨大にして無双な求道生活、信仰生活の迹を慕ひ、その法悦にひたらんとするも時に現代生活の汚濁を洗ひ清め清淨なる人間本來の姿に立返らんがために外ならぬ。

著者の言葉——精魂をつか

つらしめて求めに求めた三十

年の求道生活とその當時のあ

らゆる階級の人達を魅し盡し

た四十年の信仰生活とが何ん

なに近代人の胸を突くかを振

りかへて見たいと思ふ。

法然上人

大正大學教授 大野法道著 四六判 拾七錢 (送料共)

法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するがして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その嫺々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかぬ！

◆ 法然上人鑽仰會 發行所 ◆

文部省囑託 國定教科書筆者
井上千圃先生 責任指導

本日。へ。習字。

肉筆で
通信教授

A red-toned illustration of a man in a suit and tie, sitting at a desk and writing on a piece of paper with a pen. The man is looking down at his work. The background is a solid red color. To the right of the man, there is vertical Japanese text. To the left, there is more vertical Japanese text, partially cut off.

作品
付半
入會規則書進呈

日本ペン習字研究會

振替東京四一八五三番

定價金十錢（送料一錢）